

福岡市埋蔵文化財年報

VOL.28

—平成25(2013)年度版—



2014

福岡市教育委員会

序

福岡市では、文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の適切な保存と活用を図ることを目的として、公共及び民間の各種開発事業の事前審査、記録保存のための緊急調査、また重要遺跡確認調査等を実施しております。

文化財部は平成24年度より教育委員会から市長部局の経済観光文化局へと移り、教育委員会の補助執行として、文化財活用を含め多岐にわたる文化財保護業務に取り組んでおります。

本書は、平成25年度における埋蔵文化財保護行政の概要を報告するものです。開発事業に起因する緊急調査件数は、平成17年以降減少をつづけてきましたが、25年度は前年度より微増しています。平成25年度は消費税増のかけ込み需要の影響で民間の事前審査件数は過去最多となりました。発掘調査一件あたりの規模は、民間、公共とも、小規模開発の増加傾向が続いている。今後とも埋蔵文化財保護業務については適正で迅速な対応を進めたいと思います。

本書が文化財保護に対するご理解の一助となり、また学術資料として活用いただければ幸いです。

平成26年12月26日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

例 言

- ・本書は、埋蔵文化財審査課、埋蔵文化財調査課、文化財保護課、大規模史跡整備推進課が平成25年度に実施した各種開発事業に伴う事前審査と発掘調査の概要及び本報告、ならびに新指定文化財の概要について収録したものである。
- ・本書に記載ある25年度調査のうち、調査番号1308, 1309, 1320, 1323, 1329, 1337は、この年報をもって本報告とする。その他、本年度別途、本報告書が刊行されている調査については調査概要を割愛している。
- ・Vの各調査の概要及び調査報告は各調査担当者が分担執筆した。VIについては文化財保護課（水野哲雄）が執筆した。
- ・上記以外の執筆並びに本書の編集は佐藤一郎が担当した。

表紙写真：金武古墳群第8次調査現地説明会風景と比恵遺跡群第131次調査で検出された井堰状遺構

目 次

I	平成25年度文化財部の組織と分掌事務	2
II	開発事前審査	3
III	発掘調査	6
IV	公開活動	6
V	平成25年度発掘調査概要・報告	7
VI	平成25年度新指定および新登録文化財	55
	報告書抄録	63

I 平成25年度文化財部の組織と分掌事務

文化財部 文化財部の組織と分掌事務

51

文化財保護課 10

- 運用係（事3、文1）
 - 整備活用係（事1、文2）
 - 文化財調査普及係（文1、学1）
- 部の総括、文化財施設の管理
史跡の保存・整備・活用、文化財関係団体との連絡調整
文化財保護審議会、文化財の調査、普及事業

大規模史跡整備推進課 5

- 福岡城跡整備係（事1、文2）
 - 鴻臚館跡整備係（文1）
- 福岡城跡の調査・整備、課の庶務
鴻臚館跡の調査・整備

埋蔵文化財審査課 9

- 事前審査係（文4）
 - 主任文化財主事（文1）
 - 管理係（事3）
- 公共及び民間開発事業に係る埋蔵文化財の事前審査
埋蔵文化財審査課・埋蔵文化財調査課の予算・決算、経理、課の庶務

埋蔵文化財調査課 20

- 調査第1係（文5）
 - 主任文化財主事（文4）
 - 調査第2係（文6）
 - 主任文化財主事（文3）
 - 主査（文1）
- 課の庶務・主に東部地区の埋蔵文化財の発掘調査及び保存
国庫補助事業総括・主に西部地区に係る埋蔵文化財の発掘調査及び保存
今宿古墳群保存担当

埋蔵文化財センター 7

- 運営係（文2事2）
 - 保存分析係（文2）
- 施設の管理運営、埋蔵文化財の収蔵・保管・展示等、教育普及
埋蔵文化財の保存・分析

事：事務職 文：文化財専門職 学：文化芸能

埋蔵文化財審査課、調査課の職員構成（審査課管理係は事務職。他は文化財専門職）

◇ 埋蔵文化財審査課長	米倉秀紀
管理係長	和田安之
係員	横田忍 川村啓子
事前審査係長	加藤良彦
係員	森本幹彦 松尾奈緒子 比嘉えりか
主任文化財主事	佐藤一郎

◇ 埋蔵文化財調査課長	宮井善朗
調査第1係長	常松幹雄
主任文化財主事	瀧本正志 吉武学 加藤隆也
係員	久住猛雄 阿部泰之 大森真衣子 小林義彦 山崎龍雄
埋蔵文化財専門員	井澤洋一
埋蔵文化財調査員	佐々木蘭貞
調査第2係長	榎本義嗣
主任文化財主事	荒牧宏行 屋山洋 大塚紀宣 井上蘭子
係員	福薗美由紀 清金良太 吉田大輔 松村道博
主査（今宿古墳群担当）	杉山富雄

II 開発事前審査

1. 概 要

本市では、土木工事等の各種開発事業に係る埋蔵文化財の取り扱いについて、開発事業計画地における埋蔵文化財の有無を確認した上で、保存に係わる協議等を行っている。

公共事業については、関係機関・部局に次年度の事業計画の照会を行い、埋蔵文化財の保存上問題になると判断される事業についてはその取り扱いについて協議を行っている。

民間の開発事業については、都市計画法に基づく1,000m²以上の開発事業、建築基準法に基づく建築事業等を対象として事前協議を求めている。また建築等の計画策定段階での照会にも窓口やファックスで応じ、埋蔵文化財の保存上の措置について必要な指示を行っている。平成24年8月よりは本市ホームページにて、包蔵地外町名リストの公開を開始し、利用者の照会の便宜を図っている。

2. 平成25年度の事前審査

平成25年度の事前審査件数は、表1のとおりである。平成19年からの増加傾向で、7年間で810件弱・43%増加している。22年からは高止まり状態で、減少には至っていない。

申請内容

公共事業に伴う依頼は362件（平成25年度より公共汚水枠は個別に申請、平成26年度227件）で、内訳は表3のとおりである。事業者別では、国機関20件（5%）、福岡県3件（1%）、福岡市335件（93%）、その他4件（1%）で、国機関は福岡空港整備事業を控えて国交省11件を含め4件の増加をみている。事業別では水道・電気等257件（93%）、道路30件（8%）、学校関係17件（5%）、公園9件（2%）、空港関係9件（2%）、住宅を含めた建物17件（5%）、そのほかの開発が23件（6%）で、道路事業が4件（1%）と減少している。公有財産の売却等の土地調査にかかる事前審査依頼は15件（4%）である。事業照会件数は1,220件で、昨年度より41件3%減である。事業別内訳は上下水道958件（79%）、140件約17%の増加で、汚水枠の個別工事を集計に加えたことによる。道路は81件（6%）の2件減、住宅を含めた建物35件（3%）も7件減で同様である。学校79件（6%）は15件の減で、公園19件（2%）も22件減、空港は8件（1%）4件増である。

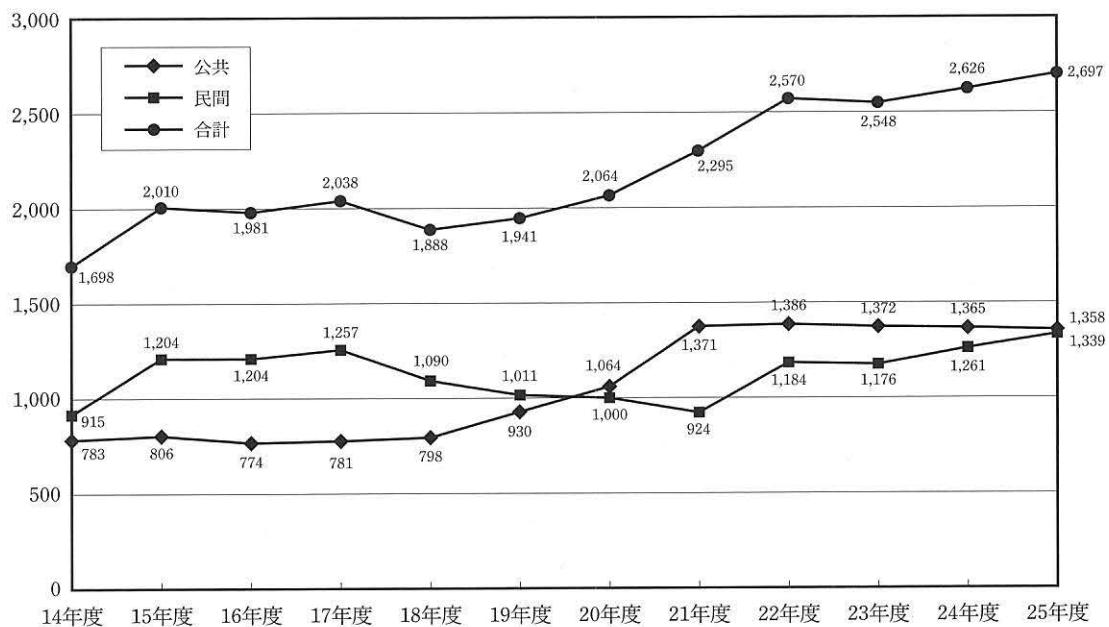
民間事業1,339件の届出内容は、事業別では個人住宅400件（30%）、戸建住宅193件（14%）、共同住宅178件（13%）、宅地造成38件（3%）など住宅関連事業をあわせると871件全体の65%で前年と同じ比率である。個人専用は昨年から45件、13%増である。消費税増に伴うかけ込み需要によるものであろう。住宅以外の事業としては、その他の建物（事務所、診療所、福祉施設、倉庫等）132件（10%）、土地売買に伴う審査依頼は64件（5%）、看板・アンテナ等のその他の開発30件（2%）である。店舗は46件（3%）で、前年とほぼ同じである。区画整理計画地の事前の調査依頼は13件である。

区別に見ると博多区366件（24%）、早良区342件（22%）、南区233件（15%）と前年と順位は変わらない。博多区で71件24%増、早良区で56件20%増、一方で南区18件7%減・東区15件9%減が目立つ。

表1 平成14～25年度事前審査件数推移

事業	内訳	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
公共	事業照会審査件数	783	671	662	668	665	769	862	1,143	1,191	1,181	1,181	1,220
	申請件数		135	112	113	133	161	202	228	195	191	184	135
	審査件数計	783	806	774	781	798	930	1,064	1,371	1,386	1,372	1,365	1,335
民間	窓口照会件数	4,540	4,662	5,842	6,126	8,309	7,226	6,144	5,555	6,225	6,791	7,195	6,491
	FAX照会件数			1,499	2,296	3,354	3,990	3,537	3,729	4,584	5,716	7,170	7,999
	照会件数計	4,540	4,662	7,341	8,422	11,663	11,216	9,681	9,284	10,809	12,507	14,365	14,490
申請(審査)件数	969	915	1,207	1,257	1,090	1,011	1,000	924	1,184	1,176	1,261	1,339	
公・民審査件数計	1,752	1,721	1,981	2,038	1,888	1,930	1,941	2,064	2,295	2,570	2,548	2,626	2,697

表2 事前審査件数推移表



指導内容

公共、民間各事業の事前審査の結果、事業者に指導した内容は表3のとおりである。次年度継続54件、取り下げ4件を除くと審査件数は1,666件で、前年より105件増。総括的に見ると書類審査での回答1,274件(76%)、以下踏査11件(1%)、試掘381件(23%)で、踏査以外は増加している。審査結果は開発同意195件(12%)、慎重工事1,174件(70%)、工事立会212件(13%)、発掘調査77件(5%)、要協議(設計未定、売却予定で遺跡ありなど)8件で、慎重工事が大きく増加している。

試掘調査・確認調査

包蔵地内で行われる確認調査、包蔵地外で行われる試掘調査(以下試掘調査と総称する)は東区36件、博多区127件、中央区4件、南区70件、城南区38件、早良区102件、西区66件、総計443件で、遺跡数は186遺跡である。10件以上試掘した遺跡としては元寇防壁11件、箱崎遺跡14件、博多遺跡群15件、那珂遺跡群16件、雀居遺跡10件、有田遺跡群27件、原遺跡11件、遺跡隣接地での試掘調査は51件であった。

試掘件数は昨年度に比べ17%増であった。博多区48%、早良区38%、西区22%増、南区はほぼ同数、一方で東区・城南区は14%減、中央区は8件から4件に減じている。

表3 平成25年度事前審査内訳

区名	事業	審査種別（書類審査・現地踏査・試掘調査）でみた判断指示の結果															区別審査件数			
		開発同意			慎重工事			工事立会			発掘調査			協議		審査	取り			
		書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	継続	下げ	公民別計	区計
東	公共	7	0	0	9	0	1	8	0	0	0	0	0	0	0	1	5	0	31	145
	民間	23	1	4	52	0	7	12	1	3	1	0	3	0	0	0	7	0	114	
博多	公共	3	0	5	34	0	5	7	0	0	3	0	1	0	0	0	3	0	61	366
	民間	18	0	8	130	0	30	49	0	20	11	0	28	0	0	0	9	2	305	
中央	公共	3	0	1	1	0	0	1	0	0	1	0	0	2	0	1	0	0	10	27
	民間	4	0	0	8	0	2	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	17	
南	公共	5	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	233
	民間	6	0	13	123	0	39	22	0	5	0	0	8	0	0	3	0	0	225	
城南	公共	0	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	4	155
	民間	6	0	14	102	0	20	6	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	151	
早良	公共	1	1	0	17	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	22	342
	民間	23	1	14	181	2	52	11	0	14	0	0	13	0	0	0	7	2	320	
西	公共	6	1	0	10	0	0	2	0	80	0	0	0	1	0	0	2	0	22	229
	民間	20	0	6	106	4	40	5	0	8	0	0	6	0	0	0	12	0	207	
小計	公共	25	2	7	74	0	9	20	0	0	4	0	1	3	0	2	11	0	135	1,474
	民間	100	2	59	702	6	190	107	1	50	12	0	60	0	0	3	43	4	1,339	
道路下水道局 公共污水井 (市内全域28件)					193			34											総計	
合計		125	4	66	969	6	199	161	1	50	16	0	61	3	0	5	54	4	1,724	

(*) 道路下水道局の公共污水井は複数案件が一括提出されるため、総件数と、審査結果の内訳のみを示す。

窓口等照会

民間業者等による窓口における埋蔵文化財の有無に係わる照会等は6,491件、ファックスでの照会は7,999件、あわせて14,490件で、前年度より125件の微増である。平成24年8月より本市ホームページにて、包蔵地外町丁名リストの公開を開始し、利用者の照会の便宜と照会件数減を図っているが、窓口件数は減少したものの、ファックス照会件数は22年度以降毎年1,000件前後増加している。各区別の内訳は、城南・西区を除いた各区は1,000件を超えており、最多の博多区と最少の城南区との差は724件である。ファックス照会では、包蔵地内1,597件(20%)、包蔵地隣接地内571件(7%)、包蔵地外5,831件(73%)で、この比率はこの5年間ほとんど変わっていない。

3. 埋蔵文化財包蔵地の改訂

本市では、試掘調査や発掘調査などの成果にもとづき、より正確な埋蔵文化財包蔵地範囲の実情に近づけるため、また、事前審査業務の効率を図るため、包蔵地・隣接地の改訂作業を随時実施しており、平成25年度は27件29遺跡で実施した。遺跡の範囲拡大は12件、縮小は4件あり、9件で隣接地の解除を行った。また、平成25年度には2遺跡の新規登録を行った。

III 発掘調査

1. 平成25年度の発掘調査

25年度の発掘調査件数は、表9に示したように、24年度からの継続事業4件、25年度新規事業43件の計47件で、このうち5件は平成26年度に継続である。文化財保護法第93、94条に基づく記録保存のための発掘調査43件のほか、重要遺跡確認調査1件（1337）、史跡整備に伴う調査3件（1222、1314、1334）を含んでいる。

47件の発掘調査総面積は23,875m²で、前年度に比べ件数は6件増加したが調査面積は20%減少した。（表6・7）。公民別では公共事業が3,315m²、民間事業が20,560m²であり、民間が86%を占めた。民間事業総面積は前年とは34%増加し、公共事業は77%の減少となっている（24年度から、国立大学法人関係の調査は民間事業扱いとしている）。今年度は圃場整備事業に伴う調査は行っていない。

個々の発掘調査の面積は、100m²以下が14件、101～300m²が11件、301～500m²が10件、501～1,000m²が6件、1,001m²～10,000m²が6件で、10,001m²以上の調査はなかった。300m²以下の小規模調査は25件（53%）、1,000m²以上の調査は6件（13%）で、前年度の同20件（49%）、5件（12%）とほぼ同じ比率である。1件あたりの平均調査面積は508m²、民間事業では500m²、公共事業で840m²である。区ごとでは（表8）博多区19件、西区9件、早良区9件、中央区3件、南区5件、城南区1件で、博多・中央・南区で件数が微増、早良区で5件、西区では7件減少している。面積では西区12,680m²、博多区6,264m²、中央1,636m²、早良区2,630m²、南区423m²で、西区では10,295m²の大幅減となる。これは伊都地区土地区画整理事業に伴う調査が終了したことによる。

なお博多遺跡群、箱崎遺跡などでは複数の遺構面を調査しているため、実際の発掘面積は増加する。

IV 公開活動

市民への公開を目的として、記者発表や現地説明会、体験学習および福岡市埋蔵文化財調査報告書の刊行等がある。平成25年度は西区金武古墳群第8次調査と博多区博多遺跡群第197次調査で現地説明会を実施した。

また市内小中学校の体験学習の一環として発掘調査や整理作業への参加を受け入れており、平成25年度は、福岡市立東光中学校・那珂中学校・高取中学校の3校を市内各発掘現場及び市内にある整理室において、職場体験学習を行った。公開・活用に資するための埋蔵文化財報告書刊行は、表10のとおり計35冊が刊行された。

表4 平成25年度福岡市現地説明会一覧

番号	調査番号	遺跡名	次	住所	現場担当者	実施日	見学者（人）	備考
1	1212	金武古墳群	8	西区大字吉武字七郎谷765-18 他13筆	加藤 隆 福園	H25.7.27	35	地元向け
2	1322	博多遺跡群	197	博多区綱場町151番地	井上 佐々木	H26.1.28	16	地元向け

V 平成25年度発掘調査概要・報告

調査概要・報告は表9の調査番号順に掲載し、位置番号は下ページの地図に一致する。また、各報文の図〔1. 調査地点の位置〕の（ ）内は、左から福岡市都市計画図図幅番号・図幅名称・遺跡番号・縮尺である。

表5 発掘調査件数の推移（ ）前年度からの継続件数

事業	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
民間	44 (4)	38 (4)	21 (6)	30 (0)	27 (1)	22 (2)	42 (4)
圃場整備	0 (1)	0 (0)	4 (0)	4 (2)	1 (3)	0 (0)	0 (0)
公共	33 (4)	29 (4)	16 (3)	16 (3)	23 (3)	19 (2)	5 (1)
合計	77 (8)	67 (8)	50 (9)	50 (5)	51 (7)	41 (4)	47 (4)

表6 発掘調査面積の推移 (m²)

事業	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
民間	15,184	17,651	11,190	15,649	6,175	15,333	20,293
圃場整備	21,000	0	0	9,774	1,984	0	0
公共	56,530	48,729	33,099	22,856	15,322	14,440	3,315
合計	92,714	66,380	44,289	48,279	23,481	29,773	23,608

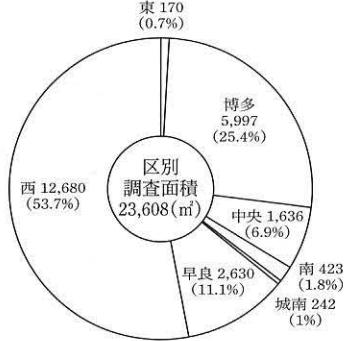
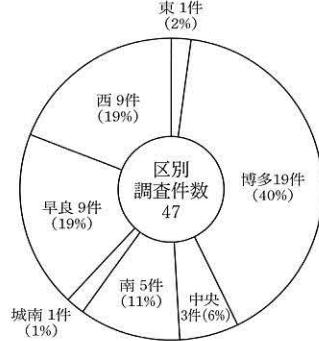
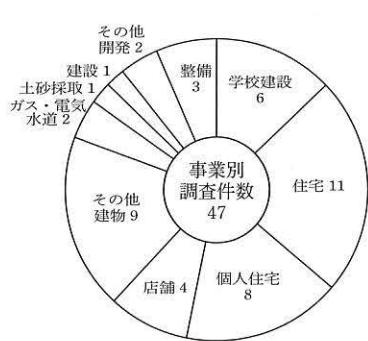
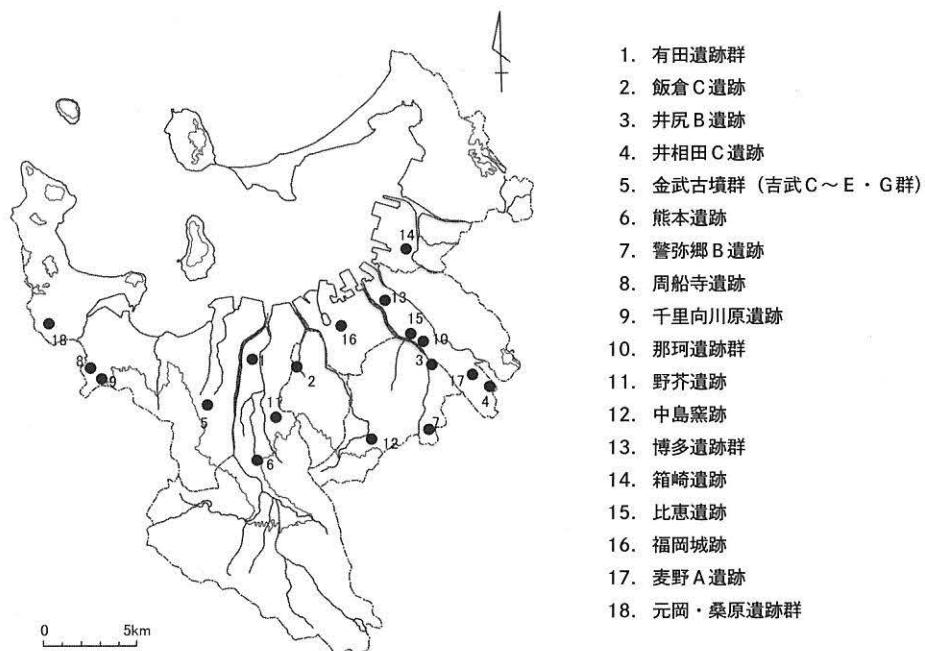


表7 発掘調査内訳



平成25年度発掘調査地位置図

表9 平成25年度調査一覧（前年度からの継続含む）

調査番号	遺跡名	次数	調査原因	区	所在地	調査面積 (m ²)	調査開始	調査終了	遺跡略号	地点	位置番号
1103	元岡・桑原遺跡群	57	学校建設	西	大字元岡	6700.0	H23.4.12	H25.9.6	MOT		18
1212	金武古墳群	8	岩石採取	西	大字吉武字七郎谷765-1外9筆	10000.0	H24.7.10	H26.3.18	KYK	吉武C～E・G群	5
1222	福岡城跡	70	石垣修復工事	中央	城内1番1、1番2	430.0	H24.9.20	継続	FUE	上之橋	16
1235	那珂遺跡群	143	個人住宅	博多	東光寺町一丁目238、239	345.0	H25.3.13	H25.6.7	NAK		10
1301	比恵遺跡群	127	共同住宅	博多	博多駅南四丁目120番、120番3	359.0	H25.4.1	H25.6.14	HIE		15
1302	比恵遺跡群	128	事務所	博多	博多駅南6丁目19-2	109.0	H25.4.8	H25.5.16	HIE		15
1303	有田遺跡群	247	個人住宅	早良	有田一丁目32番11	203.0	H25.4.19	H25.6.19	ART		1
1304	博多遺跡群	195	立体駐車場	博多	冷泉町102、111、112、113、127	125.0	H25.5.25	H25.8.12	HKT		13
1305	有田遺跡群	248	個人住宅	早良	有田1丁目22番1の一部	68.0	H25.5.13	H25.5.31	ART		1
1306	元岡・桑原遺跡群	60	学校建設	西	大字元岡	271.0	H25.5.22	H25.8.29	MOT		18
1307	有田遺跡群	249	共同住宅	早良	小田部2丁目57	128.9	H25.5.27	H25.6.14	ART		1
1308	周船寺遺跡	22	店舗	西	大字千里425-1	90.0	H25.5.27	H25.6.6	SSJ		8
1309	井尻B遺跡	39	歯科医院	南	井尻4丁目172番12	57.2	H25.6.3	H25.6.18	IGB		3
1310	井相田C遺跡	11	共同住宅	博多	井相田二丁目3番7の一部、3番12	431.8	H25.6.10 H25.10.17	H25.8.21 H25.11.15	ISC		4
1311	那珂遺跡群	144	事務所	博多	東光寺町1丁目4、5、6、7番	32.0	H25.6.10	H25.6.14	NAK		10
1312	那珂遺跡群	145	浸水対策事業	博多	竹下5丁目562番1号	79.0	H25.7.1	H25.7.25	NAK		10
1313	博多遺跡群	196	校舎解体	博多	御供所町23番1号他	1600.0	H25.7.1	H25.10.24	HKT		13
1314	福岡城跡	71	史跡整備	中央	城内1番1号	860.0	H25.7.1	H26.3.28	FUE	鴻臚館跡31次	16
1315	元岡・桑原遺跡群	61	学校建設	西	大字元岡	407.0	H25.7.1	H25.10.23	MOT		18
1316	箱崎遺跡	69	共同住宅	東	馬出5丁目104番	170.0	H25.7.16	H25.9.30	HKZ		14
1317	有田遺跡群	250	店舗	早良	有田2丁目13番1・13番5	811.0	H25.7.16	H25.10.3	ART		1
1318	麦野A遺跡	22	個人住宅	博多	麦野2丁目17番20	110.1	H25.7.16	H25.8.16	MGA		17
1319	熊本遺跡	3	戸建住宅	早良	東入部二丁目1785-1、1786-1、1787-1、1788-4	365.3	H25.8.19	H25.10.18	KMM		6
1320	那珂遺跡群	146	車庫増築	南	五十川1丁目13番1号	23.1	H25.8.19	H25.8.21	NAK		10
1321	比恵遺跡群	129	ガス管新設	博多	博多駅南4丁目1番	24.2	H25.8.26	H25.9.6	HIE		15
1322	博多遺跡群	197	事務所	博多	綱場町151番地	745.0	H25.8.19	H26.2.12	HKT		13
1323	警弥郷B遺跡	6	長屋住宅	南	弥永五丁目4番1	92.1	H25.9.9	H25.9.21	KYB		7
1324	博多遺跡群	198	立体駐車場	博多	御供所町70番1、70番2	43.3	H25.9.17	H25.10.23	HKT		13
1325	有田遺跡群	251	戸建住宅	早良	小田部1丁目226-2、226-6	318.7	H25.9.17	H25.10.8	ART		1
1326	有田遺跡群	252	個人住宅	早良	小田部1丁目226-1他	245.9	H25.10.9	H25.11.20	ART		1
1327	元岡・桑原遺跡群	62	学校建設	西	大字元岡	1374.4	H25.9.1	H25.11.15	MOT		18
1328	元岡・桑原遺跡群	63	学校建設	西	大字元岡	1244.0	H25.10.1	H26.4.23	MOT		18
1329	有田遺跡群	253	車庫	早良	有田一丁目13番4号	15.0	H25.10.1	H25.10.1	ART		1
1330	那珂遺跡群	147	共同住宅	博多	東光寺町1丁目161番	178.5	H25.10.17	H25.12.3	NAK		10
1331	元岡・桑原遺跡群	64	学校建設	西	大字元岡	2852.0	H25.10.1	H26.4.30	MOT		18
1332	井尻B遺跡	40	店舗	南	井尻四丁目167番2	142.0	H25.11.11	H25.12.18	IGB		3
1333	博多遺跡群	199	共同住宅	博多	御供所町302番	263.0	H25.11.15	H26.3.20	HKT		13
1334	福岡城跡	72	史跡整備	中央	城内5番2号	346.2	H25.11.19	H26.3.28	FUE	武具櫓	16
1335	那珂遺跡群	148	個人住宅	博多	那珂一丁目724番、725番	75.6	H25.12.2	H25.12.20	NAK		10
1336	野芥遺跡	16	病院改築	早良	野芥5丁目266番	454.5	H25.12.17	H26.3.7	NKE		11
1337	中島窯跡	1	確認調査	南	柏原1丁目1306-1・2、1307	102.0	H25.12.9	H25.12.21	NSY		12
1338	比恵遺跡群	130	共同住宅	博多	博多駅南3丁目51番、52番、53番、54番	348.0	H26.1.6	H26.3.26	HIE		15
1339	博多遺跡群	200	社屋	博多	冷泉町222、223、224、225	228.0	H26.2.20	H26.6.20	HKT		13
1340	千里向川原遺跡	2	個人住宅	西	大字千里字天蓋183番3	55.0	H26.1.16	H26.1.31	SNK		9
1341	比恵遺跡群	131	店舗	博多	博多駅南4丁目205-1、204-1、200	743.3	H26.1.20	H26.5.25	HIE		15
1342	飯倉C遺跡	7	個人住宅	城南	七隈2丁目1153-95	71.6	H26.2.3	H26.2.28	IKR-C		2
1343	井相田C遺跡	12	共同住宅	博多	井相田二丁目2番8	625.0	H26.2.3	H26.3.17	ISC		4

表10 平成25年度刊行報告書一覧

集	書名	副書名	収録調査番号
1214	有田・小田部 53	有田遺跡群第245次調査報告	1209
1215	有田・小田部 54	有田遺跡群第246次調査報告	1230
1216	井尻B 21	第13次、第30次調査の報告	9953・0734
1217	井尻B 22	第36次調査の報告	1112
1218	井尻B 23	第37次調査報告	1203
1219	井尻B 24	第38次調査報告	1215
1220	板付 12	板付遺跡第72次調査の報告	1206
1221	今宿五郎江 16	今宿五郎江第11次調査報告 (2)	0531
1222	今宿五郎江 17	今宿五郎江第16次調査報告	1220
1223	大塚遺跡 7	第19・20・21・22次調査報告	1202・1216・1218・1219
1224	笹原 3	笹原遺跡第4次発掘調査報告	1225
1225	大平寺遺跡 1	大平寺遺跡第2次調査報告	9314
1226	谷遺跡 3	谷遺跡第2次調査報告	9512
1227	徳永A 遺跡 6	第5次・第7次調査の報告 (2)	0932・1127
1228	徳永B 遺跡 2	第2次調査報告	0750
1229	徳永B 遺跡 3	第4次調査報告	1133
1230	那珂 68	那珂遺跡群第136・137・138・140次調査報告	1210・1211・1214・1224
1231	那珂 69	那珂遺跡群第139次調査報告	1211
1232	長尾遺跡 2	第3次調査の報告	1142
1233	斜ヶ浦瓦窯跡 2	那珂遺跡群第139次調査報告	9650・9760
1234	博多 146	博多遺跡群第73次調査報告	9120
1235	博多 147	博多遺跡群第193次調査報告	1201
1236	原 19	第32次・28次調査報告	1226
1237	比恵 66	比恵遺跡群第125次の報告	1138
1238	比恵 67	比恵遺跡群第126次の報告	1229
1239	桧原遺跡 3	桧原遺跡第1次調査報告	8442
1240	藤崎遺跡 19	藤崎遺跡第37次調査報告	1207
1241	松木田 4	松木田遺跡第4次調査4・5区の報告	0905
1242	松木田 5	松木田遺跡第4次調査6区の報告	0905
1243	史跡 女原瓦窯跡	女原瓦窯跡2	1035・1204
1244	麦野C 遺跡 8	麦野C 遺跡第15次調査報告	1227
1245	老司A 遺跡	第1次調査	7836
1246	元岡・桑原遺跡群 23	第18次・42次・59次調査の報告	0451・1140
1247	福岡城祈念櫓跡	福岡城跡第6次調査報告	8343
1248	史跡 鴻臚館跡 21	南館部分の調査 (3)	8829・8910・9005・9130・9240・9910・0309
	福岡市埋蔵文化財年報 VOL.27	平成24(2012)年度版	7418・7915・8328・8982・9217・9848・1208・1213・1231・1233・1234

1103 元岡・桑原遺跡群第57次調査 (MOT-57)

所在地 西区大字元岡

調査面積 6,700m²

調査原因 学校造成工事

担当者 長家伸・大塚紀宜

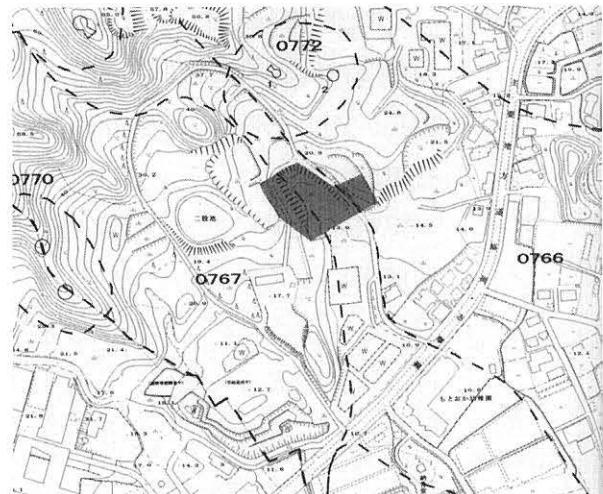
調査期間 2011.4.12～2013.9.6

処置 記録保存

位置と環境 57次調査区は56次調査区の東側谷部分を上った谷奥部にあたり、44次調査の東側に隣接する部分である。谷開口部では46次調査で多量の土器が出土している。平成24年度は前年度調査区の北側部分となる谷奥方向に範囲を拡大して、調査を進めた。

検出遺構 調査区内は谷部分と両側の斜面造成部分に及び、谷部分で弥生時代から古墳時代・古代・中世にかけての遺物包含層を検出した。遺物包含層は上層に中世、下層に古代、最下層に古墳時代の遺物を含み、各層に弥生時代中期後半の遺物が混入する。谷に面する西側斜面部分には製鍊炉・鍛冶炉が分布し、製鍊炉は8世紀後半、鍛冶炉は7世紀後半～8世紀と推定される。斜面には古墳時代～平安時代にかけての造成の痕跡や、建物跡とみられる柱穴も確認されており、建物の中には柱穴の大きな倉庫と見られる建物も存在し、製鉄・鍛冶作業に関連した施設が考えられる。斜面上方には中世の建物・墓葬が検出されており、土坑墓からは青磁碗や土師器が出土している。

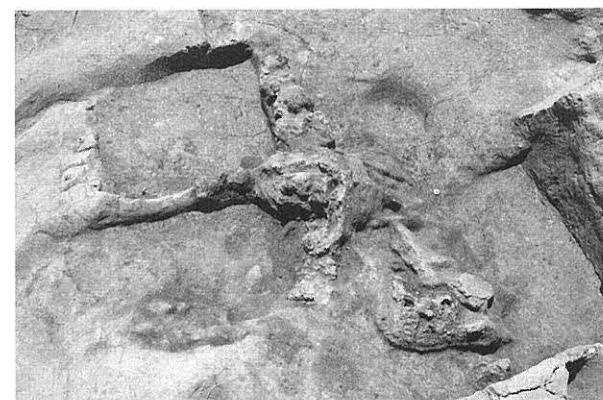
出土遺物 調査区内の谷部包含層からは須恵器・土師器を中心とした土器類、建築部材や農具等に使用された木器が多数出土し、製鉄に関連するとみられる鉄滓も出土している。8世紀の木簡や墨書土器など官的な内容を示す遺物も見られる。出土遺物は総量でコンテナケース500箱以上にのぼる。



1. 調査地点の位置 (140 元岡 2782 1:8000)



2. 4区全景 (西から)



3. 製鉄炉SK003 (北から)

1212 金武古墳群（吉武）第8次調査（KYK-8）

所在地 西区大字吉武765-1外9筆

調査面積 10,000 m²

調査原因 土砂採取

担当者 加藤隆也・阿部泰之・福薗美由紀

調査期間 2012.7.10～2014.3.18

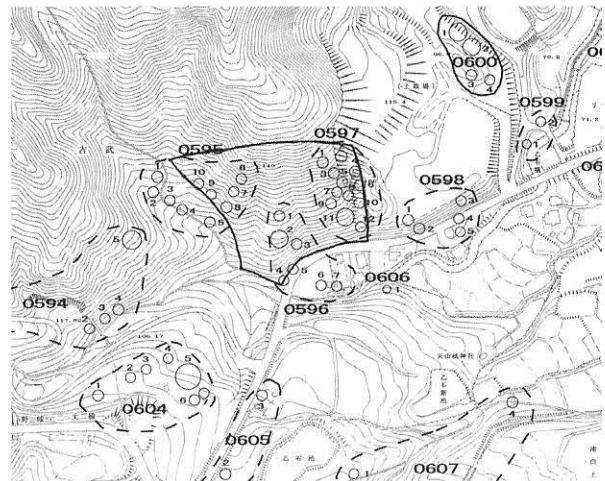
処置 記録保存

位置と環境 金武古墳群は日向川によって形成された扇状地および周辺の山麓に位置する、173基から構成される古墳群である。

検出遺構 今回調査を行った古墳は、そのうち金武古墳群（吉武）B群・C群・D群の一部、計20基である。古墳の周囲からは焼土坑および土坑も数基確認された。

出土遺物 出土遺物としては、壺・盤などの土師器、蓋壺・高壺・はそう・横瓶・提瓶・壺・甕などの須恵器、刀や馬具、鉄鎌、鎌・鋤先などの鉄製品、三累環把頭、鉄滓、ガラス小玉・滑石製臼玉・ヒスイやメノウ製勾玉・耳環等の装飾品が挙げられる。古墳時代以外の時期の遺物としては、白磁、縄文土器、石鎌、石斧等が出土した。

まとめ 今回調査を行った古墳群は早良平野から糸島平野へ抜ける旧・日向街道沿いに立地している。古墳はすべて開口しており、盗掘や石材の抜き取りによって床面が荒らされ、一部石材が石室の中に落ち込んだ状態であった。また、急傾斜面に築造されていることもあり、土砂崩れによって崩壊している石室もあった。墓道の検出を試みたものの、確認することができなかったので、B・C・D群それぞれの関連性は不明だが、平面プランが羽子板状～正方形に近い点、長い羨道を有する点等の共通点が見られる。さらに出土遺物から考えると、本調査で確認した20基はいずれも7世紀前半から後半に築造され（一部6世紀末～7世紀初頭を含む可能性もあり。）8世紀代まで追葬が行われたとみられる。また、ほぼすべての古墳から供献されたとみられる鉄生産関連遺物が出土しており、当時の鉄生産技術および社会的様相を解明する上で重要な資料を得ることができた。



1. 調査地点の位置 (107 乙石 595～597 1:8000)



2. 金武古墳D群全景（南から）



3. 金武古墳群全景（南東から）

1222 福岡城跡第70次調査 (FUE-70)

所在地 福岡市中央区内1番1、1番2

調査面積 430m² (平面積)

調査原因 石垣保存修復工事

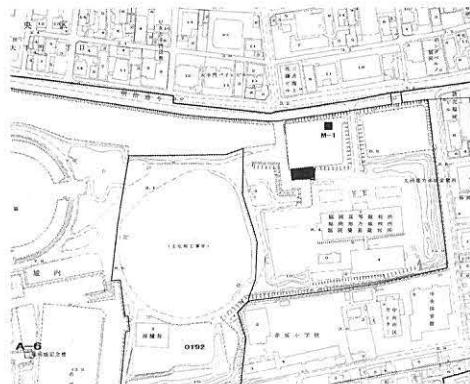
担当者 田中寿夫・中村啓太郎・星野恵美

調査期間 2012.9.20～継続

処置 修復工事後保存

位置と環境

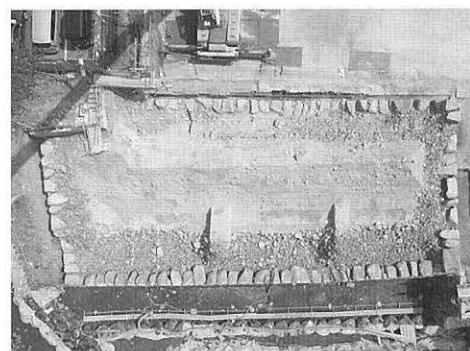
修復工事を行っている上之橋御門は城の北東に位置する正門にあたり、丘陵裾部を埋め立て造られている。石垣の天端面は東西約28m、南北約10m、高さ約10mを測る。石垣は根石部分に玄武岩を使用するが、概ね花崗岩の割石を乱層積みし、隅角部は算木積みを行う。



1. 調査地点の位置 (060 舞鶴 193 1:8000)

調査および修理工事

昨年度より引き続き、人力による解体工事を行い、並行して発掘調査を実施した。調査の結果、天端より14段目から下の各段で築石に直行するかたちで並ぶ石列を検出した。石列は築石の基底部の高さに設置され、築石には接さず、裏込石内へと延びる。各段概ね10～12列検出し、各段での位置も上下段でずらし千鳥状に配置している。石垣・裏込め構造を補強し、地震の際には震動を吸収し、裏込め石の移動を最小限にとどめ、石垣の全体構造の安定を図るために計画的に配置されたものと推定される。



2. 14段目石列検出状況 (真上から)

また、今回初めて水面下の築石の状況を確認した。根石とその上段は玄武岩と少數の自然石を使用し、水面上では花崗岩の割石が使用されていた。この石材の違いは、他面でも確認でき、地中に埋まる部分には玄武岩と少數の花崗岩の自然石を使用し、外観を重視した作りとなっていることが窺える。今回は根石部分を解体していないため、基底部の構造を明らかにすることはできなかったが、堀側でトレーナー調査を行った結果、根石下で直径約8cmの杭を確認した。木材による何らかの根固めが行われていると推定できる。遺物は少量で、16段目の裏込より三巴文軒丸瓦片、19段目の築石背面より「今宿又市」丸瓦片、他は裏込内より瓦細片が出土する。解体後は、崩壊原因の対策を講じたうえで、積み直しの基準勾配となる丁張台を設置し、築石については、原位置での積み直しを伝統的手法により行っている。



3. 石列検出状況 (南東から)



4. 堀側水面下石垣検出状況 (北から)

1235 那珂遺跡群第143次調査 (NAK-143)

所在地 博多区東光寺町一丁目238,239

調査面積 345m²

調査原因 個人住宅建設

担当者 荒牧宏行

調査期間 2013.3.13 ~ 6.7

処置 記録保存

位置と環境 標高8.1m ~ 7.8mを測る。台地頂部付近に位置し、表土直下で地山(遺構面)の鳥栖ロームとなる。

検出遺構 検出された主な遺構は古墳初頭の竪穴住居跡3軒以上、2×3間の総柱建物跡1棟、井戸1基、8世紀代の井戸1基、中世後半期の溝(濠)1条、地下式土壙2基である。

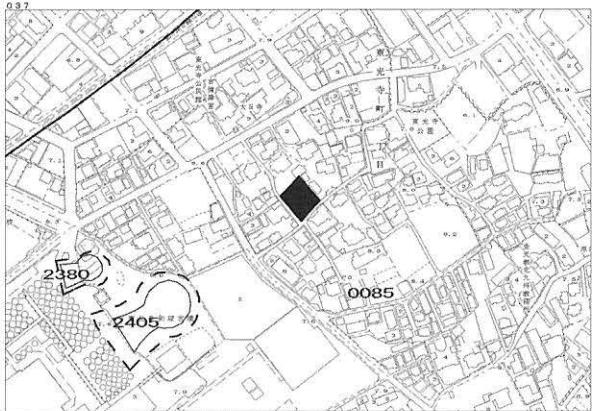
古墳初頭(布留式併行期)の井戸には井筒状の掘り込みがみられ、その上部からは甕を主に完形に近い土器が約10個体以上、埋置されていた。

中世後半期の溝は南西の第28次調査で検出された溝に連続し延長70m以上とみられる。台地の落ち際を巡り屋敷を囲んだ濠と考えられる。近い時期の地下式土壙は下底の隅に平石が設置されていたことから、上屋を構成する柱が据えられていた可能性がある。

出土遺物 土師器、須恵器などコンテナ33箱が出土した。

まとめ 古墳初頭と奈良時代の集落が展開していたことが判明した。また、戦国期には家臣団の館跡が連続した郭に構えられているものと考えられる。

調査報告書は27年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (037 東光寺 85 1:8000)



2. 全景 (南から)



3. 井戸遺物出土状況

1303 有田遺跡群第247次調査 (ART-247)

所在地 早良区有田1丁目32番11

調査面積 203m²

調査原因 個人住宅

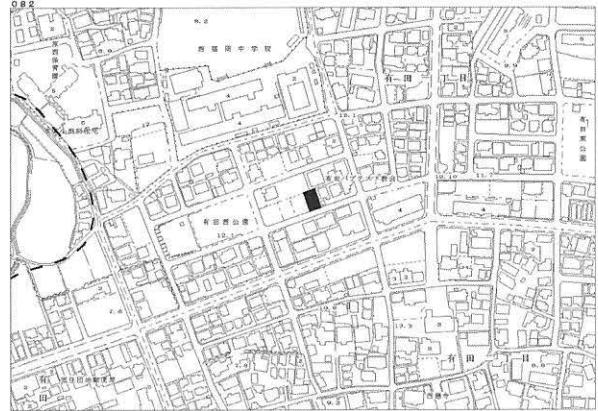
担当者 瀧本正志

調査期間 2013.4.19 ~ 6.19

処置 記録保存

位置と環境

調査地は、有田遺跡の南西部に位置し、有田台地最高標高点の有田1丁目交差点から西へ100mに立地する平坦な畠地で、標高約13mを測る。



1. 調査地点の位置 (082 原 309 1:8000)

検出遺構

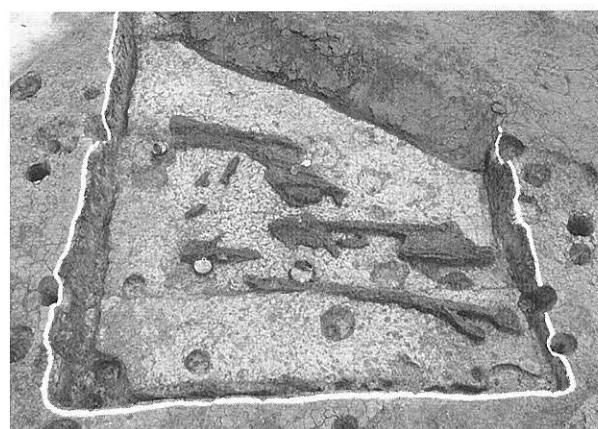
検出した主な遺構は弥生時代早期の環濠、古墳時代前期の竪穴住居2棟、古墳時代中期の土壙、1基、古墳時代後期～古代の溝3条、中世の井戸1基、溝3条、柱穴等である。環濠は有田台地南半部に東西200m、南北300mの卵形状に設けた一部で、幅4.2m、深さ2.2mを測り、断面形は逆三角形を呈する。竪穴住居は2棟（内1棟は焼失家屋）とも長方形の平面形を呈し、3世紀末～4世紀初頭に築かれている。土壙は不整形な橢円形を呈し、5世紀前半期の韓半島系土器が在地の土器を伴って多量に出土している。



2. 1区全景（南から）

出土遺物

遺物は、土師器、須恵器、石製品がコンテナ箱に26箱出土している。



3. 消失竪穴住居跡（東半部）

まとめ

今回の調査では、弥生時代から中世に至る遺構を検出した。中でも、古墳時代の土壙SK15出土遺物は、当時の大陸との関係や人の動きを知る上で学術的に価値の高い資料で、韓半島から早良平野縁辺に移住し、銅業や窯業の新技術を移入させたことを裏付けるもので、5世紀におけるわが国の様相を知る上でも貴重な資料である。今後は、室見川を挟み対岸に位置する、同様な性格の吉武遺跡などとの関連を調べる必要があろう。

1306 元岡・桑原遺跡群第60次調査 (MOT-60)

所在地 西区大字元岡

調査面積 271m²

調査原因 学校造成工事

担当者 大森真衣子

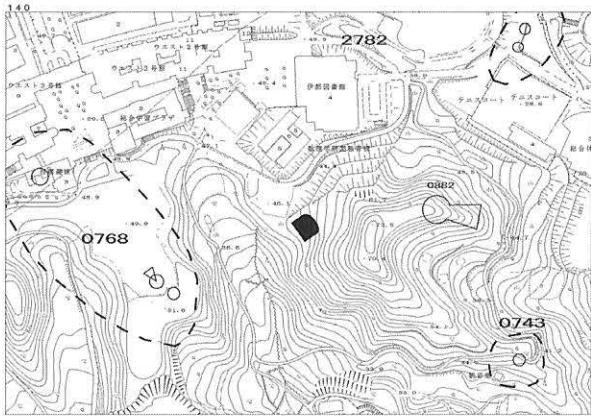
調査期間 2013.5.22～8.29

処置 記録保存

位置と環境 池ノ浦古墳の立地する丘陵の西側、標高42～45mに立地する。

検出遺構 今回の調査では、南西方向に開口する谷の包含層が検出された。遺構は複数のピットと溝が2条検出するにとどまった。

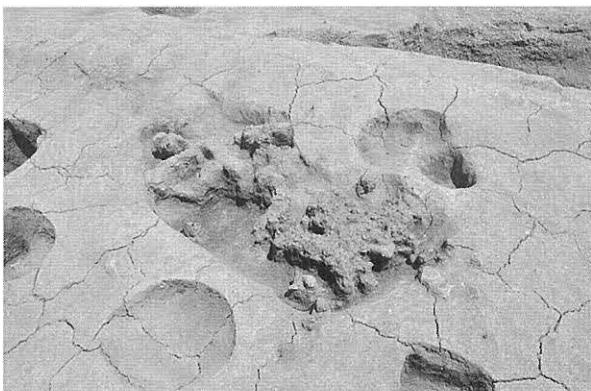
出土遺物 遺物は、7世紀末から8世紀初め頃の須恵器、
まとめ 土師器を中心に、砥石などの石器、鉄滓等も多数出土している。比較的大型の流動溝も出土している。当調査区においては、製鉄の製作に直接関係するような遺構は認められなかったが、流動溝が確認されていることと、炉壁と思われる焼土ブロックが出土している。近辺の調査では7次調査にて、大規模な製鉄関連遺構、遺物が確認されていることからも、当調査区周辺に、製鉄に関係する遺構の存在が想定される。



1. 調査地点の位置 (140 元岡 2782 1:8000)



2. 全景 (東から)



3. 流動溝、炉壁堆積状況 (南から)

1307 有田遺跡群第249次調査 (ART-249)

所在 地 早良区小田部2丁目57

調査面積 128.9 m²

調査原因 共同住宅

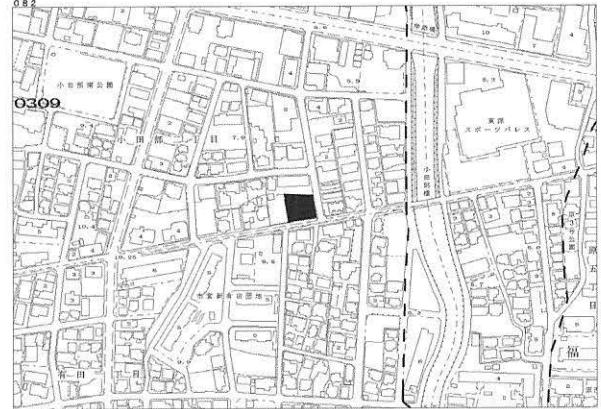
担当者 久住猛雄・山崎龍雄

調査期間 2013.5.27～6.14

処置 記録保存

位置と環境

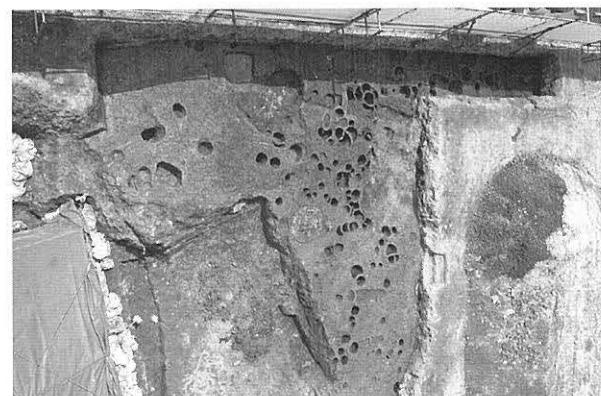
調査地点は、北に八つ手状に広がる有田・小田部台地の中央部東側の南北丘陵尾根に位置する。この段丘部分の東側を金屑川が北流する。調査地点より西側には北から深い谷が入り込むものと想定されるが、調査地敷地は北が高く南が低い。調査区敷地の標高は北西隅が9.3m、南東隅が7.1mと高低差がある。調査区は、敷地中央から北側・西側の一段高いところであり、この北西側200 m²がかつて「有田10次調査」として調査されている。今回の調査区は10次調査の南側である。また道路を挟んで東側では有田49次調査が行われている。調査区敷地の南側を東西に走る現在の道路は、歴史地理学的検討と沿線の発掘調査から古代官道の名残であることが判明している。今回の249次調査の遺構検出面の標高は8.7～9.0m前後である。



1. 調査地点の位置 (082 原 309 1:8000)

検出遺構

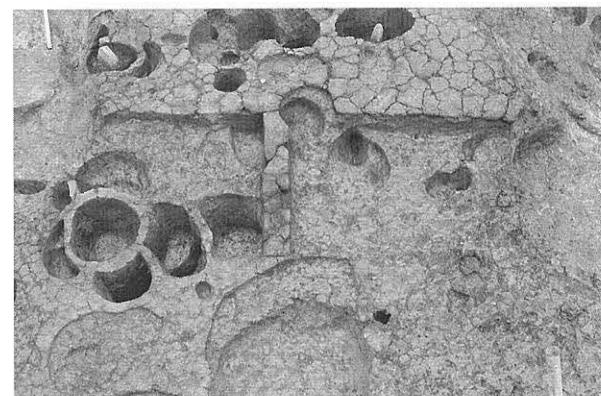
今回の調査では、調査区が部分的であるなど竪穴住居や掘立柱建物の範囲が不明確であったが、調査区西半部から敷地西縁沿いの北西部では比較的濃密な遺構の検出があった。これは10次調査と同じである。竪穴住居（の一部）が1基、土坑および不整形な落ち込みなどが10基前後（竪穴住居の一部を含む可能性あり）、ピット多数である。ピットの中には明らかに建物柱穴と思われるものが多い。



2. 全景（南から）

出土遺物

出土遺物はピットからの出土で量は多くなかった。弥生土器は中期前後のものが僅かにあり、他には古墳時代後期または飛鳥時代、奈良時代、平安時代初期（9世紀）が多い。他に越磁や白磁など平安時代～中世の土器や陶磁器も見られた。



3. SC 56竪穴住協調査状況（西から）

まとめ

奈良時代前後が多いのは、南側の古代官道の存在と関係があると考えられる。

1308 周船寺遺跡第22次調査 (SSJ-22)

所在 地 西区大字千里425-1

調査面積 90m²

調査原因 給油所建設

担当 者 杉山富雄

調査期間 2013.5.27 ~ 6.6

処 置 記録保存

1. 立地と環境

調査地は今宿バイパス沿いにあり、道路に合わせ盛土を行っているため北側の住宅地より一段高い。調査地以北は、造成されて平坦な住宅地となっている。1969年測量の都市計画図から、遺跡は、東西を北流する浅い谷から緩く立ち上がり、北へ緩く下る微高地上に立地し、調査地はその中央の尾根筋に位置することが分かる。遺跡範囲は、調査地の南100mまでとされており、接して南は千里遺跡となる。

調査地で旧田面の標高12.7m、現況地盤はその上の厚さ1.6m前後の盛土上である。北に近接する住宅地内の地盤高で12.7m程となっている。地形は北に向かう緩い勾配をもち、約300m離れた筑肥線北側の地点で3m低い。このなかで、筑肥線あたりで地盤高の変化が大きく、現地でも地形の変化を見ることが出来る。

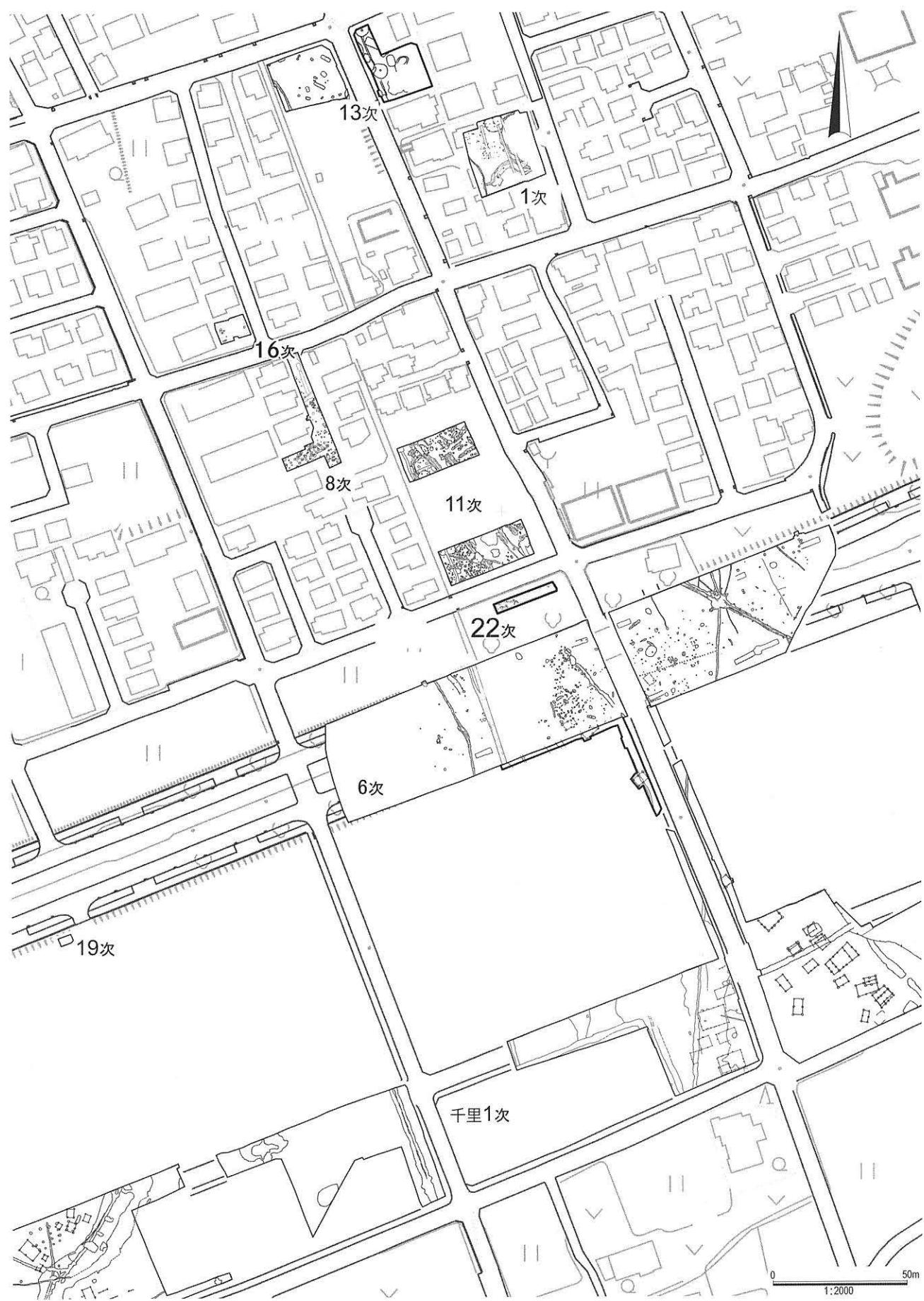
2. 発掘調査

既往の調査 調査地は遺跡の南辺部に近く隣接して第6次調査、更に第19次調査が行われている。北には隣接区画で、第11次、8次調査が、やや北に離れて、第1次、13次、16次調査地点が位置する(図2)。

調査の経緯 発掘調査は、給油所構造物のうち、埋蔵文化財への影響を避けることができない地下貯油タンク部分について実施することとなり、対象地北辺部に東西に細長い調査区を設定、厚く軟質の盛土を含め、約2.1m掘削した位置を調査面とした。調査区の全長約20m、調査面積は90m²となった。



1. 調査区全景（西から）



2. 周船寺第22次地点位置図 (1: 2000)

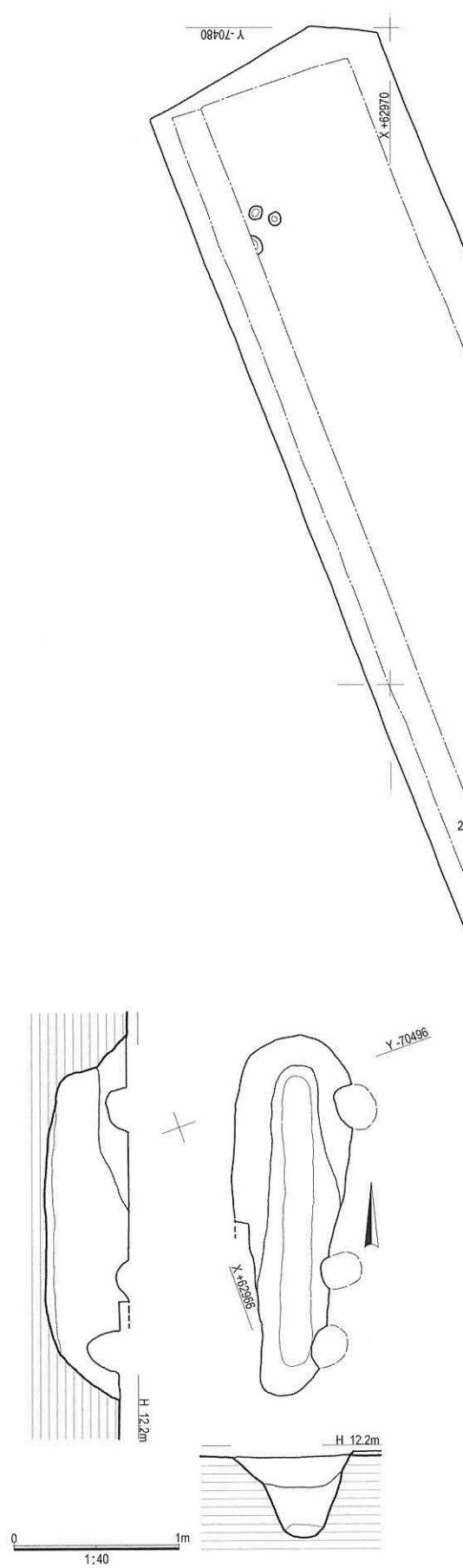
3. 調査遺構と遺物

遺構 調査区西端部、東端部に分布する。小穴群と、1基の土壙を検出した。他に不整な落ち込みが調査区西端部に分布する。柱穴と分かれる遺構は確認できなかった。

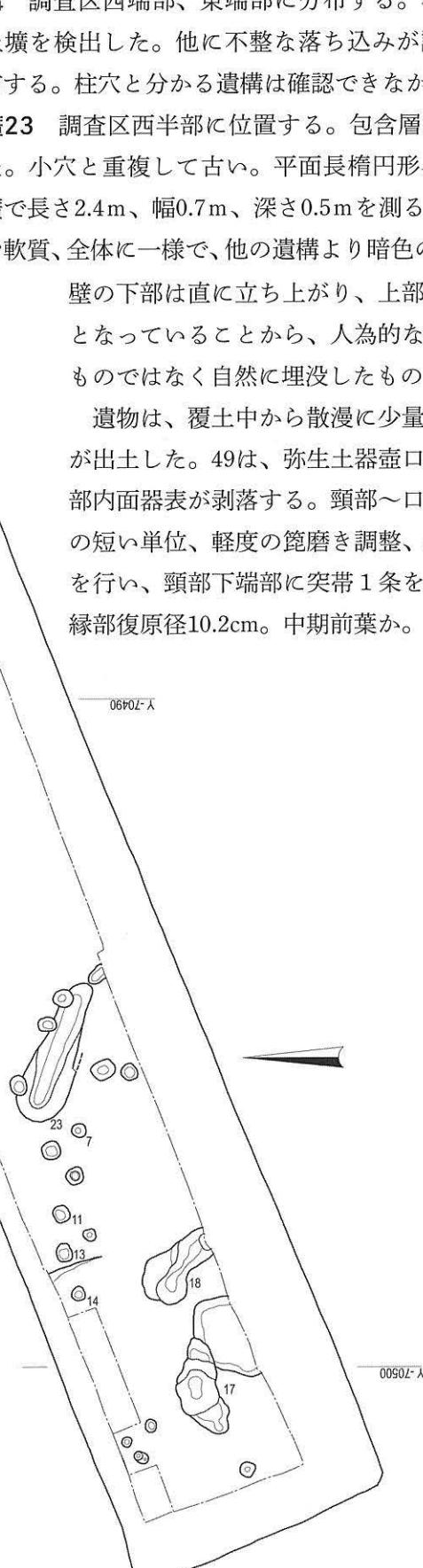
土壙23 調査区西半部に位置する。包含層掘り下げ時検出した。小穴と重複して古い。平面長楕円形、断面漏斗状の土壙で長さ2.4m、幅0.7m、深さ0.5mを測る。覆土は下部がやや軟質、全体に一様で、他の遺構より暗色のシルトである。

壁の下部は直に立ち上がり、上部が広く開く形状となっていることから、人為的な埋め立てによるものではなく自然に埋没したものと見える。

遺物は、覆土中から散漫に少量の弥生土器細片が出土した。49は、弥生土器壺口縁部である。胴部内面器表が剥落する。頸部～口縁部に周回方向の短い単位、軽度の範磨き調整、外面に撫で調整を行い、頸部下端部に突帶1条を貼り付ける。口縁部復原径10.2cm。中期前葉か。



3. 土壙23 (1 : 40)



4. 周船寺第22次調査区全体図 (1 : 100)

このほか、赤色顔料と思われるものが少量出土した。薄い層状で遺存し、深い赤色を呈す。

小穴 径・1辺が0.2～0.3m前後の円形、隅円方形を呈すものが多い。深さ0.2m前後遺存しているが、柱穴と分かれる痕跡は確認できなかった。覆土は暗褐色シルトで、遺物は、覆土中から少量が散漫に出土した。

図5上段に各遺構出土遺物を示す（番号は登録遺物番号、括弧内は遺構番号）。すべて弥生土器の細片資料である。43・40は壺。38は高壺口縁部か。その他は甕口縁部、底部である。何れも細片資料。甕は口縁が鋤先状を呈し、底部は中央部に向かい僅かに上げ底状となる。口縁部直下に1状の突帯を貼りつける例と突帯のない例がある。細片からあえて形状を復原すると、38は口縁部径24.8cm、41は同37.4cmとなる。底部資料では、40が底部径6.2cm、37が11.2cmと復原できる。

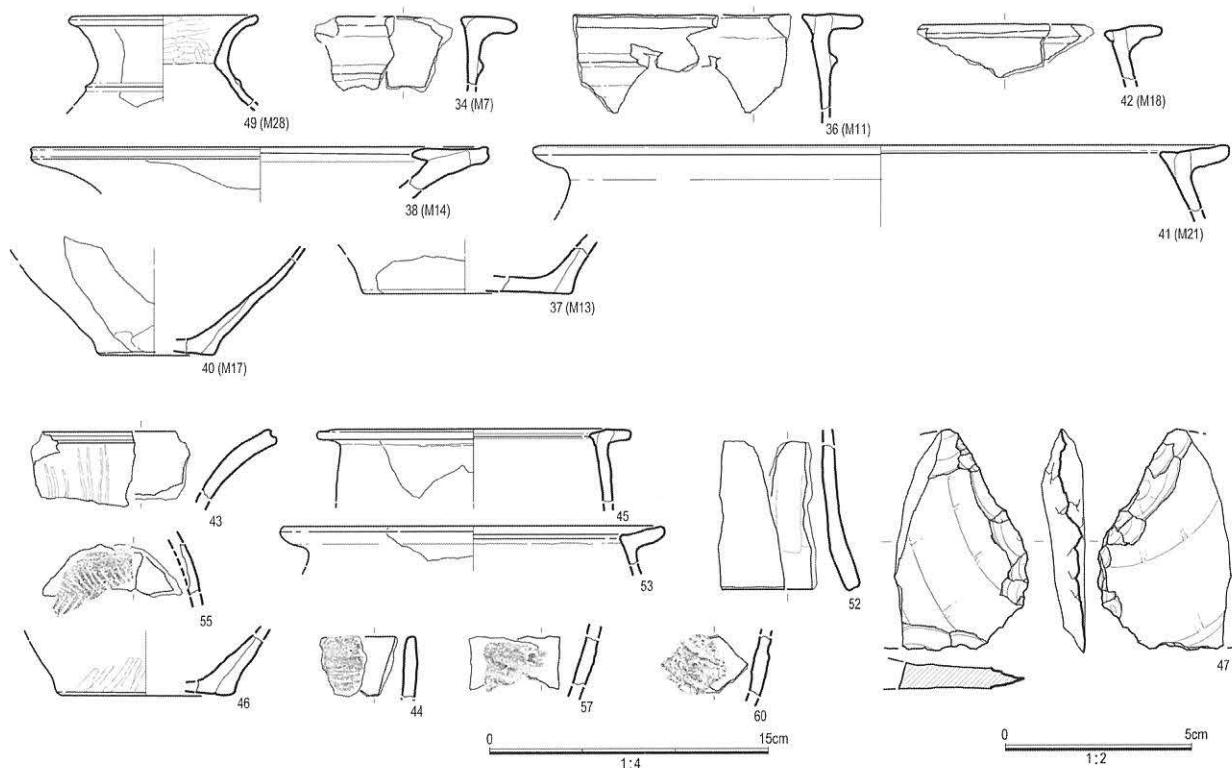
包含層 本地点では、水田床土直下を調査面としたが、この位置で斑状に包含層が残っていた。黒褐色砂質シルトで、断面では塊状を呈す。層中から中期弥生土器、粗製の縄文土器が散漫に少量出土した。大部分が細片若しくは極細片の資料であるが、1箇所複数破片が纏まって出土した位置がある。

下層の確認のため、調査区北壁に沿って深掘りを行った。地山とするのは暗褐色砂質シルトで、レンズ状に礫を挟む部分がある。調査面下0.3mで礫層となる。礫層は拳大の花崗岩・片岩の偏平礫で構成されている。この間遺物の出土は認められなかった。

図5下段に調査面採集資料も併せて示す。下段の資料のうち、石器47及び最下段の縄文土器44・57・60の他は、弥生土器である。43・55は壺、45・53・46は甕、52は器台裾部か。何れも細片資料である。壺43外面には縦方向の粗い暗文がみられる。壺55は、肩部の細片資料で、外面に貝殻を原体とした羽状文が残る。破片から形状を復原してみると、45では口縁部径16.9cm、53は同20.8cm、46は底部径9.5cmを復原できる。壺55を前期後葉とするほかは、全て中期。

縄文土器のうち、44・57は体部、60は口縁部の何れも細片、器形は深鉢か。ともに外面に貝殻による調整痕が残る。60は更に籠状の工具による撫で調整が加えられている。胎土は密で、粒状性あり、細礫を少量含む。

石器類は黒曜石製の剥片類を主として各所から少量出土したが、石器と見えるのは図示する47のみである。



5. 周船寺第22次調査出土遺物 (1:2、1:4)

47は半ばを欠く資料であろう。剥片を素材とし、打面側の辺に両面から粗い調整を加えている。このため打面は除去される。縁部にそれ以上の剥離痕は残されない。対向する辺にも片側からの粗い剥離面が見える。石材は安山岩。

4. おわりに

周船寺第22次調査区は、図2に示すように第6次、第11次調査区の間に位置する。出土遺物の構成はほぼ同様といえ、縄文時代晚期、弥生時代前・中期の遺物がみられる。

6次、11次両地点では北西方向へ向かう溝が検出されているが、本地点ではそれを繋ぐような遺構は確認できなかった。11次地点では、別に同様北西方向に軸をもつ土壙が分布しており、本地点の土壙23もそのような例に含まれるものか。同じく11次地点でも小穴の分布がみられるが、掘立柱建物を復原できる例はない。

周船寺遺跡南半部では、弥生時代の竪穴住居、甕棺墓地が分布している。とくに甕棺墓地については、16次地点から6次地点まで、前期または中期の甕棺墓地が北西方向の軸に沿ったような分布を示している。本地点の北に近接する第11次地点B区の南辺部にも中期の甕棺墓地が分布しているが、その分布範囲が本地点まで及ばない。他地点の例をみると、調査区内で完結するものではなく、いずれも片側が調査区外へ広がっている様な位置関係で検出されている。ただ、帯状、列状といったような分布ではなく1箇所に纏まっているような分布の様態を示している。調査の密度から分布に関しては精度が高いとはいえないが、どちらかといえば、各墓地が地点的に独立して立地していたもののように見える。



6. 土壙23・西半部遺構（東から）



7. 土壙23（南から）

1309 井尻B遺跡第39次調査 (IGB-39)

所在 地 南区井尻4丁目172番12

調査面積 57.2 m²

調査原因 歯科医院建設

担当者 清金良太

調査期間 2013.6.3～6.18

処置 記録保存

1. 調査に至る経過

平成25年3月13日付けで、当該地における埋蔵文化財の有無についての照会文書が提出された（事前審査番号24-2-1217）。平成25年4月1日に申請地の試掘調査を行ったところ、ピットを1基確認した。申請面積213.65 m²のところ、搅乱が著しく、ロームの遺存状況から北側の64 m²を調査対象地とした。

発掘調査は2013年6月3日から調査区の掘削作業を開始し、同年6月18日に埋戻し作業を終了した。

2. 位置と環境

井尻B遺跡は福岡平野のほぼ中央部の洪積台地上に位置する。福岡平野には那珂川、御笠川が流れ、両河川の間には須玖丘陵とそこから台地群が北側に向かって伸びている。井尻B遺跡は須玖丘陵が北に向かって伸びつつ標高を下げ、やや低平な台地となる境界付近に位置する。この台地は阿蘇山の火碎流の堆積物からなり、堆積物上部の暗赤褐色土を鳥栖ローム層、下部の乳白色粘土層を八女粘土と呼び、井尻B遺跡は鳥栖ローム上の遺跡である。

今回の調査対象地は北側を第28次調査地点、南側を第37次調査地点に近接し、周辺では弥生時代～古代の遺構が検出されており、第37次調査では旧石器時代の石器が検出されている。また、道路を挟んだ北西側で行われた第2、5次調査では古墳の周溝が検出されている。円筒埴輪、朝顔形埴輪、動物埴輪、家形埴輪が出土しており、5世紀代の円墳と考えられ、井尻B1号墳とされている。埴輪は第28次調査区から家形埴輪片が出土している。

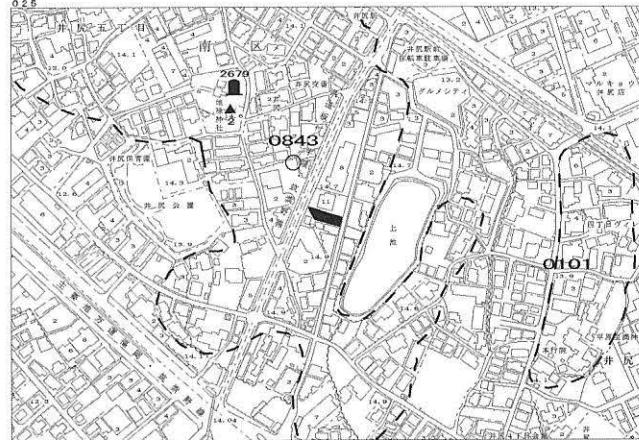
3. 検出遺構と出土遺物

第39次調査では南西部の大部分を搅乱が占め、確認できた遺構はピットが8基とわずかであった。

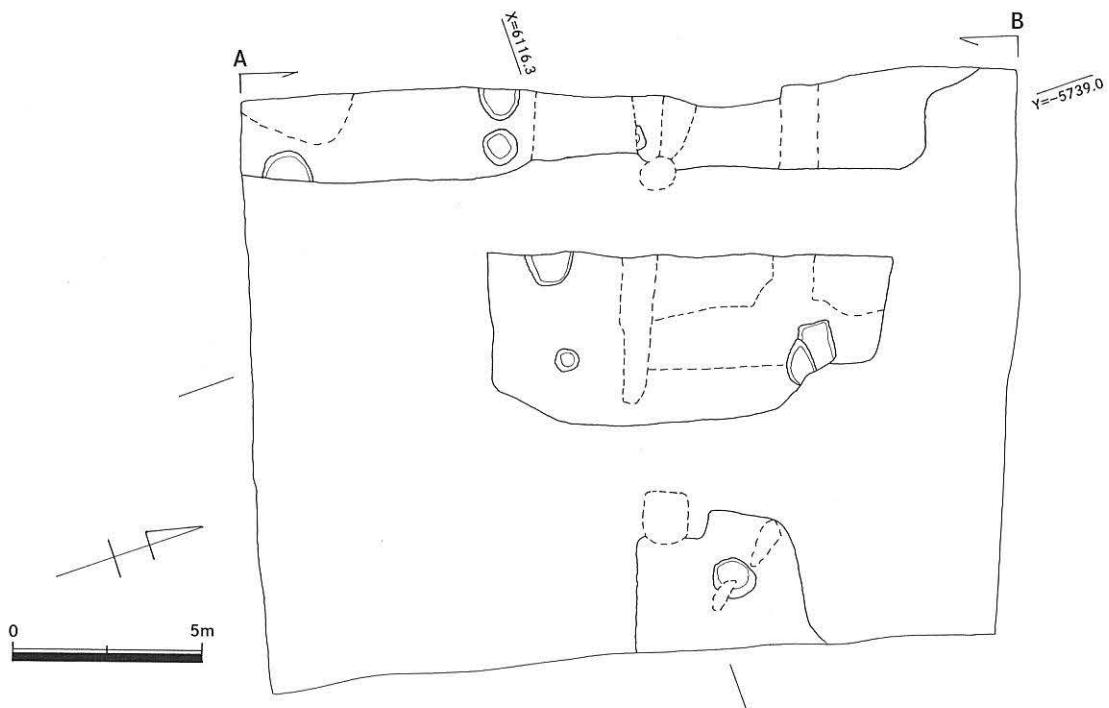
出土遺物は弥生時代後期から古墳時代前期と思われる土師器片が8点出土した。ほか、搅乱から須恵器が2点出土した。第37次調査で検出された旧石器の遺物包含層も確認できなかった。

4. まとめ

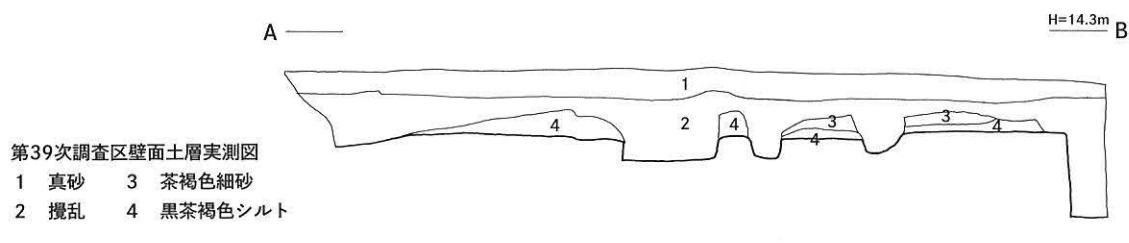
今回の調査ではピットが8基、遺物は弥生時代後期～古墳時代前期と思われる土師器が8点出土したが、調査区のほとんどが搅乱によって占められており、北西の一部分だけが残っている状況であった。



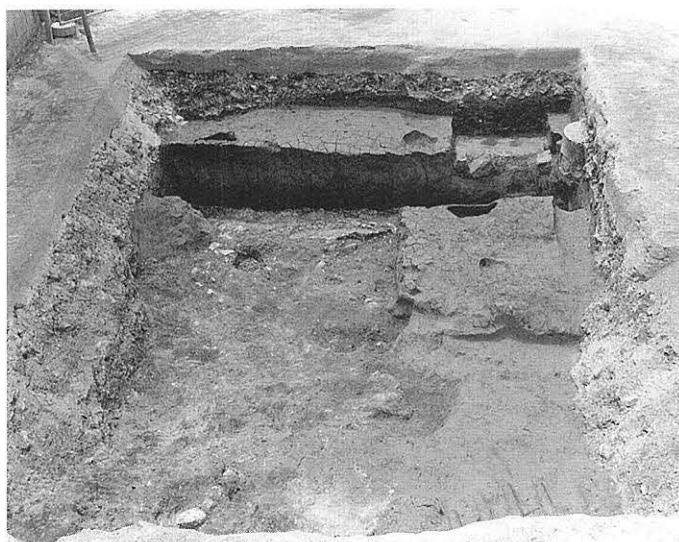
1. 調査地点の位置 (25 井尻 90 1:8000)



第1図 第39次調査区全体図 (1/40)



第2図 第39次調査区北西壁面土層実測図 (1/40)



(1) 第39次調査区南西側全景



(2) 第39次調査区北東側全景

1311 那珂遺跡群第144次調査 (NAK-144)

所在地	博多区東光寺町1丁目4,5,6,7番	調査面積	32m ²
調査原因	事務所	担当者	荒牧宏行
調査期間	2013.6.10～6.14	処置	記録保存

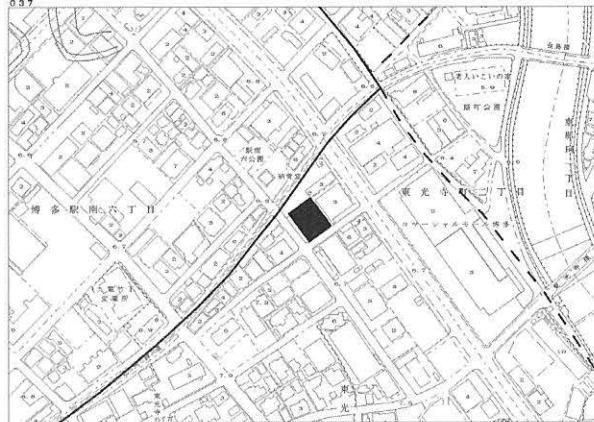
位置と環境 比恵遺跡と那珂遺跡の境付近に形成された丘陵鞍部に位置する。検出した地山は鳥栖ロームから八女粘土に変わり、標高5.46m～5.06mを測る。その地形は南東方向へ下降していく谷落ち部分とみられる。

検出遺構 調査区は建築の杭部分のみに限られた。そのため、遺構配置の面的な把握は困難であるが地山面が高い北東部には鳥栖ロームの地山に柱穴が散在していた。低地の南東部には地山の上層に多量の弥生から中世までの遺物を含む包含層が検出された。

出土遺物 中世の遺物には足鍋破片を含むコンテナ3箱分が出土した。

まとめ 那珂遺跡の台地落ち際の一部が判明した。これまでにも台地落ち際まで遺構が検出され流路によって開析された形状や土器だまりが多く確認されている。台地落ち際の調査は流路を含め、確実に行う必要がある。

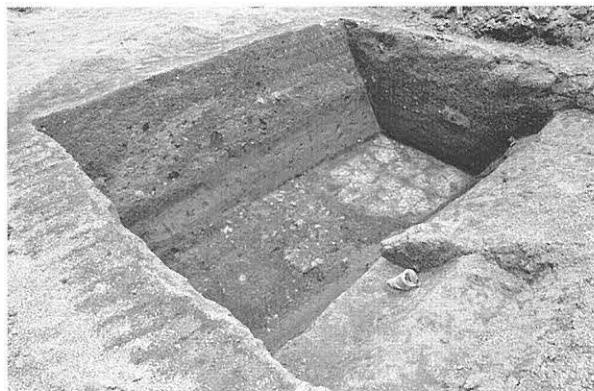
調査報告書は27年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (037 東光寺 0085 1:8000)



2. トレンチ 2



3. トレンチ 3

1314 福岡城跡第71次調査 (FUE-71) 鴻臚館跡第31次 (KRE-31)

所在地 中央区域内
調査原因 遺跡確認調査
調査期間 2013.7.1 ~ 2014.3.28

調査面積 860m²
担当者 菅波正人
処置 現地保存

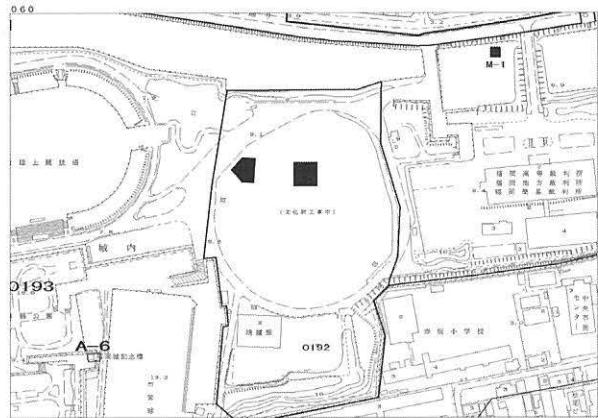
位置と環境 博多湾のほぼ中央部に突き出した丘陵上に立地する。

検出遺構 平成18年度から平和台球場北半分を対象とした第V期調査を行っており、本年度は2ヶ所のトレンチで調査を実施した。トレンチ1では福岡城の造成の下から、室町～戦国時代の整地を検出した。この整地には鴻臚館の建物に葺かれていた屋根瓦が多量に含まれていた。該期の遺構は建物の区画溝、柱穴、池などがある。

鴻臚館に関する遺構は鴻臚館II期（奈良時代）の北館の布堀塀、トイレ状遺構、III期（平安時代前半）の建物の礎石、IV～V期（平安時代後半）の土坑などがある。

地形に関して、北館の北側の崖からその下の砂浜に至る場所の整地の様相が確認できた。II期の施設造営に際し、I期の範囲から北側と西側に敷地を広げたと考えられる。その際に崖の下の砂浜をならし、瓦を敷いて地盤の強化を図ったと考えられる。トレンチ6でも同様の瓦敷きを確認した。崖下に想定していた築地塀については中世の溝などにより確認できなかった。

出土遺物 軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦、輸入陶磁器、国産土器、銅印等。



1. 調査地点の位置 (60 舞鶴 192 1:8000)



2. トレンチ1全景 (北から)



3. 廃棄土坑遺物出土状況 鴻臚館V期 (東から)

1315 元岡・桑原遺跡群第61次調査 (MOT-61)

所在地 西区元岡地内

調査面積 407 m²

調査原因 学校造成工事

担当者 清金良太

調査期間 2013.7.1 ~ 10.23

処置 記録保存

位置と環境

元岡・桑原遺跡群は、福岡市西区元岡・桑原地区に所在し、玄界灘に突出する糸島半島の東側基部の丘陵部に位置する。丘陵には、小河川により樹枝状に浸食された狭い谷が無数に入り込む。現在の糸島半島はその南全面で九州本島と繋がっているが、縄文海進以降、中世のある時期までは中央の一部が陸橋状に繋がっていた以外は、東と西にそれぞれ大きく海が湾入していたと考えられる。

今回報告する第61次発掘調査地点は、古今津湾の最奥部に位置し南東方向に開口する谷地形をなす。南東側で行われた56次調査では、古墳時代から中世にかけての遺物包含層と掘立柱建物の柱穴が確認されている。現況は荒地であり、遺構の層序は上層から真砂土、暗茶褐色シルト、茶褐色シルト、黒茶褐色シルトであった。

検出遺構

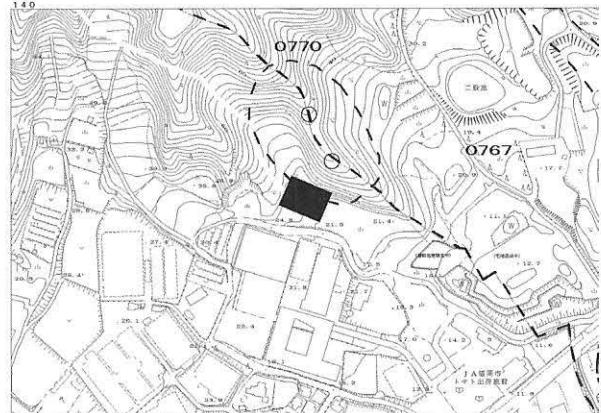
出土遺構としては古代のピット2基、古墳時代中期と考えられるピット1基のみであった。

出土遺物

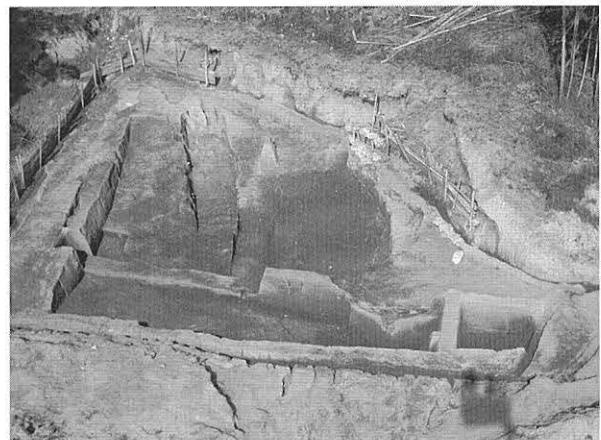
遺物についてはコンテナケース13箱が出土し、古代としたピット1基から鉄滓が出土した。包含層からは古代の須恵器、土師器、羽口、炉壁、鉄滓、石錘、古墳時代中期とみられる土師器が出土したが、古墳時代中期の遺物は少なかった。

まとめ

今回の調査では、第42次調査、第52次調査、第56次で確認されたような遺物・遺構の量は無かった。第61次調査で出土した遺物は西方向からの流れ込みと考えられ、遺構もピット3基とまばらであった。



1. 調査地点の位置 (140 元岡 2782 1:8000)



2. 全体写真 (南から)



3. 壁面土層

1318 麦野A遺跡群第22次調査 (MGA-22)

所在地 博多区麦野2丁目17番20
 調査原因 個人住宅
 調査期間 2013.7.16 ~ 8.16

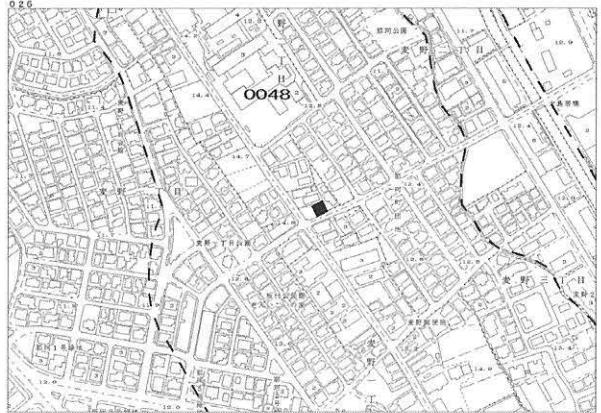
調査面積 110.1m²
 担当者 久住猛雄
 処置 記録保存

位置と環境 麦野A遺跡は、御笠川と那珂川に挟まれた洪積段丘中央の中位段丘上に立地する。調査地は、麦野A遺跡の中央の高所に位置し、略南北に延びる段丘尾根から僅かに東に下る地点にある。調査区周囲の標高は西側が14.7m、東側が13.4m、調査区はほぼ平坦だが、敷地東側は前面道路より高い。

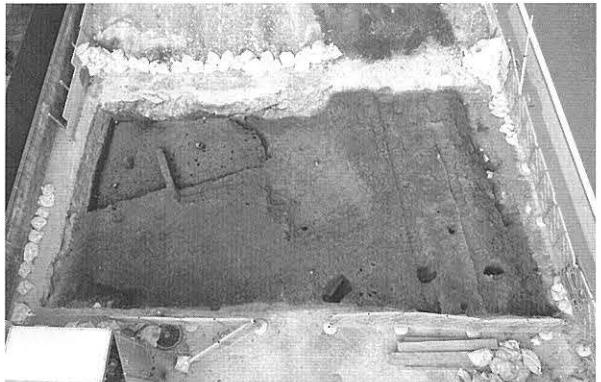
検出遺構 遺構は鳥栖ローム上面で検出したが、西側はGL-20cm~30cm、東側はGL-45~60cm前後と比較的浅かった。西半のI区では、竪穴住居SC01と柱穴若干を検出した。柱穴の3つは掘立柱建物の一部で、西側隣地の確認調査で柱列の延長を検出し、東西4間以上×南北1間以上の古代の建物である。他に須玖II式の甕破片が出土したやや大きい柱穴がある。SC01は東半のII区に続く。一部攪乱があるが、深さ50cm近い遺存の部分もある。東西4.7m、南北推定6.4mの長方形で、中央に土坑状炉址がある。南北二隅に盛土構築のベッド状遺構がある。ベッド以外も中央部を除き全体に貼床がなされ、掘方外縁部が方形周溝状となった。主柱穴は不明確で、東側の土坑状落込みは対称となる柱穴がなく、屋内土坑であろう。SC01は弥生時代後期前葉～中葉の土器が出土した。他にきめの細かい砥石が数片出土した。II区では東西3.2m、南北4.0mの竪穴住居SC21、南北2.3~2.4mの小型方形竪穴SC22、柱穴若干を検出した。SC21は奈良前期の土器があり、灰白色粘土で構築の竈が南東側にあるが、竪穴隅角部であろう。SC22も古代で、火處は不明だが明確な貼床があり、床の一部が台状に高くなる。

出土遺物 コンテナケース3箱分がある。弥生時代中期～後期の弥生土器、奈良時代から中世の土師器、須恵器、陶磁器、弥生時代の砥石がある。

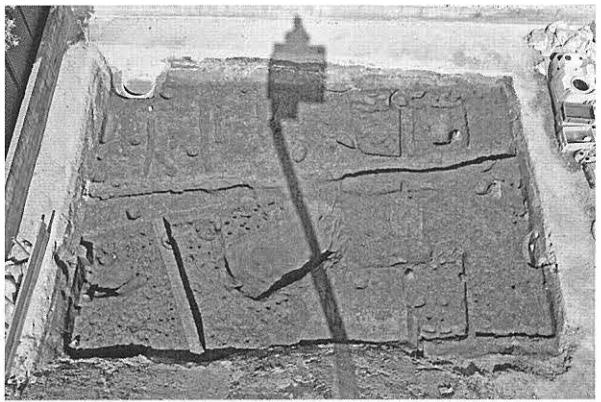
まとめ これまで本遺跡では弥生時代中期中頃以降の弥生時代遺構が無かった。しかし、中期後半の柱穴と後期の竪穴住居が検出され、調査の少ない遺跡北部に当該期の集落遺構が分布する可能性が高まったと言えよう。



1. 調査地点の位置 (25 井尻 48 1:8000)



2. I区全景 (西から)



3. II区全景 (西から)

1320 那珂遺跡群第146次調査 (NAK-146)

所在地	南区五十川1丁目13番1号	調査面積	23.1 m ²
調査原因	車庫増設	担当者	屋山洋
調査期間	2013.8.19 ~ 2013.8.21	処置	記録保存

1. 調査に至る経過

平成25年（2013年）5月29日付けで株式会社福岡油屋福太郎から福岡市経済観光文化局埋蔵文化財審査課宛てに福岡市南区五十川1丁目13番1号の車庫増設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書（25-2-235）が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群内に位置しており、平成7年（1995年）には同工場の敷地内で行われた56次調査では古代の大型掘立柱建物と中世の溝が出土していることから、今回の工事範囲にも遺構が存在する可能性が高いと判断し、7月2日に重機を使用して確認調査を行った。工事による掘削は覆屋の柱の基礎部分6ヶ所で、そのうち東隅と西隅の2ヶ所を掘り下げた結果、東隅で柱穴らしき掘り込みを確認した。埋蔵文化財審査課では、この結果をもって建設に先立って発掘調査が必要であると判断して株式会社油屋福太郎と協議を行い、基礎の掘削部分については本調査を行って記録保存をはかるということで両者の協議が成立した。以上を受けて平成25年（2014年）8月19日から8月21日の期間で埋蔵文化財調査課によって発掘調査を行った。掘削する基礎6ヶ所のうち西隅の1ヶ所は確認調査時に全面表土剥ぎを行った結果、遺構が確認されなかったため、本調査の対象からは除外した。

調査期間中は原因者側から休憩場所や水道等についてご協力を頂いた。記して感謝したい。

2. 調査の組織

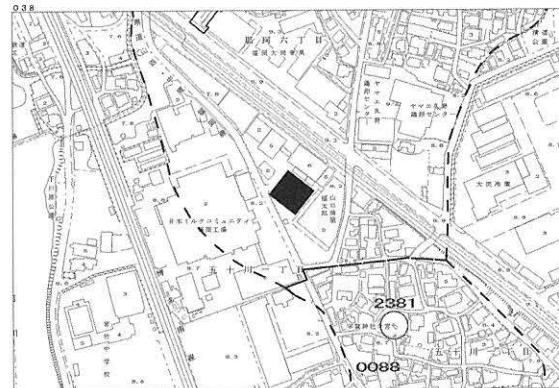
調査主体 福岡市教育委員会 （発掘調査 平成25年度： 整理報告 平成26年度）

調査統括 福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課

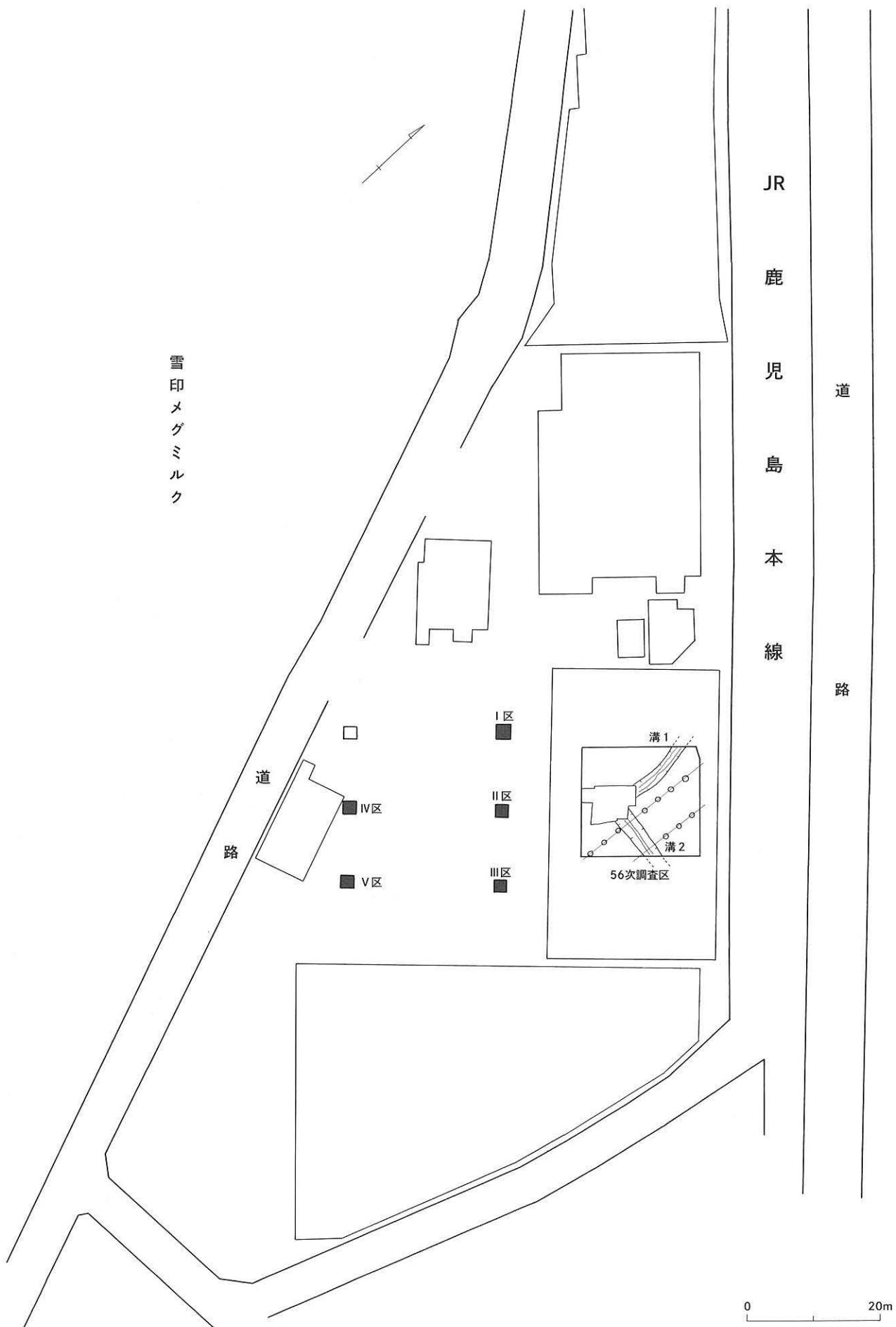
同課課長	平成25年度 宮井善朗 平成26年度 常松幹雄
同課第2係長	平成25年度 榎本義嗣
同課第1係長	平成26年度 吉武 学
調査庶務	埋蔵文化財審査課管理係 川村啓子
調査担当	埋蔵文化財調査課 屋山 洋

3. 立地と環境

本調査地点は那珂遺跡群の南西隅部に位置する。本来西側に隣接する雪印メグミルク福岡工場は本調査地点に比べて低い湿地で、近隣住民によると間を通る県道山田 中原福岡線が台地の縁に沿っていたということなので、本調査区は台地端部に位置するものである。各調査区とも舗装下のバラス直下で鳥栖ロームに達しており、旧表土等は残っていないかった。

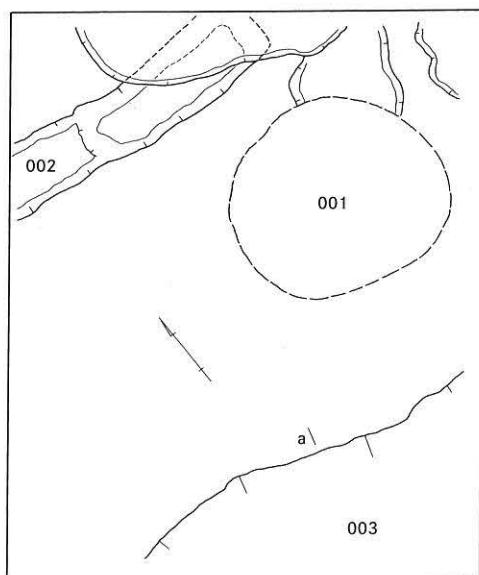


1. 調査地点の位置 (38 塩原 1:8000)

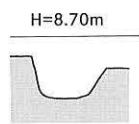
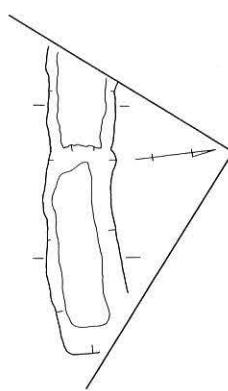
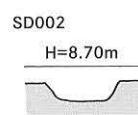
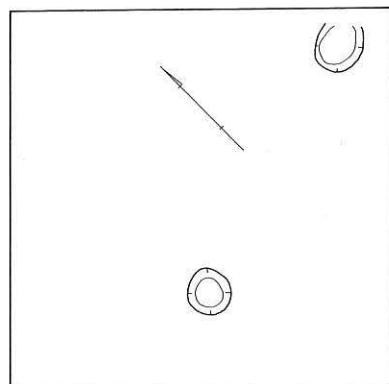


2. 調査区位置図 (S=1/800)

I 区

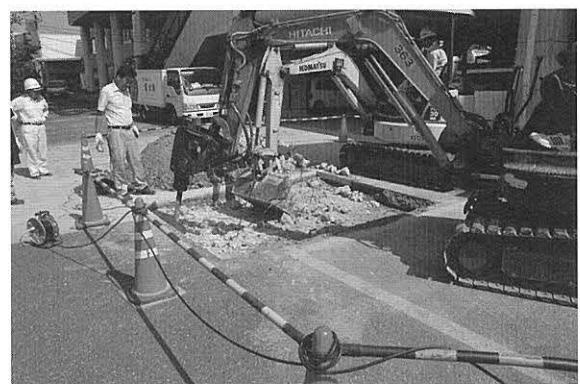


II 区



0 1m

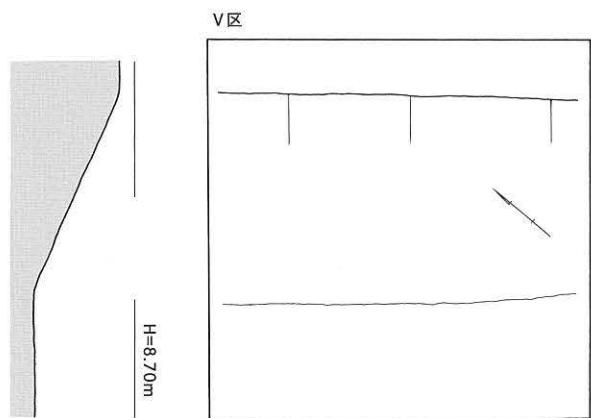
3. 遺構実測図 (S=1/40)



1. 作業風景



2. I 区完掘状況 (北東から)



4. 遺構と遺物

第I区の調査

調査面積は2.5m × 3 mの7.5m²を測る。現地表面から53cmでロームに達した。

SK001 近現代の攪乱である。径117×106cm、深さ26cmを測る。

SK002 東西方向の溝である。最大幅40cm、深さ21cmを測る。調査区内での長さは1.5mを測り、東端は調査区内で立ち上がる。埋土は暗茶褐色を呈す。遺物は土器小片が7点出土した。器種等は不明である。いずれも弥生時代と思われるが、確定はできない。

SD003 東西方向の溝と思われる。遺構検出面から深さ107cmまで掘り下げたが、底面には達しなかった。南側の立ち上がりが出ていないが断面は逆台形の可能性があり、56次調査の中では溝1に近い。埋土は暗茶褐色を呈し、細かなロームブロックを多量に含む。遺物は須恵器が大甕の破片が1点、他には壺や瓶の破片と思われる小片が出土した。土師器は須恵器を模倣した大甕の破片が1点出土した。その他には弥生時代中期の甕や時期不明の土器片が数片出土した。

第II区の調査

調査面積は2 m × 2 mの4 m²を測る。現地表面から48cmでロームに達し、径25cm程の柱穴を2基確認した。埋土は2基とも黒褐色を呈し、細かなロームブロックを多く含む。遺物は出土しなかった。

第III区の調査

調査面積は2 m × 1.8 mの3.6 m²を測る。現地表面から38cm程でロームに達した。事前の確認調査で柱穴らしい掘込みが確認されていたが、すべて一段下げて消滅した。木の根の痕跡と思われ、柱穴などの遺構を確認することはできなかった。

第IV区の調査

調査面積は2 m × 2 mの4 m²を測る。現地表面から31cmでロームに達した。遺構を確認することはできなかった。ロームの状態からは、かなり削平されたものと思われる。

第V区の調査

調査面積は2 m × 2 mの4 m²を測る。調査区の東端部では現地表面から36cmでロームに達した。南西側に向かって落ちており、南西端では現地表面からの深さ87cmを測る。落ちの部分は現代盛土で埋められており近年埋められたものである。

5. 小結

56次調査と同様に既に鳥栖ロームが削平をうけており、かなりの遺構が失われたと推測される。検出した遺構はII区の柱穴2基とI区の溝2条である。56次調査では7世紀初頭の大型掘立柱建物と中世の堀が確認されているが、今回は検出したSD002・003から貿易陶磁器など中世まで降る遺物は出土しておらず、古代の大型掘立柱建物に伴う可能性が高いと考えられる。

表1 遺物出土遺構一覧

遺構番号	区	性格	形状	長径×短径	深さ(cm)	時代	遺 物
001	I	攪乱	円	117×106	26	近代	鉄釘等
002	I	溝		幅37	22	不明	土器片(小片7点 弥生時代か)
003	I	溝?		幅80以上	104以上	7世紀	須恵器(大甕、壺?、瓶?)、土師質大甕(古墳時代後期)、甕(弥生時代中期)、土器片(不明)

1323 警弥郷 B 遺跡第6次調査 (KYB-6)

所在地 福岡市南区弥永5丁目4番1

調査面積 92.1 (遺構面37.8) m²

調査原因 専用住宅建設

担当者 小林義彦

調査期間 2014.9.9 ~ 9.21

処置 記録保存

1. 立地と歴史的環境 (Fig. 1・2)

警弥郷 B 遺跡は、博多湾に面して開けた福岡平野の南西部の春日市と境を接する那珂川右岸の中流域に拡がる沖積地上に立地し、東には低平な春日丘陵が北にむかってのびている。この那珂川右岸の春日丘陵やその裾野には、弥生時代から古墳時代の遺構群が拡がっている。

本遺跡の東にのびる丘陵の北端には、弥生中期後葉の甕棺墓に32面の船載鏡を副葬した岡本遺跡や弥生時代終末期から古墳時代初めの墳墓群として著名な曰佐原遺跡、ガラス製勾玉や小型仿製鏡の鋳型が出土した弥永原遺跡がある。

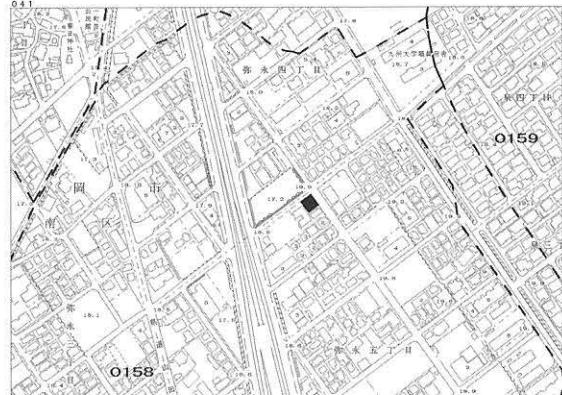


Fig. 1 調査地点位置図 (1/8,000)



Fig. 2 調査区周辺現況図 (1/100)

丘陵の中央部には、前漢鏡や青銅製鉄先を副葬した立石遺跡、平塚遺跡や古墳時代初めの集落遺跡である竹ヶ本遺跡のほかその東縁には国産青銅利器を埋納した西方遺跡や弥生時代前期の甕棺墓地の伯玄社遺跡がある。丘陵基部の小支丘上には環濠集落として著名な大南遺跡や一の谷遺跡があり、その南には弥生中期後葉の甕棺墓地である原遺跡や門田遺跡があり、湾入する開析谷の辻田遺跡からは笠や農耕具などの木製品が出土している。また、本調査区東方の支丘上には下白水大塚古墳や日拝塚古墳などの前方後円墳が立地している。

警弥郷B遺跡は、那珂川の中流域左岸に沿って春日市から北へ舌状に伸びた沖積地上に立地し、1972（昭和47）年に山陽新幹線の高架軌道建設に先立って実施された第1次調査を嚆矢としてこれまでに5地点で発掘調査が実施されている。第2次調査区では、弥生時代前期と中世末の水田跡が、第3次調査区では、弥生時代の掘立柱建物や土壙と古墳時代の堅穴住居が検出されている。第4次調査区では、古代末の掘立柱建物や土壙・溝が、また、第5次調査区では弥生時代中期中葉の小兒甕棺墓群と古墳時代前～中期の堅穴住居のほかに溝が検出されている。第6次調査区は、この警弥郷B遺跡の東北部、第2次調査区から北へ200m、第3次調査区から西へ100mの距離に位置し、小規模事業に伴う緊急発掘調査で、補助事業として実施した。

2. 調査の記録 (Fig. 3・4 ph.1)

第6次調査区は、旧状は水田で近年に水田が廃されて道路面まで一気に埋め立てられており、その基本的層序は、客土層が150cmの厚さで堆積し、その下には層厚が15～25cmの黄茶褐色粘性土と濃灰青色土（1・2層）を挟んで、10～17cmの厚さで弥生時代後期から古墳時代の甕や高壺・鉢・器台土器のほかに土製紡錘車や石包丁などを含む遺物包含層（3層）が堆積している。この遺物包含層が基盤をなし、その下層には、遺物を含んだ粗砂層（4・5層）が110cm+ α の深さまで厚く堆積している。遺構は、3層の上面で基底幅が30cm、高さが5～8cmの畦畔が検出され、3層が水田の基盤層を成している。

出土遺物 (Fig. 5 ph.2)

1～10は粗砂層、11～26は整地層出土。1は、二重口縁甕。強く内傾する口縁部の外縁は斜め下方に強く張り出し、頸部との境に巡らせたコ字凸帯にはヘラ工具で×状に線刻している。2・3は、大型の「く」字状口縁の甕で頸部にコ字凸帯が巡る。口径は、いずれも56cm。2は口縁端部に×状、頸部凸帯には斜行するヘラ工具による線刻がある。4は、口径が14.2cmの土師器甕で「く」字状の口縁部は直口気味に立ち上がる。5は、口径が12.4cm、器高が5.6cmの鉢。体部は偏球形で、口縁部は僅かに内傾する。6・7は、土師

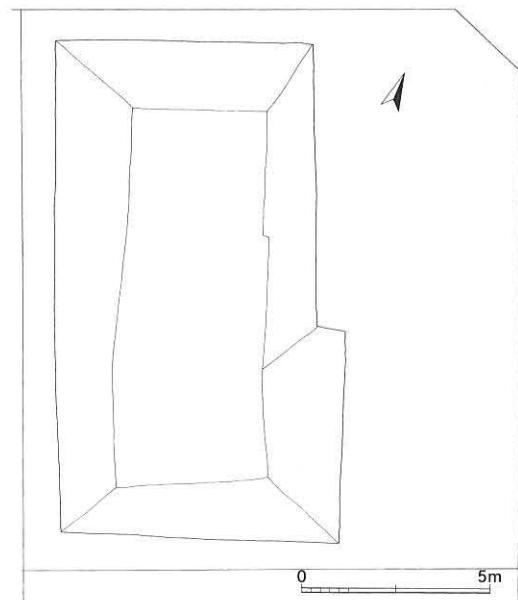


Fig. 3 調査区全体図 (1/200)

- 1. 黄褐色粘性土：
軟粘質で少量の砂粒混入
- 2. 濃灰青色土：
粗砂粒・マンガン沈殿粒混入
(旧耕土)
- 3. 暗茶褐色土：遺物包含層
(弥生中期土器を主体とし
須恵器小片を含む)
- 4. 淡茶褐色粗砂層：
少量の遺物を含む
- 5. 黄茶褐色粗砂層
- 6. 黒茶褐色土：畦畔

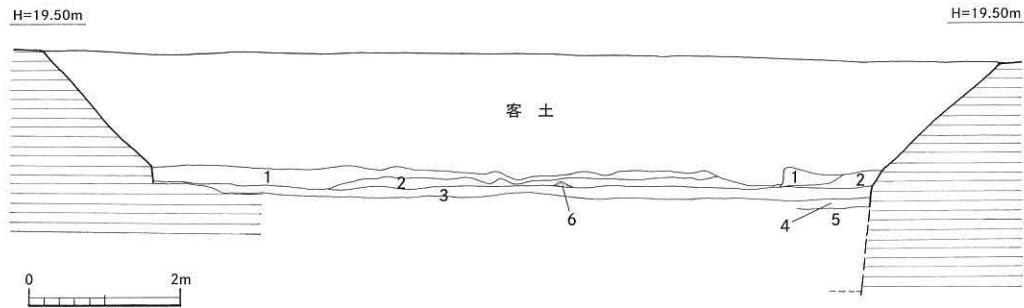


Fig. 4 調査区西壁土層断面実測図 (1/100)

器高坏。6は口径が6.7cmで坏部は浅く、垂直な端部は凹レンズ状に浅い凹線状をなす。8・9は器台。8は、ラッパ状に外反する脚部で脚径は17.4cm。9の受け部は大きく外反し、口径は15cm。10は、天井部が内傾する支脚で中央部に円孔を穿っている。11は、尖底の甕底部で棒状工具による円孔がある。12は底径が12.2cmの台付鉢。13～15は、土師器高坏である。13は、口径が16.4cmで、内面に上下から摘み出した三角凸帯状の段を作る。14は、大きく膨らむ脚部の中位に孔径が1cmの円孔を穿っている。15は、朝顔状に外

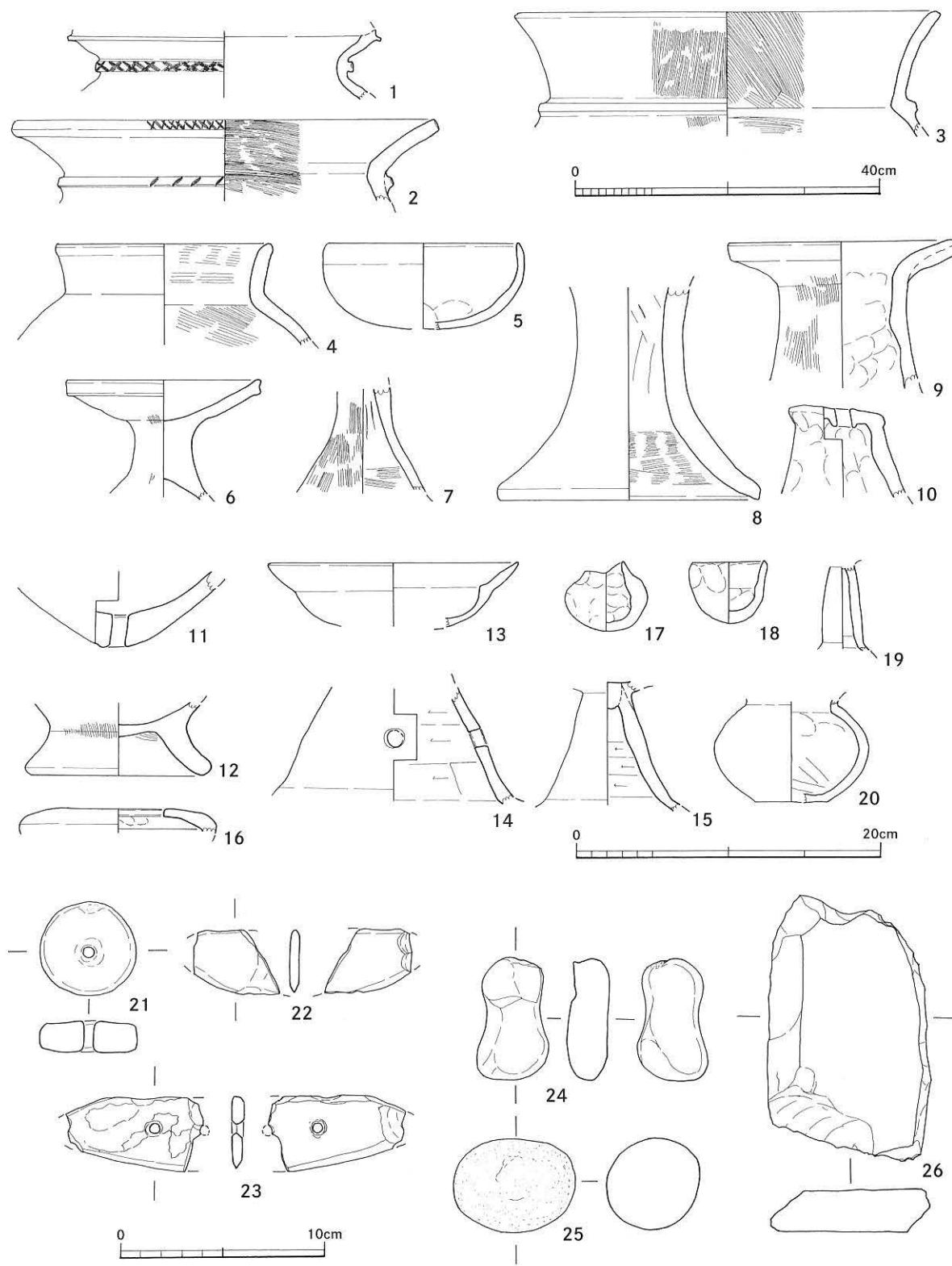


Fig. 5 出土遺物 (1/3 · 1/4 · 1/8)

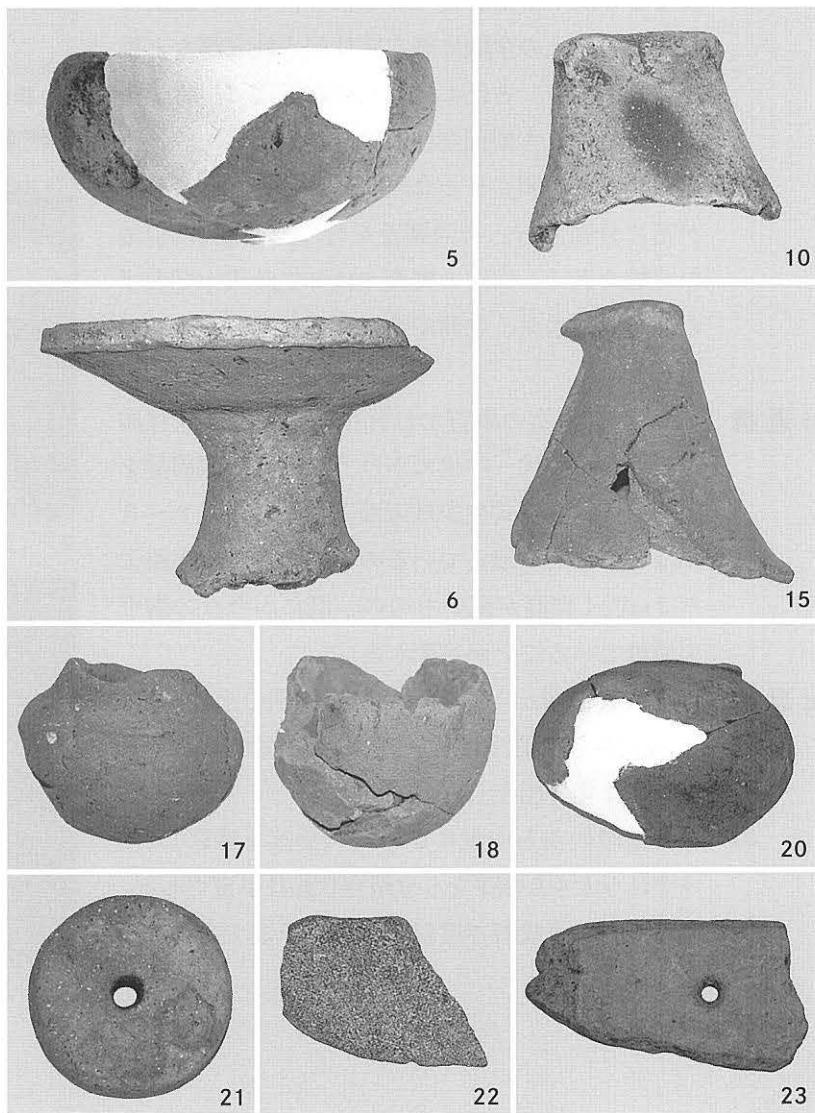
反する脚部で内面はヘラケズリ。16は、口径が12.8cmの器台で口縁部は大きく内傾する。17～19はミニチュア土器。17は、口縁部は短く直口する。口径は2.4cm、器高は4.5cm。18は、口径が4cm、器高が4.7cmの鉢で口縁部は直口気味に小さく外反する。19は、高壺の脚でエンタシス状に膨らんだ後大きく屈曲してラッパ状に外反する。20は、平底の小型壺で口縁部は、偏球形の体部から大きく屈曲して外反する。21は、直径が4.8cm、厚さが1.2～1.5cmの土製紡錘車。22・23は、石包丁。23は、頁岩質で、厚さが6mmの身の中央に1.8cmの間隔で孔径が6～7mmの紐孔を穿つ。22は、砂岩質の未製品で紐孔は未穿孔。24は、長さが6cm、幅が3.5cmの分銅形の石錘。上縁には紐の結節痕が残る。砂岩質。25は、花崗岩質の摺石。長さが6cm、幅は4.6cm、厚さは4.6cm。26は、砥石。

3. おわりに

本調査で検出した遺構は、畦畔を伴う古代の水田跡のみである。水田跡は、第2次調査でも確認されている。しかしながら、東へ100mの距離にある第3次調査では、甕棺墓群を伴う住居が報告されており、明瞭な旧地形は復原し難いが、古代以降荒れ野の氾濫原の可耕地化のために隣接する低丘陵の土砂を砂上に整地して可耕地の拡大を図ったものと考えられる。



Ph. 1 調査区全景（東から）



Ph. 2 出土遺物（縮尺不同）

1325 有田遺跡群第251次調査 (ART-251)

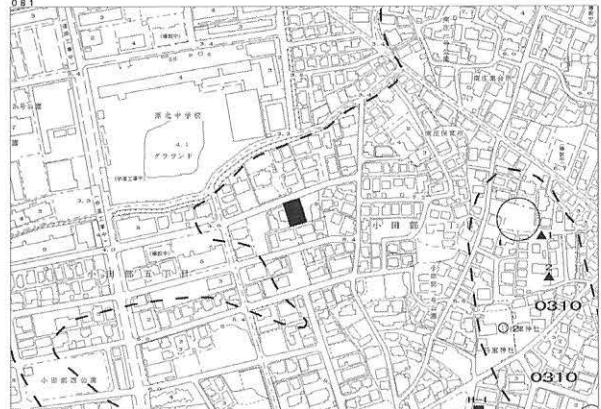
所在地	早良区小田部1丁目226-2、226-6	調査面積	318.7 m ²
調査原因	宅地造成	担当者	屋山洋
調査期間	2013.9.17～10.8	処置	記録保存

位置と環境 有田遺跡群は早良平野の北側、室見川の右岸に位置し、標高約15mの南北1.7km、東西0.8kmの台地上とその周辺に分布する。台地は雨水等の浸食により大小の谷が入り込んでおり、八つ手状の複雑な形状を呈す。台地上の古い遺物としてはナイフ型石器などの旧石器が出土している他、縄文時代では中～後期の貯蔵穴がある。弥生時代前期になると溝や集落が見られるようになり、後期になると台地上の全域に竪穴式住居や柱穴群など集落が拡大する。古代には台地頂部近辺で早良郡衙と考えられる大型掘立柱建物群が出土した他、三本柵とそれに囲まれた倉庫群など台地全体に遺構が密に分布する。今回調査を行った251次は台地の北端に近く、周辺の調査では弥生時代中期前半の竪穴式住居や、中期中頃の甕棺墓等が出土している。

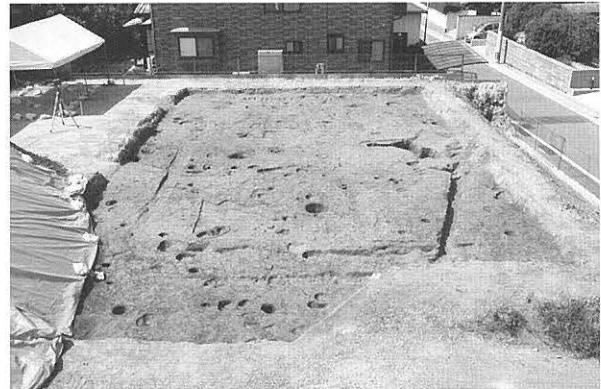
検出遺構 今回の251次の調査では弥生時代の竪穴式住居1軒と弥生時代～中世にかけての柱穴状遺構群を確認した。竪穴式住居は床面下の掘込みが2～3cmほど部分的に残っているのみで、現状で道路より2m近く標高が高いものの、既にかなりの削平を受けていることが判明した。

出土遺物 竪穴式住居から弥生時代中～後期の土器片が、柱穴群からは弥生時代～中世の遺物がコンテナケース1箱分出土した。

まとめ 弥生時代から中世にかけての集落を確認した。いずれも大きな削平をうけ遺存状態は不良である。報告書は平成27年度以降に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (81 室見 309 1:8000)



2. I区全景 (東から)

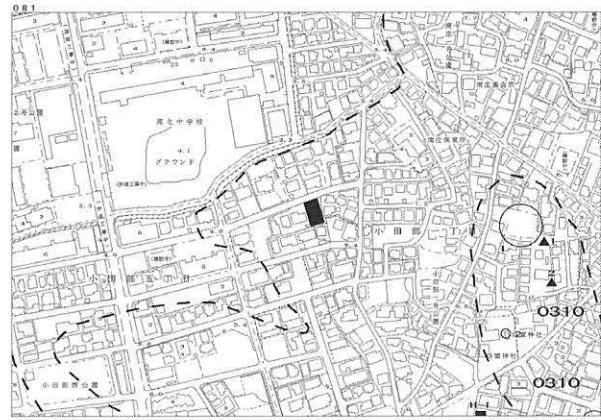


3. II区全景 (東から)

1326 有田遺跡群第252次調査 (ART-252)

所在地	早良区小田部1丁目226-1他	調査面積	245.9 m ²
調査原因	宅地造成	担当者	屋山洋
調査期間	2013.10.9 ~ 11.20	処置	記録保存

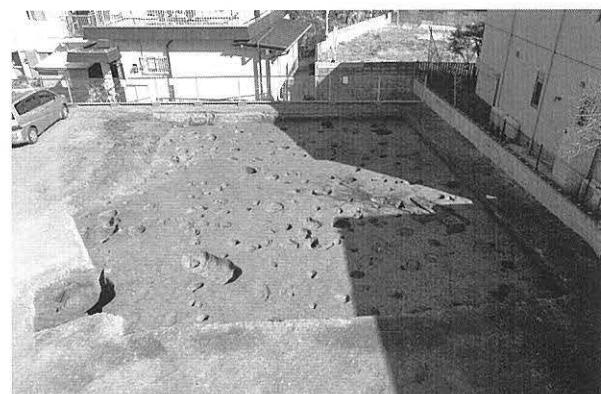
位置と環境 有田遺跡群は早良平野の北側、室見川の右岸に位置し、標高約15mの南北1.7km、東西0.8kmの台地上とその周辺に分布する。台地は雨水等の浸食により大小の谷が入り込んでおり、八つ手状の複雑な形状を呈す。台地上の古い遺物としてはナイフ型石器などの旧石器が出土している他、縄文時代では中～後期の貯蔵穴がある。弥生時代前期になると溝や集落が見られるようになり、後期になると台地上の全域に竪穴式住居や柱穴群など集落が拡大する。古代には台地頂部近辺で早良郡衙と考えられる大型掘立柱建物群が出土した他、三本柵とそれに囲まれた倉庫群など台地全体に遺構が密に分布する。今回調査を行った252次は台地の北端に近く、周辺の調査では弥生時代中期前半の竪穴式住居や、中期中頃の甕棺墓等が出土している。



1. 調査地点の位置 (81 室見 309 1:8000)



2. I区全景 (西から)



3. II区全景 (西から)

検出遺構 今回の252次の調査では弥生時代前期から中期前半の貯蔵穴2基と弥生時代～中世にかけての土坑と柱穴状遺構群を確認した。貯蔵穴は平面円形でフラスコタイプと平面長方形型がそれぞれ1基ずつ出土した。フラスコタイプは深さ120cmを計る。調査区北東部では遺構が密になり、一部中世と思われる包含層が遺存していたことから北東側に浅い谷があり、それにむけて傾斜していたと思われる。

出土遺物 遺物はコンテナケース2箱分が出土した。フラスコ型貯蔵穴では底面から20cm程浮いた状態で中期前半の土器片が出土した。

まとめ 中世の土坑・柱穴状遺構は全体に分布するため、それまでには造成が進んでいたと考えられる。谷に近い北東隅は当時の表土に近いため、遺構が密に遺存したものである。

報告書は平成27年度以降に刊行予定である。

1327 元岡・桑原遺跡群第62次調査 (MOT-62)

所在地 西区大字元岡

調査面積 1374.4 m²

調査原因 学校造成工事

担当者 大塚紀宜

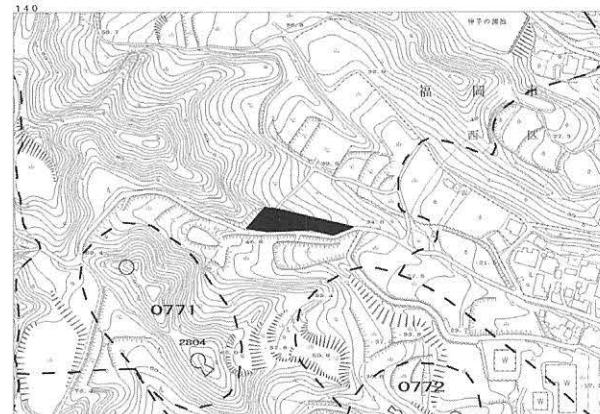
調査期間 2013.9.1～11.15

処置 記録保存

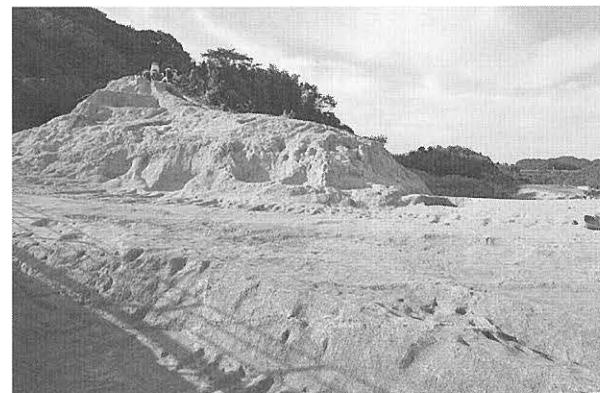
位置と環境 調査区は東西方向に延びる狭い尾根と南に傾斜する斜面からなる。調査区西側部分は大きく削平され、旧地形を窺うことは困難である。調査区東側の斜面は果樹園により段造成がなされる。尾根北側は造成で切り落とされ、崖面になっている。調査区西側部分は現況より3m下まで土取りによって削られ、その後埋め戻されて平坦に造成されていることが判明。遺構は遺存しない。調査区東側の斜面部分は、表土を除去したところ果樹園造成以前の造成痕跡が確認された。これは階段状に緩く段造成されており、遺構は見られない。表土中の遺物からみて、近世～現代の間の造成とみられ、果樹園以前に畠地として利用されていたことが考えられる。尾根部分も造成によって大きく削られており、表土直下で花崗岩盤が露出する箇所が多い。

検出遺構 尾根の南側斜面部分に中世の竪穴11基が確認できた。竪穴は小型の円形土坑と、やや大型の長方形土坑に分けられる。土坑内からの出土遺物はない。

出土遺物 調査区全体でコンテナケース1箱弱の遺物が出土したが、表土から出土した中世後半の土師器皿（竪穴の時期とみられる）と土師器塊破片（高台部分小片で時期不明）の他は近世以降の遺物で、古代以前の遺物は皆無である。



1. 調査地点の位置 (140 元岡 2782 1:8000)



2. I区全景 (東から)



3. II区全景 (西から)

1328 元岡・桑原遺跡群第63次調査 (MOT-63)

所在地 西区大字元岡地内

調査面積 1244 m²

調査原因 道路建設

担当者 大森真衣子

調査期間 2013.10.1 ~ 2014.4.23

処置 記録保存

位置と環境 玄界灘に突出する糸島半島東側基部の丘陵地帯に位置している。今回調査を行った第63次調査地点は、元岡・桑原遺跡群の南側に位置しており、周囲には古代の瓦窯跡、鍛冶炉等が検出された第31次調査地点がある。この第31次調査地点から尾根を一つ隔てた南に開口する谷部及び尾根部が調査地点にあたる。後世の畑造成の影響により当時の地形の大部分は失われている。

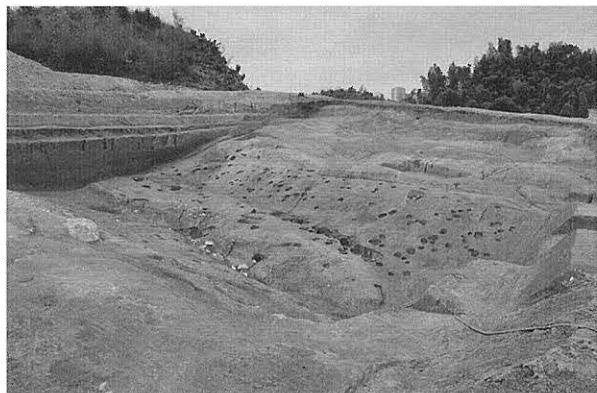
検出遺構と出土遺物 本調査地点では、谷部に当たるⅠ区からは谷の東斜面からは多数のピット状遺構が検出された。ピット状遺構の配置に規則性はなく杭の痕跡ではないかと考えられる。その他に遺構は検出されなかった。出土遺物は谷の埋没土中からの出土であった。古代～中世にかけての土師器や白磁等の遺物が出土している。

尾根部に当たるⅡ区からは、近世の墓が27基検出された。墓は方形の掘方で深いもので250cmを測る。いずれも甕の棺ではなく、桶あるいは木棺の可能性がある。検出された墓のうち、細かい骨片や歯のみ出土したものを含めると、13基の墓から骨が出土している。副葬品として、寛永通宝・キセル・ハサミ等が出土している。

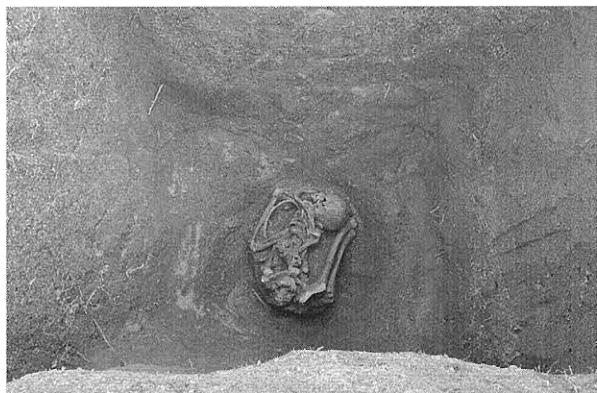
まとめ 本調査地点では、谷部からはまとまった遺物量を得るに至らず、杭の痕跡のような多数のピット状遺構のみの検出にとどまった。近隣に生活区域があったと想定されるが詳細は不明である。また、近世になると尾根部に墓が営まれるようになる。この尾根の半分以上は後世の畑造成の破壊により詳細は不明であるが、周辺に大型の石材が散在していることから、近世においては尾根部全体が墓域として機能していたと考えられる。



1. 調査地点の位置 (140 元岡 2782 1:8000)



2. 谷部全景 (南から)



3. 人骨出土状況 (北から)

1329 有田遺跡群第253次調査 (ART-253)

所在地 早良区有田一丁目13-4

調査面積 15.0 m²

調査原因 駐車場設置

担当者 比嘉えりか

調査期間 2013.10.1

処置 現地保存

位置と環境

調査地は、有田遺跡群の東部、金屑川西岸の微高地上に位置する。敷地は東面道路から約1.1mほど高い。周辺では8・21・49・249次等が実施され、古墳時代前期・後期から奈良・平安時代を中心とする時期の集落跡が確認されている。

今回は、敷地の南端に道路面から敷地内へ上る緩やかなスロープ状の掘り車庫を作る計画であったため、試掘調査を実施したところ、GL-60cmで包含層、GL-70cmのローム上で遺構が確認された。そのため、切土によって埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲（東西5m×南北3m=15m²）について、発掘調査を実施した。

なお、今回の工事の影響が及ぶのは遺構面から数cm下のみであったため、一段掘り下げたところで掘削を中断し、なるべく現地保存を図った。

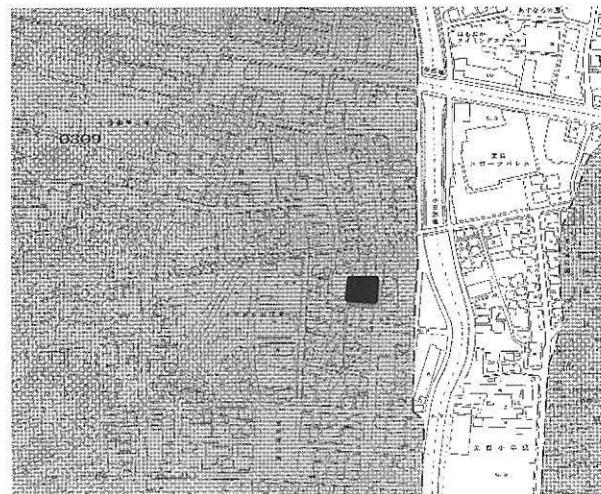
検出遺構

遺構はローム上で検出したが、ローム上に堆積した暗褐色土（包含層、第5層）上から掘り込んだ遺構も含まれる可能性がある。検出された遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑1基、柱穴である。

遺構の覆土は、黒褐色と灰褐色があり、灰褐色土の遺構からは7世紀以降の須恵器・土師器片が出土した。竪穴住居跡は、灰褐色の埋土で、残存の深さは約5cmと非常に浅く、削平が著しい。主柱穴やカマド等の付属施設は確認できなかった。

出土遺物

遺物は、大部分が竪穴住居跡内から出土した。1は土師器の甕片。口縁部は緩やかに外反し、胴部外面にハケメを残す。2~7は須恵器。2~6は壺H。2~5は蓋で、天井部にヘラ記号あり。口径12.7~12.8cm。6は底面に回転ヘラ削りを残す。口径10.4cm・受け部径12.7cm。7は有蓋高壺の蓋。にぶい赤褐色を呈す。口径13.4cm。



第1図 調査地点の位置 (82 原 309 1:8000)

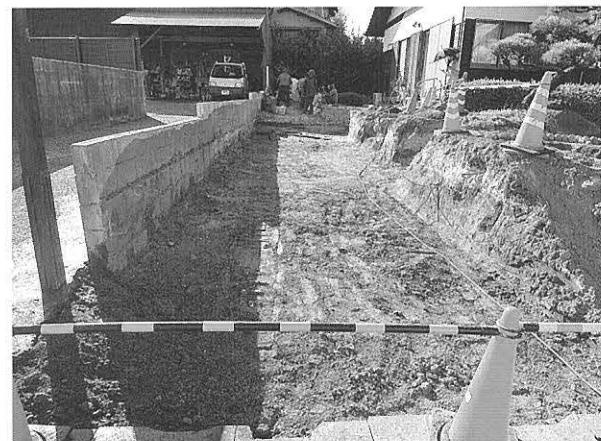


写真1 調査地全景 (東から)

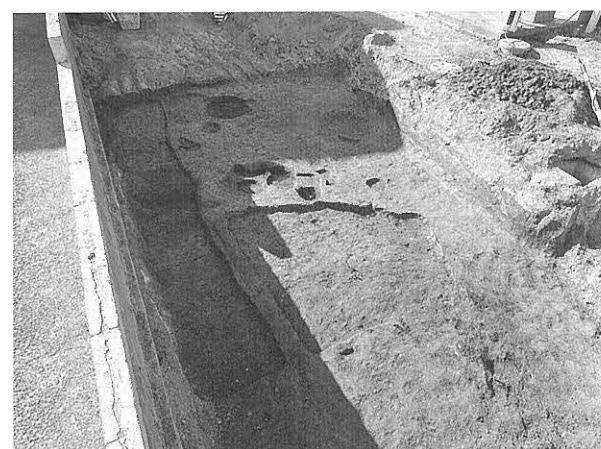


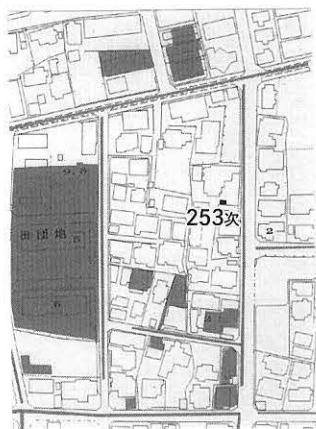
写真2 調査区全景 (南東から)

まとめ

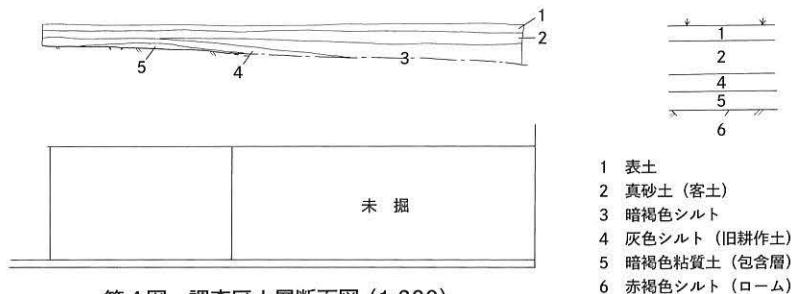
出土した須恵器から、竪穴住居跡は7世紀前半頃の所産と考えられる。周辺調査事例と同様、当該期の集落が広がっていたのであろう。周辺の開発には注意が必要である。



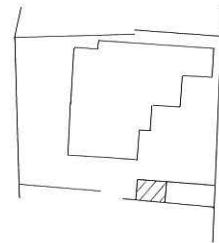
写真3 調査区土層断面 (北壁)



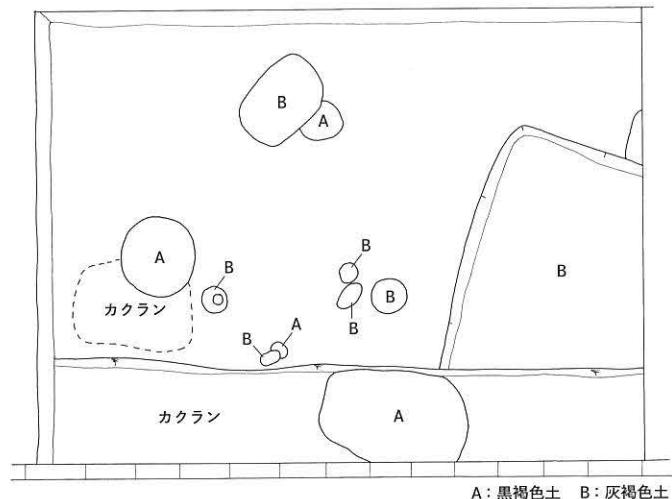
第2図 調査地位置図 (1:4000)



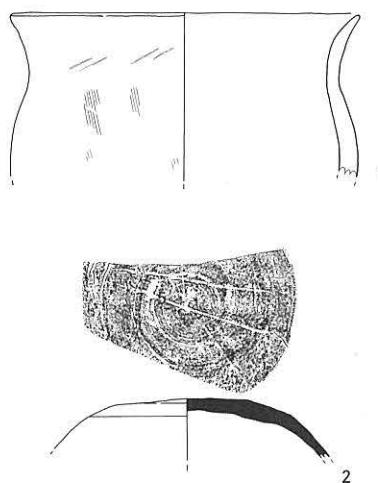
第4図 調査区土層断面図 (1:200)



第3図 調査地位置図 (1:600)



第5図 遺構配置図 (1:50)



第6図 遺物実測図 (1:3)

1331 元岡・桑原遺跡群第64次調査 (MOT-64)

所在地 西区大字元岡
調査原因 大学移転用地造成
調査期間 2013.10.1 ~ 2014.4.30

調査面積 2852 m²
担当者 清金良太
処置 記録保存

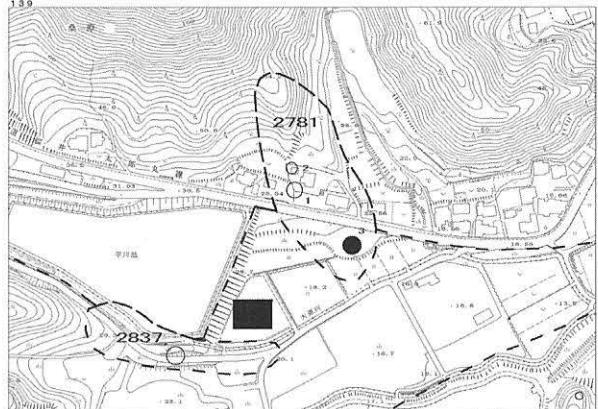
位置と環境 元岡・桑原遺跡群は福岡市の西端にあたり、玄界灘に突出する糸島半島丘陵地帯に位置する。第64次調査区は元岡・桑原遺跡群の北側にあり、北と南に広がる丘陵間の谷部に位置する。調査区の西側には平川池が所在し、周りを2、12、15、33次調査されている。

検出遺構 第64次調査のI区II区において、出土した主なものは弥生時代中期～古墳時代初めにかけての遺物包含層と、古代の掘立柱建物などが見つかった。III区から出土した主なものは、古墳が1基、中世の包含層と溝、近世の田に使用されたと考えられる地境石などが挙げられる。古墳の石室はそのほとんどが破壊されており、玄門から奥壁までの長さは2.9mであった。

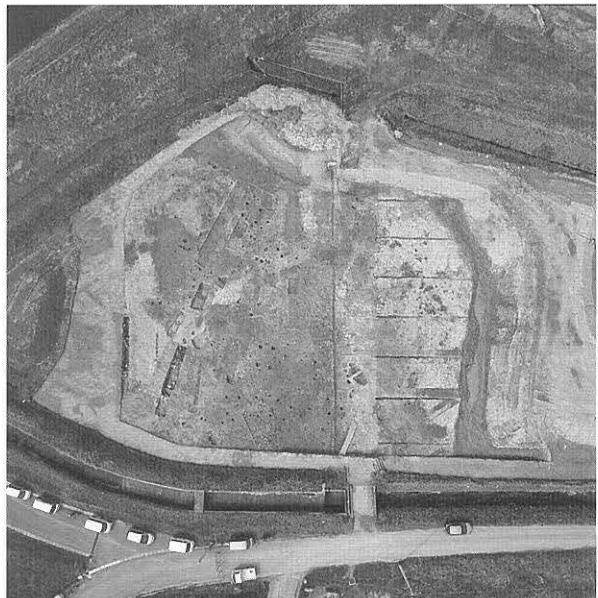
出土遺物 第64次調査におけるI区II区の主な出土遺物として瓦質土器があげられる。遺物包含層から出土し、第2次調査の4区で出土した瓦質土器と接合する可能性がある。III区でみつかった古墳から出土したものとして、TK217の須恵器と耳環、鈴がみつかっている。中世のものとしては、12～13世紀頃の磁器がみつかっている。

まとめ 主に出土したのは、弥生時代中期～古墳時代初めにかけての遺物包含層と、古墳1基、中世の溝、近世の地境石であった。古墳については当初予想されていた場所とは違った所での検出となっている。南側に分布する石ヶ元古墳群とは一部年代が同じであり、古墳の分布と合わせて検討が必要である。

調査報告書は27年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (140 元岡 2782 1:8000)



2. II区全景



3. 出土瓦質土器

1333 博多遺跡群第199次調査 (HKT-199)

所在地 博多区御供所町302番

調査面積 263m²

調査原因 共同住宅

担当者 荒牧宏行

調査期間 2013.11.15 ~ 2014.3.20

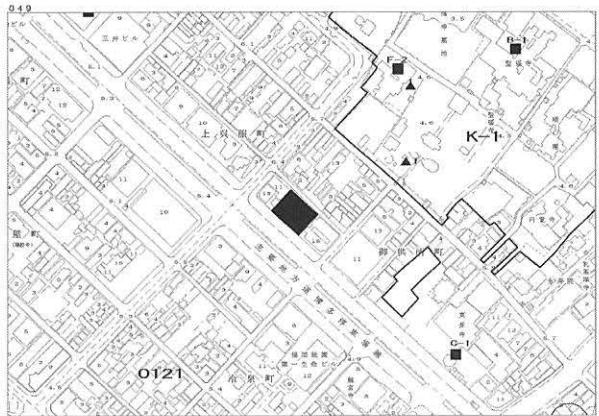
処置 記録保存

位置と環境 地山の砂丘のレベルが南側で標高3.8m、北側で2.9mを測り、比高差約1.0mの傾斜がみられる。調査地点は聖福寺と道路状遺構を隔て向かい合う中世における中心的な位置である。

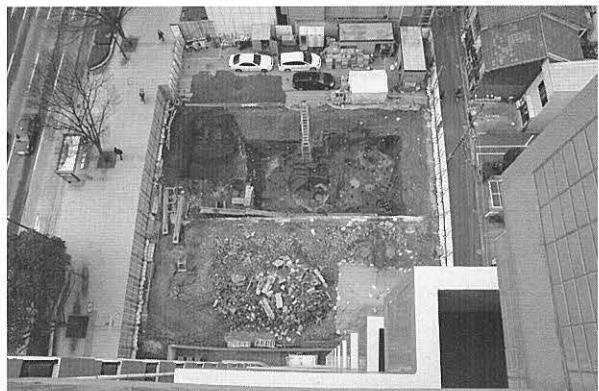
検出遺構 およそ2mの整地層（包含層）を上面から約6面程度の検出面に設定した。第1面は15、16世紀代の中世末から江戸時代の近世までの遺構が主で、最下面是奈良時代の須恵器片が出土し、柱穴が主に検出された。中間層の検出面は12、13世紀代の遺構、遺物が多く検出され、緑釉の磁州窯花瓶片など貴重な陶磁器も出土し、博多の中心である聖福寺前の立地が関連しているものと考えられる。町筋の方向も溝や井戸、掘立柱建物等から捉えることができた。

出土遺物 コンテナ533箱分が出土した。土師器、陶磁器類、陶器の犬のミニチュアのほか最上面から中世末の黒田氏家紋瓦、下面からは人骨1体、馬、魚等の骨や円形の曲げ物に入っていたと思われる獸骨等が出土した。

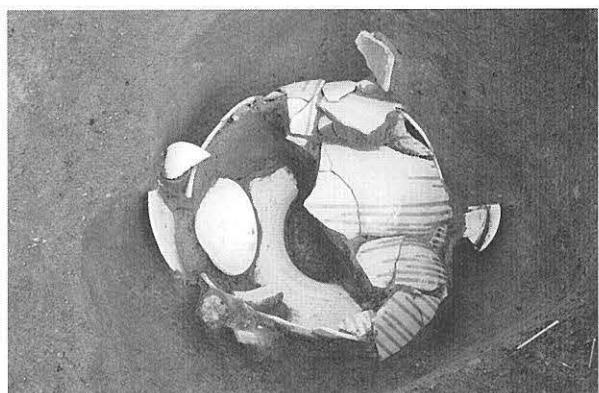
まとめ 多量の陶磁器類や白磁だまりなど中世の貿易都市の中心を示すものが判明した。また、中世末から近世にかけての鋳造遺構も聖福寺との関連から注意される。



1. 調査地点の位置 (49 天神 212 1:8000)



2. 地山面全景



3. 陶器壺埋置

1334 福岡城跡第72次調査 (FUE-72)

所在地 中央区域内5番2号

調査面積 346.2 m²

調査原因 史跡整備

担当者 瀧本正志

調査期間 2013.11.19 ~ 2014.3.28

処置 埋め戻し保存

位置と環境

調査対象の武具櫓は、福岡城本丸南端に位置する長さ63.3m、高さ12m（法面長14.2m）の石垣天端に福岡城創建時から所在する建物で、絵図などから二重二階の多聞櫓と建物両端に三重三階櫓および付平櫓で構成されることを知る。大正5年に移築されるまでに石垣の改修も含め数回の建替えが行われている。今回の調査は復元整備を行うための最終期建物資料を得ることが目的である。

検出遺構

武具櫓西半部を中心に礎石や地覆石、雨落溝、土塀跡を検出した。武具櫓は桁行63.3m（208尺）、梁行9.1m（30尺）の規模で、基本的に6尺5寸（1.978m）を一間として建築されている。東の三重三階櫓と付櫓は、桁行40尺・梁行26尺、西の三重三階櫓と付櫓は桁行53尺・梁行26尺が復元され、建物規模に差異がある。土塀は東付平櫓に連続するもので、全長25m・基底幅0.6m（2尺）を測る。

出土遺物

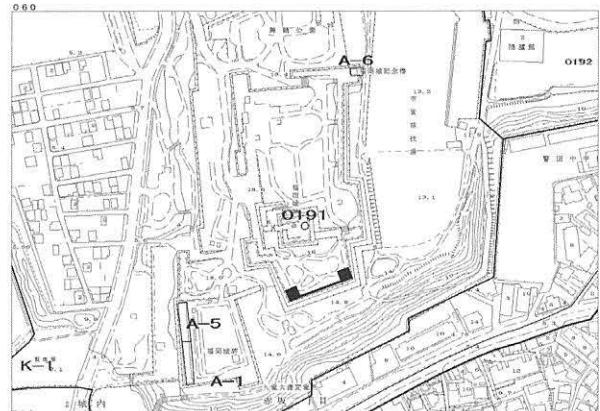
移築元の名島城の軒瓦や朝鮮半島の影響を受けた滴水瓦を含む瓦類や陶磁器などがコンテナ48箱出土している。また、火縄銃や抱大筒の弾丸や弾丸素材の鉛塊、幕末のミニエー銃の弾丸も出土している。

まとめ

今回の調査では、武具櫓建物の規模や基礎構造を明らかにすると共に当時の土木建築技術の様相を知ることが出来た。併せて、火縄銃弾丸などの出土は遺物から建物の由来や性格を出土遺物でも証明し、ミニエー銃の弾丸は幕末の動乱期における軍事的様相を如実に示唆するものである。

以上のことから、今調査の成果は近世城郭の変遷を知るうえで学術的価値が極めて高いと言えよう。

発掘調査報告書は、周辺の調査を終了後に刊行予定。



1. 調査地点の位置 (61 六本松 193 1:8000)



2. 西三階櫓跡・西附櫓跡 (北から)



3. 東附櫓跡の雨落溝 (北から)

1335 那珂遺跡群第148次調査 (NAK-148)

所在地	博多区那珂一丁目724番、725番	調査面積	75.6m ²
調査原因	個人住宅	担当者	小林義彦
調査期間	2013.12.2 ~ 12.20	処置	記録保存

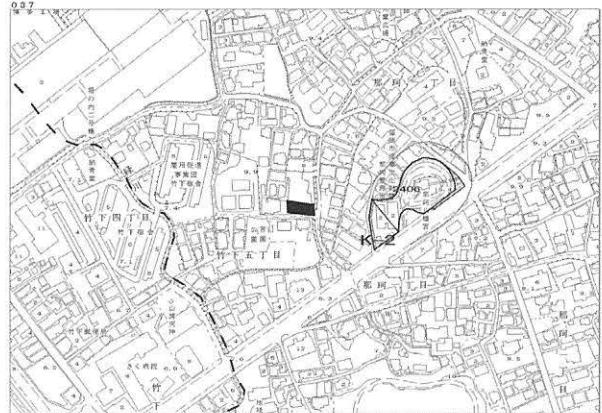
位置と環境 那珂遺跡群は、那珂川の中流域右岸を南北に立地し、南に五十川～井尻B遺跡が、また、北には比恵遺跡群が開析谷を隔てて続いている。第148次調査区は、この那珂遺跡群の中央部の西縁に位置している。

検出遺構 発掘調査では、弥生時代の掘立柱建物1棟・井戸1基・土壙1基と中世の井戸3基・溝2条のほかに柱穴を検出した。このうち、弥生時代の掘立柱建物は1間×1間+ α の南北棟の建物で、梁行長3m、桁行長3.5mを測る。また、井戸は直径が1m～1.3mの楕円形プランのもので、制約上完掘はできなかったが深さは2.5m+ α である。一方、中世の井戸は、平面形が2～2.5mの不整円形プランを呈し、壁面は検出面より1.5mほど所が大きく袋状に膨らんだ後に窄まるが、2～2.5m掘り下げたが完掘できなかった。

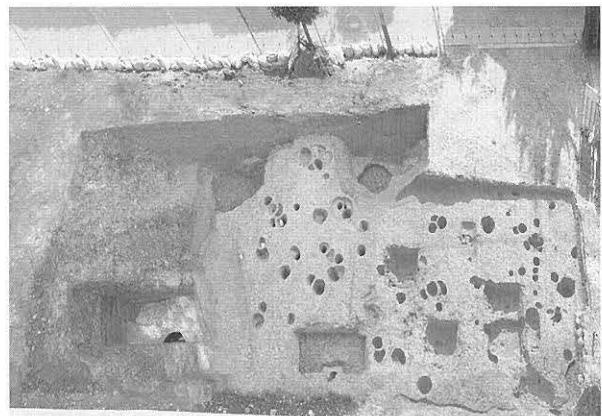
出土遺物 遺物は、掘立柱建物や井戸、土壙などから弥生式土器の壺や甕のほかに中世の輸入磁器や土師器甕、土師器皿などがコンテナケース5箱出土した。

まとめ 本調査区で検出した弥生時代と中世の遺構は、いずれも集落を構成するもので、周辺の調査結果と概ね符合するものである。また、中世の大溝は、居館的施設の可能性を示すものである。

調査報告書は27年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 85 1:8000)



2. 調査全景 (北から)



3. 43・44号井戸 (西から)

1337 中島窯跡第1次調査 (NSY-1)

所在地	南区柏原一丁目1306-1・2、1307	調査面積	102m ²
調査原因	宅地造成	担当者	吉武学
調査期間	2013.12.9～12.21	処置	現状保存

1. 調査の経緯

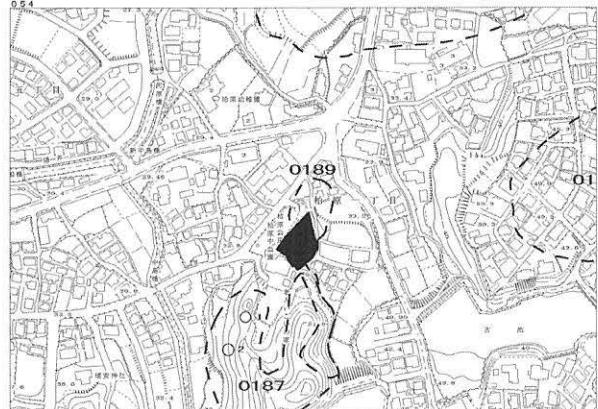
平成25年4月、所有者より南区柏原1丁目の畠地・山林の宅地造成に伴う埋蔵文化財の有無についての照会があった。申請地は須恵器窯跡として周知の遺跡であるため事前協議を行い、窯跡については現状保存を図りつつ宅地開発を行うこととし、遺構の範囲と残存状況を確認するための発掘調査を行った。調査は重機により表土を除去したのち、人力による遺構検出等を行った。記録は全景・個別遺構の撮影、及び1/20縮尺の実測、1/100縮尺の平板測量、公共座標測量により行った。窯内部や灰原の掘削は行わず、終了後、窯跡を土裏で被覆し重機により埋め戻した。

2. 位置と周辺環境

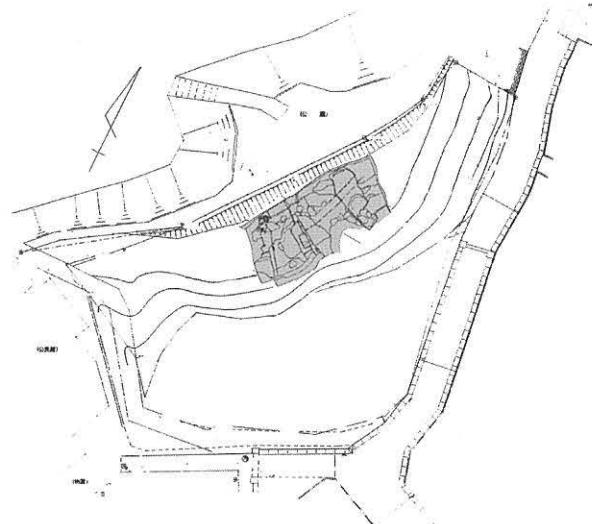
油山の東に位置する片縄山から北へ伸びた枝丘陵の先端部付近に位置する。南側の同一丘陵上には大牟田古墳群A群などの後期古墳群が展開する。丘陵の東西は谷地となり、東側の試掘調査では河川堆積層を確認している。窯跡群は丘陵の東斜面に営まれており、現状では島状に残った独立丘と段状に造成された平坦面（標高39m）、及びその直下の畠地からなり、各々3m前後の比高差がある。丘陵西斜面は公園となっているが、独立丘を残して6m切り下げられた平坦地となっている。

3. 検出遺構

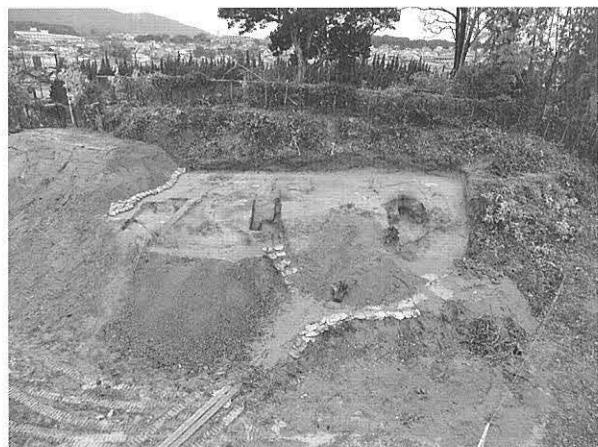
遺構は平坦面上の花崗岩バイラン土～黄褐色粘質土上で確認した。検出遺構は古墳時代後期の須恵器窯3、中世前期の溝2・建物1・石組遺構1である。窯跡は北から1号窯(SY001)、3号窯(SY003)、2号窯(SY002)とした。いずれも段状造成による削平のため天井部は失われている。SY001は從前から存在が確認されていた窯跡であり、開口部(SX009)は土取りや盗掘により抉られている。本体部分は削平され調査区内で壁が収束する。最大幅約2.5m、残存長6.6m。SY002は灰原（炭層）、焚口、及び窯の一部が残るが、窯の奥側は中世遺構に削平される。窯の最大幅0.9m、残存長2.5m。SY003は丘陵を抉り込んだ窪み(SX010)



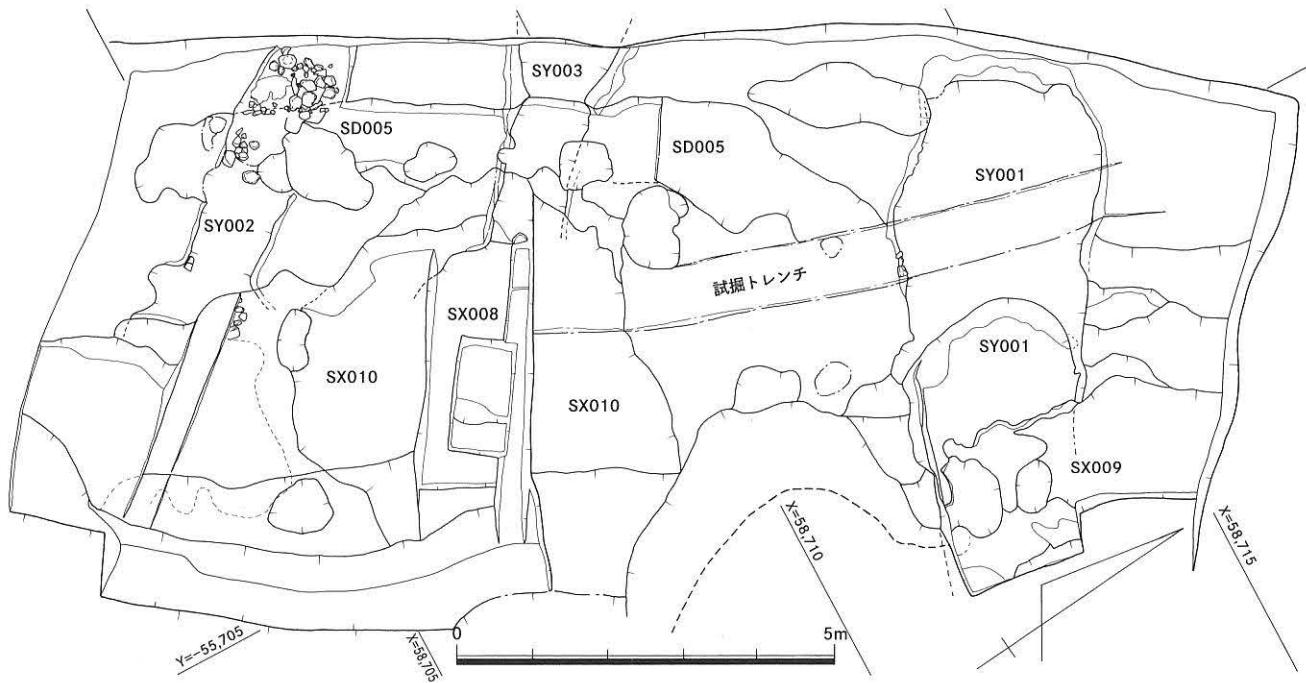
1. 調査区位置図



2. 調査区位置図 (1:1000)



3. 中島窯跡全景 (東から)



4 遺構配置図 (1/100)

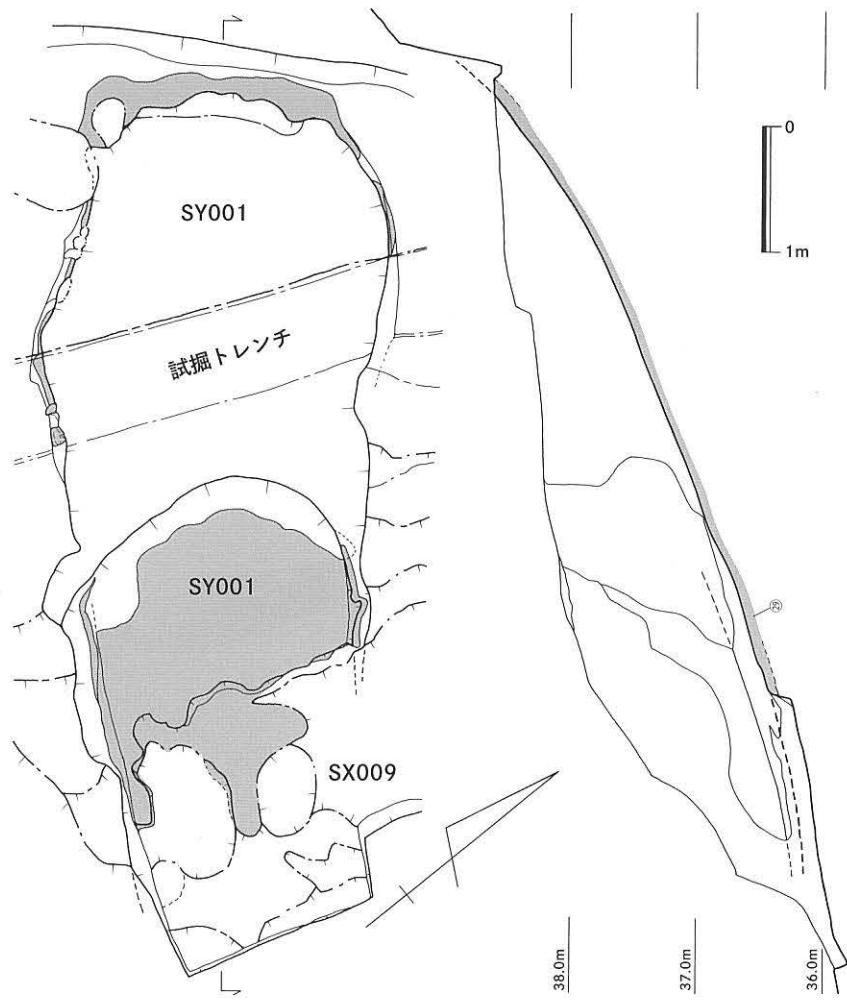
の斜面に窯を穿っており、最も残りが良い。灰原 (SX008)、焚口、及び窯本体の一部を確認した。焚口幅1 m弱で、焚口から奥に2 mのあたりで大きく幅が広がり、調査区西側の公園内に伸びていく。他に、中世前半期の柱穴列と溝SD005（建物に伴うもの）が認められ、11世紀後半～12世紀前半に造成により須恵器窯が削平されたことを示している。

4. 出土遺物

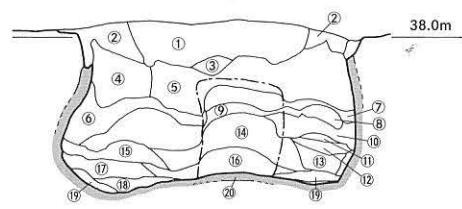
1～14は須恵器である。1・2は大甕で、SY002窯体内出土。3は蓋、4は大型穂か。ともにSY001開口部攢乱内出土。5は長脚の高杯であろう。SX008上層出土。6・7は壺蓋でSY003灰原 (SX008) 炭層直



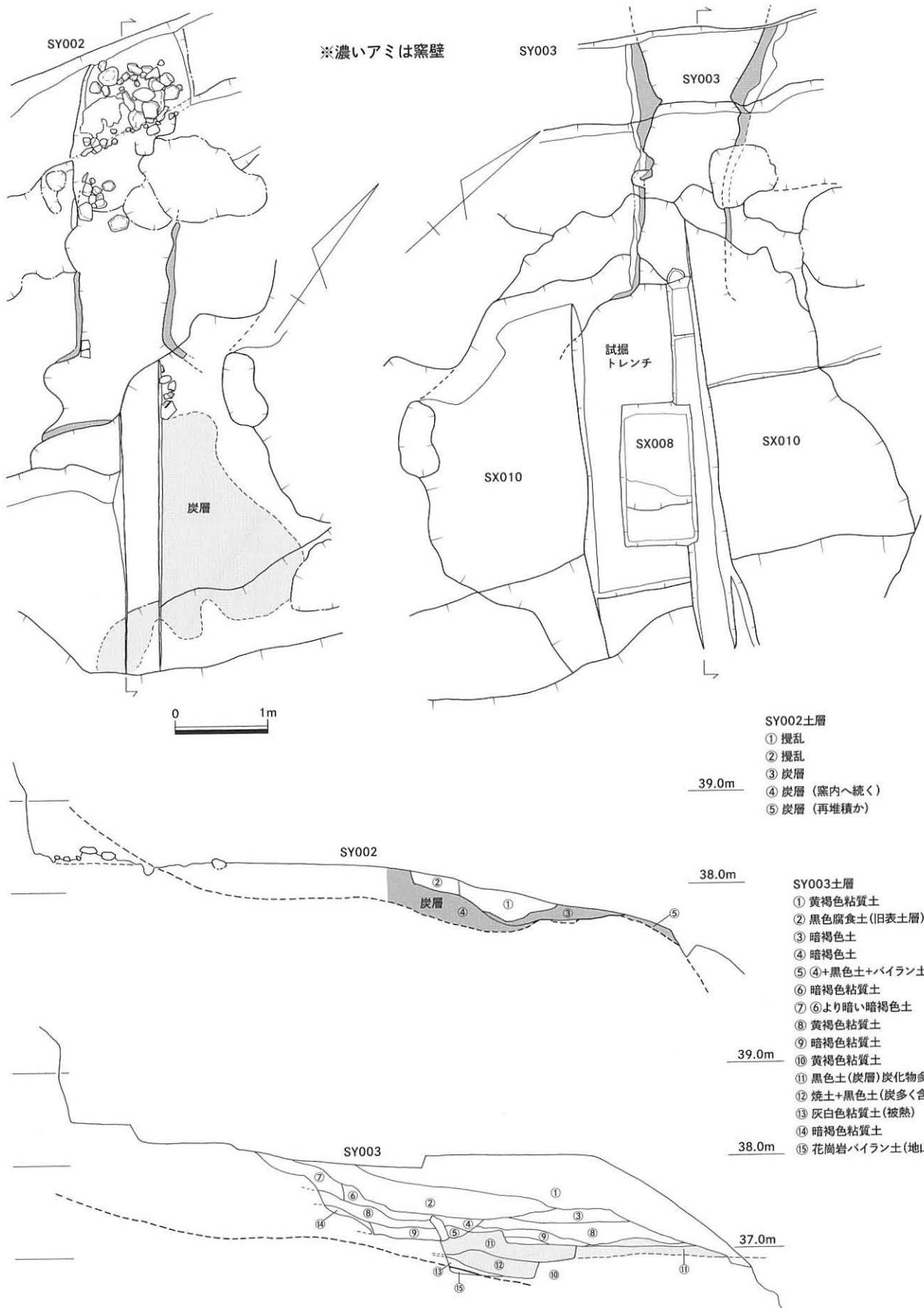
5. SY001 (東から)



- SY001 土層
 ① 黒色腐食土 ② 暗褐色土 (壁崩落跡流入土)
 ③ 暗褐色土+黑色土 ④ 暗褐色粘質土
 ⑤ 黄褐色粘質土 ⑥ 明黄褐色粘質土 (炭少量含む)
 ⑦ 赤褐色粘質土 (縛まりがない) ⑧ 窯体片
 ⑨ 窯体片を主とする崩落土 ⑩ 窯体片
 ⑪ 細かく碎けた礫状粘土 ⑫ 砂層
 ⑬ 焼け締まった灰色粘土
 ⑭ 暗褐色砂質土 (焼けたバイラン土・炭含む)
 ⑮ 暗褐色土 (焼けた灰褐色土・バイラン土含む)
 ⑯ 暗褐色砂質土 (堅く締まる)
 ⑰ ⑯に近似 (窯体片を多く含む)
 ⑱ 暗褐色土 (堅く締まる)
 ⑲ 焼けた灰色粘土+焼土 ⑳ 暗灰白粘土 (床面)



6. SY001 (1/60)

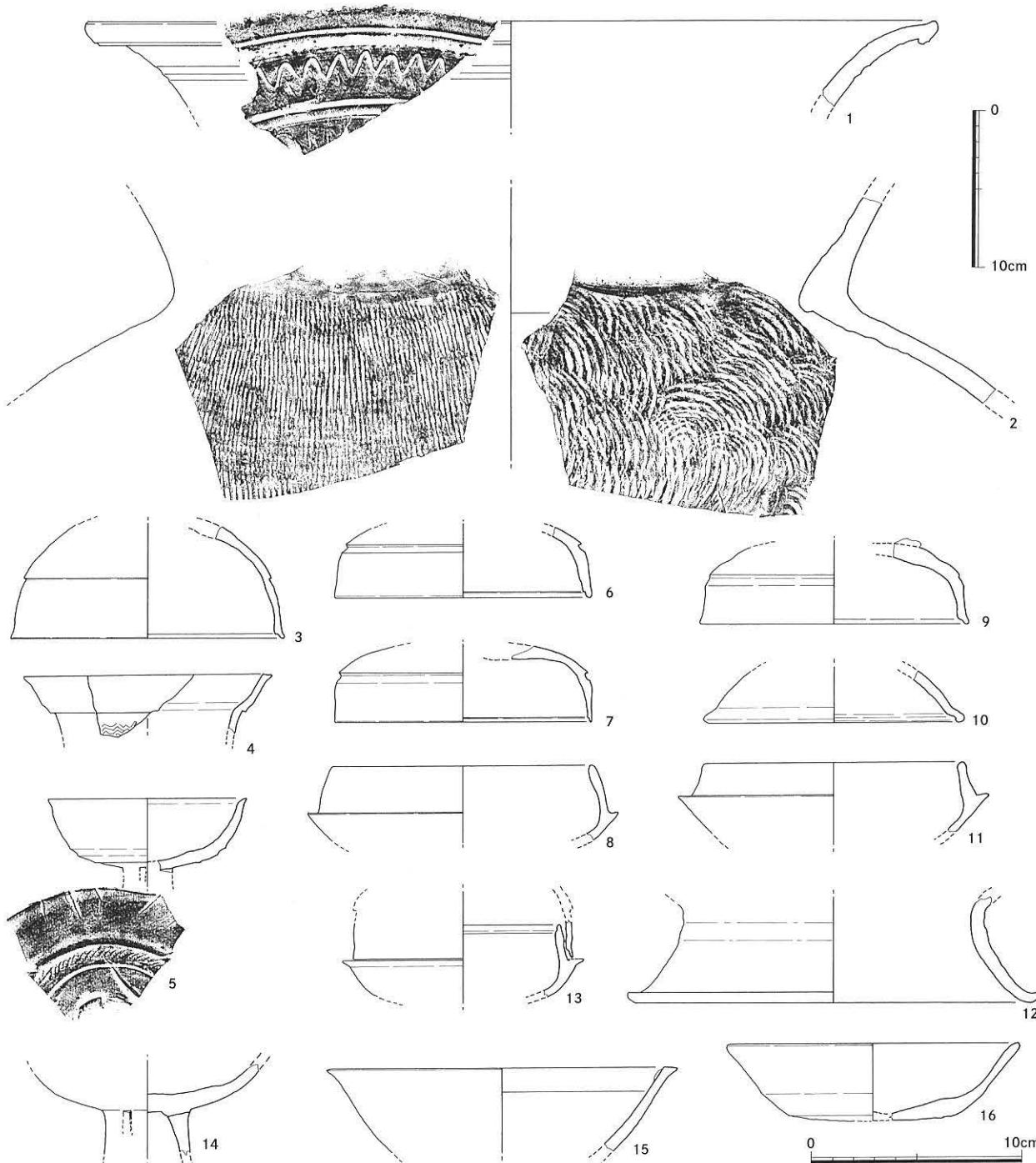


7. SY002・SY003 (1/60)

上出土、8は壺身でSX008炭層出土。9・10は壺蓋、11は壺身、12は脚で、いずれもSY003前庭部（SX010）上層出土。13は蓋と身が融着した壺で表土出土。14は高壺で試掘時出土。15は中世の白磁碗、16は同じく土師器皿でSD005出土。他に焼台とみられる須恵器甕片や弥生後期の壺片などが出土している。

5.まとめ

須恵器窯跡3基を確認した。SY003を中心として遺構の残りも良好である。操業は6世紀前半以降（九州須恵器編年のII期～IIIa期）とみられるが、窯内部や灰原の調査を行っていないので構造や時期幅は明らかではない。また、谷筋を同じくする南の丘陵にも須恵器の散布が認められ、一帯に須恵器窯跡群が広く展開する可能性がある。



8. 出土遺物（1・2は1/4、他は1/3）

1338 比恵遺跡群第130次調査 (HIE-130)

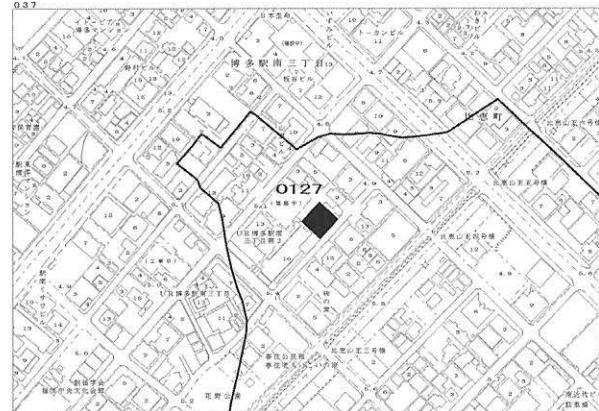
所在地	博多区博多駅南3丁目51～54番	調査面積	348 m ²
調査原因	共同住宅	担当者	屋山洋
調査期間	2014.1.6～3.26	処置	記録保存

位置と環境 比恵遺跡群は福岡平野の中央部に位置し、那珂川と御笠川に挟まれた洪積台地上に位置する。この洪積台地は春日丘陵から断続的に延びる阿蘇山の火碎流堆積による八女粘土層と鳥栖ローム層によるもので、この台地上には須玖遺跡や、井尻B遺跡、五十川遺跡、那珂・比恵遺跡など旧石器時代から古代までの大規模な遺跡が分布する。今回の調査区は比恵遺跡群でも北端に位置している。周囲の調査では弥生時代前期の集落や中期の甕棺墓群、古墳時代～古代の集落などが出土しており、特に台地両端からは弥生時代前期から中期頃の木製品が多く出土している。

検出遺構 調査区は中央～南西側の2/3が台地上で鳥栖ロームを盤とし、北東側1/3は谷部で八女粘土を盤とする。調査区南西から中央部の台地部分は以前溜池が作られた際に削平をうけ、予想された甕棺や竪穴式住居は出土しなかった。谷部に接して径5m前後の竪穴状遺構を3基と土坑数基、柱穴状遺構が出土した。谷部では深い溝状の凹みを2条と土坑・柱穴状遺構を数基確認した。

出土遺物 竪穴状遺構から弥生時代前期中頃から後半の土器と共に多くの木器と木製品が出土した。土器の中には赤色顔料を塗布した彩色壺などがあり、木器は竪杵や臼、鍬、杓、斧柄、鎌柄などの農工具の他、柄杓、匙、建築部材、木製角杯など多岐にわたる。

まとめ 弥生時代前期～中期前半の集落を確認した。竪穴状掘込は湧水が多く木材貯蔵用であった可能性がある。出土した木器の多くが未製品で、この集落で多種の木器を製造していたことが判る。報告書は平成27年度の刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 127 1:8000)



2. 2区全景 (西から)



3. SK004遺物出土状況 (南から)

1339 博多遺跡群第200次調査 (HKT-200)

所在地 博多区冷泉町222～225

調査面積 228m²

調査原因 社屋

担当者 山崎龍雄・吉武学・佐々木蘭貞

調査期間 2014.2.20～6.20

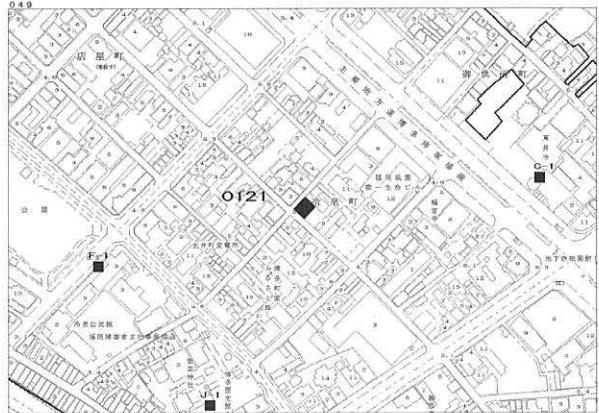
処置 記録保存

位置と環境 調査地は博多遺跡群中央部、博多浜北部砂丘上に立地する。現地標高は約6mを測る。周辺は博多遺跡群内では調査が少ない地区で、東側で90次、南側で81次調査が行われている程度である。

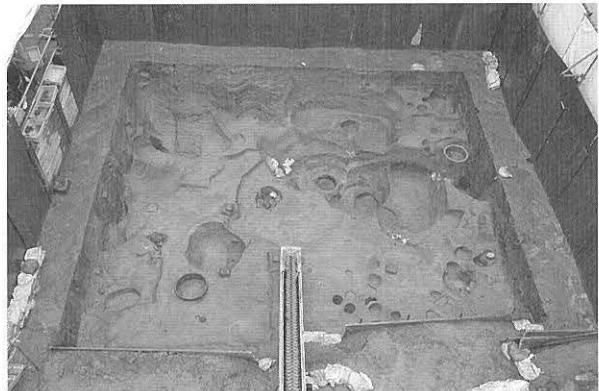
検出遺構 試掘成果をもとに大きく4面の調査面を設定した。調査は廃土の場内処理の関係から、南北2区に分割して行った。第1面は近世～中世後期。主な検出遺構は近世瓦組井戸や土坑・ピットなど。第1面は南区で近現代の攪乱が特にひどく、調査を割愛している。第2面は中世前期。井戸やピット・土坑など。井戸は桶組である。特筆すべき遺構として、獣骨（馬？）が多量に廃棄された土坑や粘土を固く敷き詰めた作業場的な遺構がある。第3面は中世前期～古代末。井戸・土坑・ピットなど。第4面は砂丘面で弥生後期～古代。砂丘面は更に細分し2面の調査を行った。上面で未検出の遺構も含んでいる。竪穴住居や土坑など。竪穴住居は1棟で弥生時代後期末頃か。この面は上面の井戸など後世の遺構により破壊されており、遺構の残りは良くない。

出土遺物 弥生後期～近世江戸期にかけての土器・陶磁器、金属器、獣骨などがコンテナ147箱出土した。

まとめ 調査では弥生時代後期から遺構・遺物を検出した。周辺ではこの時期から人の生活が営まれたのであろう。井戸は井13基確認した。集中しており実際はもっと多かったと思われる。生きるために水は必須のものであり、井戸が埋まったり、壊れたり、水が枯れたりしたら、掘り直したのであろう。その苦労の痕跡が調査で分かる。



1. 調査地点の位置 (49 天神 121 1:8000)



2. 調査区全景 (南西から)



3. SK321 (北西から)

1340 千里向川原遺跡群第2次調査 (SNK-2)

所在地 西区大字千里字天蓋183番3

調査面積 55.0 m²

調査原因 個人住宅

担当者 大塚紀宣

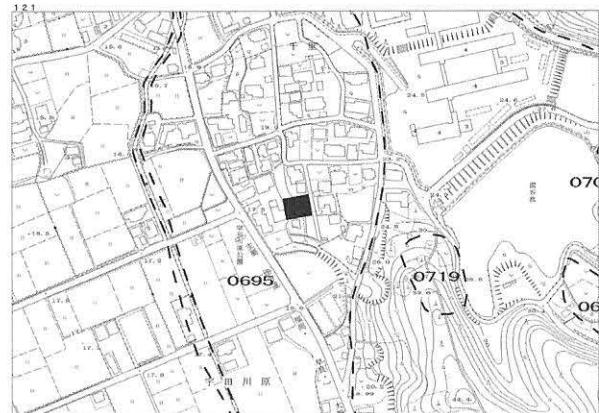
調査期間 2014.1.14～1.31

処置 記録保存

位置と環境 調査対象地は南北方向に延びる丘陵の西側斜面に位置する。周囲は昭和30年代～40年代に宅地として造成されており、調査区が位置する区画は本来宅地として造成されたところを、近隣の方が借地して畠地として開墾した場所である。敷地内は西に向かって緩く傾斜し、東西で約1mの比高差がある。

検出遺構 遺構面は20cmの厚さの耕作土の直下、明赤褐色ローム上面で、柱穴・土坑、溝状遺構が検出された。溝状遺構は調査区北西側で検出され、東西方向に延びて西側へ緩く傾斜し、調査区外まで範囲が及ぶ。断面形は逆台形で、床面は幅50cmの平坦面で礫や砂利のほか、多数の瓦が敷かれている。瓦の時期から奈良時代～平安時代の遺構と見られる。ピットや土坑からは弥生時代中期初頭の城ノ越式土器と、弥生中期中頃の須玖I式土器が出土しており、この時期の建物跡とみられるほか、溝状遺構の時期に伴うものもあると考えられる。

出土遺物 遺構からの出土遺物は前述した古代の瓦や弥生中期初頭～中期中頃の土器のほか、同時期の黒曜石破片がある。瓦は調査区の南方に位置する怡土城でみられる特徴的な瓦で、コンテナケース2箱分が調査区内から出土している。出土遺物は総量でコンテナケース5箱である。



1. 調査地点の位置 (121 飯氏 695 1:8000)



2. 調査区全景 (西から)



2. 瓦が出土した溝状遺構 (南から)

1341 比恵遺跡群第131次調査 (HIE-131)

所在地 博多区博多駅南4丁目205-1他
 調査原因 店舗
 調査期間 2014.1.20 ~ 5.25

調査面積 743.3 m²
 担当者 吉田大輔
 処置 記録保存

位置と環境 本調査地は、比恵遺跡群の北東側に立地し、遺跡群が展開する台地のうち、北台地の東側支尾根の尾根線から北東から東に向かって下る緩斜面上に位置している。現況は畠地で、調査地の南側では約90cm盛土造成が行われている。標高は、北側の盛土を行っていない部分で約5.2mである。

検出遺構 調査区内は、大きく台地上と流路跡に分かれる。台地上では2面の遺構検出面を確認し、弥生時代前期末～古墳時代中期頃までの溝、竪穴住居、掘立柱建物跡、柱穴、土坑等を検出した。流路跡では、井堰状遺構4条を確認した。

出土遺物 弥生時代前期末から古墳時代中期中頃までの弥生土器、土師器、須恵器、石製品等が出土した。特に弥生時代中期後半から後期初頭の土器が多い。流路跡では、井堰を構成する杭や横木が多く検出され、なかには建築部材の転用材もみられる。また、井堰や流路内から農具などの木製品や土器、植物の葉や種子なども出土している。

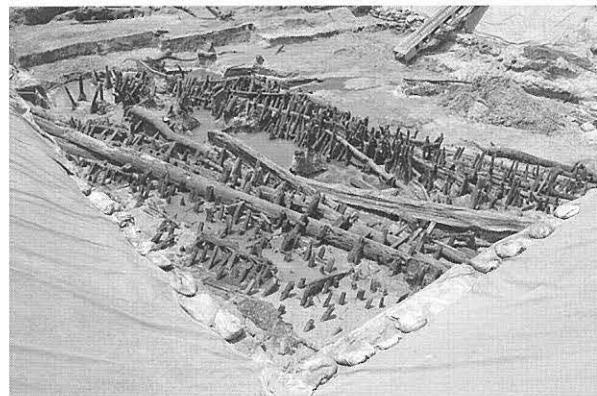
まとめ 調査では、台地上に展開していた集落跡を確認し、その東側に流れていた流路跡では、井堰状遺構を検出した。台地上で確認された溝は、弥生時代後期初頭～古墳時代前期の一定期間に連続して存したもので、その立地や水流を伴う堆積物から灌漑用水路である可能性が考えられる。井堰状遺構は、弥生時代中期末から古墳時代前期頃にかけて、補修と増築を繰り返しながら構築されている。長大な横木を積み重ね、多数の杭で固定した大規模なものであり、「護岸」としての機能も想定される。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 127 1:8000)



2. 全景 (南から)



3. 井堰状遺構検出状況 (東から)

1342 飯倉C遺跡第7次調査 (IKR-C-7)

所在地 城南区七隈2丁目1153-95

調査面積 71.6 m²

調査原因 個人住宅

担当者 久住猛雄

調査期間 2014.2.3～2.28

処置 記録保存

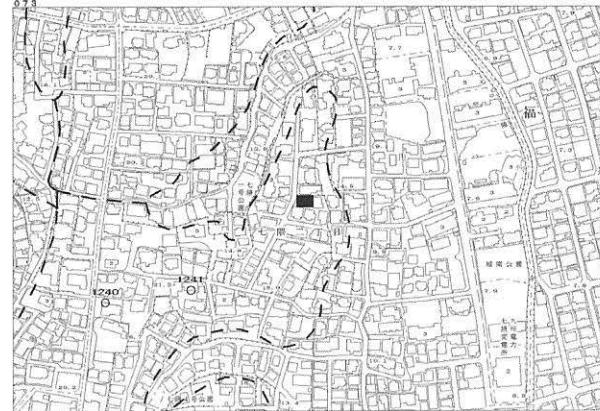
位置と環境 飯倉C遺跡は、飯倉丘陵に立地する飯倉遺跡群の一部で、遺跡群の中央やや北側の部分である。飯倉丘陵は油山山麓から北に延びる細長い丘陵であり、西側の室見川水系（早良平野）と東側の樋井川水系を画している。調査地点は飯倉丘陵東側から分かれて北側に延びる支丘陵にあり、その尾根線から東へ下りる緩斜面に位置する。周囲の標高は西側で18.8m、東側で18.6mである。

検出遺構 遺構は近年の盛土を除去した橙色の第三紀層風化土上面で検出した。調査区西側はGL-20～30cm、東側はGL-70～80cmで検出面となる。東側の削平が顕著であった。検出遺構は、竪穴住居、土坑、柱穴、陥し穴状遺構である。竪穴住居は古墳時代初頭～前期前半、その他の土坑や柱穴は竪穴住居覆土上部からのものが多い。陥し穴状遺構は竪穴住居下部で検出し、中央ピットがある長方形土坑である。竪穴住居は約5.6×7.5mとやや大型の長方形住居で、二本主柱、ベッド状遺構を三辺（短辺・長辺・短辺の半分）に設ける。各主柱穴には重複があり、壁辺ラインが二重に検出され、最低一度の建替を考えられ、南辺の壁の重複からは二度の建替の可能性もある。床面中央には二ヶ所の火廻（焼土分布）があったが、一つは焼土集中の炉址、一つは馬蹄形の土手を有し竈と考えられる。南長辺側には屋内土坑があり土器が一括出土した。

出土遺物 コンテナケース2箱分がある。大半は古墳時代前期の古式土師器だが、竪穴住居覆土を切る遺構から、古墳時代後期～飛鳥・奈良時代、中世の土器・陶磁器の破片が少量出土した。石器が僅かにある。

まとめ 飯倉C遺跡は場所により遺存良好な箇所があること、また古墳時代前期集落の一部が明らかになった。竈はその普及以前の時期であるが、同時期に多数の竈がある西新町遺跡は北へ直線2.5kmと比較的近いことが注意される。一方、他地点で多い弥生時代前期後半～終末期の遺構は認められなかった。

調査報告書は平成27年度以降に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (73 茶山 243 1:8000)



2. I区全景 (西から)



3. II区全景 (西から)

VI 平成25年度福岡市新指定および新登録文化財

平成25年度の福岡市新指定および新登録文化財は、平成26年2月13日開催の福岡市文化財保護審議会において、8件の文化財について答申を得、平成26年3月17日の福岡市公報により告示された。

1. 指定文化財の概要

区分	種別	指定名称	員数	所在地	所有者・保持団体
有形文化財	絵画	絹本著色源頼朝像 附 立花増弘筆 奉命贈聖福寺丹岩和尚書 一幅	1幅	福岡市博多区 御供所町	宗教法人 聖福寺
民俗文化財	無形民俗	唐泊の御万歳		福岡市西区大字宮浦	唐泊の御万歳保存会

(1) 絹本著色源頼朝像 1幅

附 立花増弘筆奉命贈聖福寺丹岩和尚書 一幅 (有形文化財／絵画)

絹本著色源頼朝像は掛幅に表装され二重の桐箱に収められている。法量は縦148.4cm、横111.3cmである。像容は衣冠束帯を着し、笏を持ち太刀を佩いた成年男性が左前を向いて上畳に座す姿をほぼ等身大に描く。本像の製作と伝来の経緯は、附の立花増弘筆奉命贈聖福寺丹岩和尚書や旧軸木墨書銘、その他の関連史料より明らかとなる。それらによれば元禄11年（1698）1月13日の源頼朝五百年遠忌に当たり、頼朝を開基大壇越と仰ぐ聖福寺当住（百十六世）の丹巖義誠和尚（1644～1710）はその遠忌法要を企図した。しかし当時の聖福寺には礼拝の対象として堂内に掲げる頼朝像が存在しなかった為、前福岡藩主黒田光之（1628～1707）が絵師狩野昌運に命じて山城国高雄山神護寺所蔵の頼朝像を模して本像を製作させ、前家老の立花増弘を介して聖福寺に寄附したものである。

聖福寺においては、元禄11年の頼朝五百年遠忌法要は寺院草創の由緒に関わる重要な事業として位置づけられていた。丹巖和尚は元禄6年に喜多元規筆栄西国師像、小方守房筆達磨像、狩野昌運筆出山釈迦像を新調している。これら画像と頼朝像とは画幅本地の高さがほぼ共通し、画像を掛け並べた際の視覚的な統一感が予め考慮されていた可能性が高い。また丹巖和尚は佛殿や経蔵、開山堂、方丈の什物を揃えて寺觀の整備に努めた他、元禄10年には翌年の遠忌法要に合わせ、檀家からの援助も得て一斉に寺蔵絵画類の表具修理を行っている。

本像を描いた狩野昌運（1637～1702）は、元禄年間に筑前へ下向した福岡藩黒田家の御用絵師である。昌運は江戸幕府御用絵師狩野安信の有力な門人として江戸や上方で業績を上げた。元禄3年（1690）以降、黒田綱政に仕えて俸禄を受け、江戸と筑前を度々往復して画事に係る諸々の御用を務めた。『また昌運は制作活動のみならず、「昌運筆記」等の著述を遺すなど画論家としての業績があったことも知られ、近世前期の筑前地方における狩野派絵画の普及に功績のあった絵師の一人として位置づけられる。元禄14年頃まで筑前における活動の所見があり、元禄15年に江戸で没した。本像は現存する狩野昌運の作例の中でも作域にすぐれ、製作の事情を

より詳しく明らかにすることのできる点が重要である。

本像の原本である神護寺所蔵伝源頼朝像（国宝）との関連では、本像は後代に作成された神護寺像写本の中でも最も早い時期の画像であり、かつ製作の経緯を明確に知ることのできる貴重な作品である。本像は像容のみならず、絹本の法量等も原本を踏襲しており、忠実な複製が心がけられたと考えられる。本像と附文書の存在により、神護寺像が17世紀末元禄年間の段階では確実に源頼朝の肖像であると認識されていたことが証明される。

絹本著色源頼朝像は、前近代の都市博多を代表する禅宗寺院聖福寺の由緒に関わる重要な宝物として守り伝えられてきた。大幅の絹本に源頼朝の容姿を等身大で重厚に描いた本像は、近世筑前の絵画史上に足跡を残した絵師狩野昌運の代表的な作例として、本市に所在する近世絵画の中でも特に優れた作品の一つに数えられる。また附文書の存在により、本像の製作と寄附の経緯を明確に知ることができる点も貴重である。さらに本像の原本神護寺像の像主比定を巡る議論との関連では、本像と附文書の存在により17世紀末の段階で神護寺像の像主が源頼朝と見なされていたことが明らかとなる。本像は日本絵画史上においても重要な価値をもつものであり、市文化財に指定して永く保護を図る必要がある。

(2) 唐泊の御万歳 (民俗文化財／無形民俗)

唐泊の御万歳は、現在毎年1月13日に福岡市西区の唐泊で催される「どんたく」の祭りの中で、地域の年男年女によって披露される舞踊芸能である。地域住民の中には、御万歳を唄い出しの歌詞の一節から「とくわかに（徳若に）」と呼ぶ人もある。

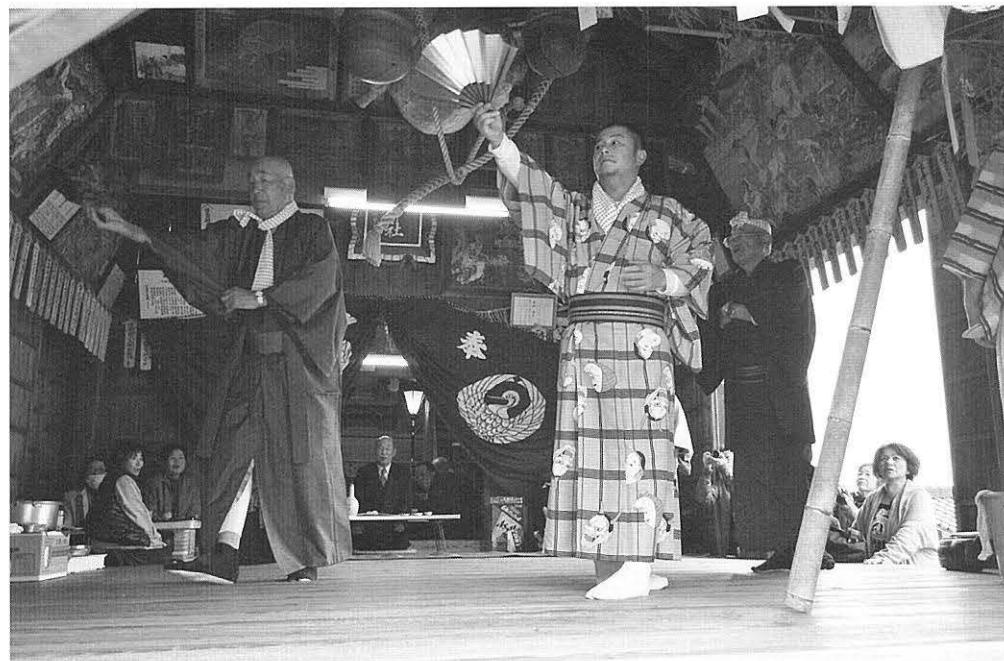
現状では、例年1月13日の午前9時頃から大歳神社へ氏子世話人が参集する。午前9時30分より神社本殿で神事が行われ、終了後、神主と参列者は本殿内にて直会を行う。この間、町内の年男・年女は唐泊地域漁村センターで待機して飲食している。10時30分を過ぎる頃、年男・年女は大歳神社へ参詣に向かう。一行は短冊等で飾り立てた篭を担いだ年男を先頭に進み、年男はラジカセから流れる「ぼんちかわいや」の歌に合わせて太鼓を叩く。女性はシャモジで拍子をとる。この行列を道囃子と呼ぶ。神社へ到着すると世話人に迎えられ、まず年男年女は拝礼して御神酒を頂く。その後に拝殿内で御万歳を舞う。舞踊は主に年男が三人で舞う。舞手は着流し姿で足袋を履き、扇一束を手にする。伴奏には締太鼓一張が用いられ、叩き手と周囲の観衆が共に御万歳を唄う。舞振りは腕を左右に開きながら体を回転させ、また扇を開いて前方に掬い上げる所作をとるなど、ゆったりとした動きの優美な舞である。舞納めには舞手が着座し、観衆と共に手締めを打つ。舞を終えると大歳神社を出て恵比須神社へ参詣し、拝礼後に再び御万歳を舞う。次いで福岡市水上消防団唐泊分団詰所、通称「救難所」へ向かい、世話人から酒食の接待を受ける。献酬が終わった後、三度目の御万歳を舞う。終了後に漁村センターへ戻る。漁村センターでは正午頃から「どんたく」の主要イベントである地区の演芸大会が行われる。センターにはお年寄りや子供を中心に町内の多くの住民が集まる。最初に年男年女それぞれがカラオケ等の出し物を披露し、年男年女の最後の出し物として再び御万歳が舞納められる。その後、演芸大会はその他の住民の出し物へと続していく。

御万歳がいつどのような経緯で唐泊に定着したかを示す資料や伝承は存在せず、現在のところその起源を明

らかにすることはできない。現状では福岡市域を中心とする筑前地方に万歳の芸能は伝承されていない。しかし近世以来、戦前までは正月に博多の市中で様々な門付け芸が行われ、その中には万歳に類するものも存在した。この近世の博多福岡で行われていた正月の門付け芸と唐泊の御万歳との相互関係も明確ではないが、『石城志』『博多年中行事』の記事を見る限りでは詞章や道具立て等、異なるものではないかと考えられる。周辺地域に類例が全く存在せず、また過去に存在したことを見示す記録もなく、地域的な広がりを持たないことが唐泊の御万歳の一特徴である。

一方で現在唐泊に伝承される御万歳の詞章は、18世紀初期に既に唄われていた地唄「万歳」の冒頭の一節と内容がほぼ共通する。またこの地唄に振り付けを施したもののが、上方舞の演目「万歳」として現在も継承されている。上方舞（地唄舞）は18世紀末から19世紀にかけて京や大坂で開始された舞踊で、能楽や御殿舞を源流としつつ、歌舞伎舞踊の影響を受けて成立した。座敷舞踊である点に特色があり、井上流・吉村流・模茂都流等の諸流派が現在も活動を続けている。唐泊の御万歳と現在行われている上方舞の「万歳」を比較した場合、舞手の装束や舞に扇を用いる点、扇を両手で前に捧げて掬い上げるような所作や舞納めに正座して拝礼する形等が似通っている。しかし上方舞で伴奏に三味線を用いる点、舞の中で足拍子を打つ点等は唐泊の御万歳とは異なっている。これに加えて、現状唐泊の御万歳を舞納める際には舞手と観衆が共に手締めを打つが、これは東京の三本締めや博多手一本とは異なるもので、大阪を中心に行われるいわゆる「大阪締め」と酷似する。

唐泊の御万歳は本市域やその周辺では他に見られない舞踊芸能である。より普遍的な観点に立てば、中世以来行われた正月祝賀の芸能万歳の系譜を引くものと評価されるが、この芸能の唐泊への伝来、定着の過程に関しては不明確な点が多い。但し現状の御万歳を見る限りでは、舞納めの手締めと共に近世の上方文化の影響を色濃く感じさせるものであり、その伝播の契機として同時代の唐泊における廻船業の隆盛に伴う上方との交流が一つの可能性として推測される。唐泊の御万歳は詞章、舞振り、手締め等に古様を多く留めると考えられる希少な民俗芸能であり、本市の指定文化財として長く継承されることが望まれる。



大歳神社拝殿で御万歳を
奉納する年男

2 登録文化財の概要

登録区分	種別	指定名称	員数	所在地	所有者・保持団体
有形文化財	建造物	大濠公園観月橋	1基	福岡市中央区 大濠公園1区	福岡県
有形文化財	建造物	大濠公園松月橋	1基	福岡市中央区 大濠公園1区	福岡県
有形文化財	建造物	大濠公園茶村橋	1基	福岡市中央区 大濠公園1区	福岡県
有形文化財	建造物	大濠公園舞鶴橋	1基	福岡市中央区 大濠公園1区	福岡県
有形文化財	建造物	大濠公園浮見堂	1基	福岡市中央区 大濠公園1区	福岡県
有形文化財	建造物	日本赤十字社福岡県支部 旧正門門柱	1基	福岡市南区大楠 3丁目1-1	日本赤十字社福岡県支部

- (1) 大濠公園観月橋 1基 (有形文化財／建造物)
- (2) 大濠公園松月橋 1基 (有形文化財／建造物)
- (3) 大濠公園茶村橋 1基 (有形文化財／建造物)
- (4) 大濠公園舞鶴橋 1基 (有形文化財／建造物)

大濠公園は国史跡福岡城跡の西側に位置する県営の総合公園である。当地はかつて草香江と呼ばれ、博多湾につながる沼地であった。福岡城築城に際して、山を削り取った土で北側を埋め立て藩士の屋敷地とし、残りが城西側の天然外堀とされ、大堀と呼ばれていた。

大正13（1924）年、日比谷公園の設計でも知られる東京帝国大学教授、本多静六と弟子の永見健一は、西公園を視察した際、南に広がる大堀を見て、公園として整備することを福岡県に進言。翌14（1925）年に、両名によって「福岡市東西両公園の大改良並に大堀公園新設設計の大方針」が作成された。この方針に基づき、大堀は当時計画されていた東亜勧業博覧会の会場として整備されることとなり、大正15（1926）年1月から埋め立て造成が開始され、昭和2（1927）年の東亜勧業博覧会を経て、昭和4年に大濠公園として完成した。造成は大堀の土砂を浚渫し、周囲の陸地部分を埋め立てて行われた。

公園の面積は39.8ha。敷地の約6割の22.7haを池が占め、周囲に園路が、池の内部に北から柳島、松島、菖蒲島が設けられ、それぞれ橋で結ばれる。平成19（2007）年2月6日には、大濠池22.7haが国の記念物に登録された。

大濠公園にある橋は、池の周囲と中島を結ぶ4基と、博多湾に注ぐ水路である黒門川にかかる1基がある。前4基は、北から、周辺園路北側と柳島に架かる観月橋、柳島と松島を結ぶ松月橋、松島と菖蒲島を結ぶ茶村橋、菖蒲島と周辺園路南側を結ぶ臥月橋である。黒門川には舞鶴橋が架かる。これらは昭和2年3月25日～同年5月23日まで開催された東亜勧業博覧会に合わせて建設されたもので、平成元年に架け替えられた臥月橋以外の橋には昭和2年3月の銘文がある。

各橋の構造形式は次の通り。

観月橋 鉄筋コンクリート造 T型桁橋 橋長 106.3m 全幅3.45m

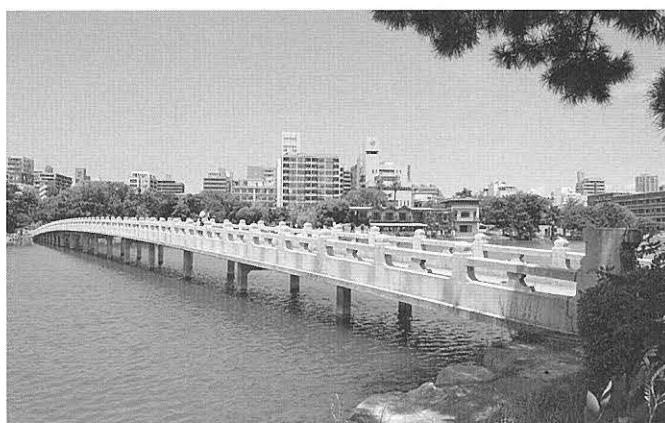
松月橋 鉄筋コンクリート造 アーチ橋 橋長 8.6m 全幅3.45m

茶村橋 鉄筋コンクリート造 アーチ橋 橋長 8.6m 全幅3.45m

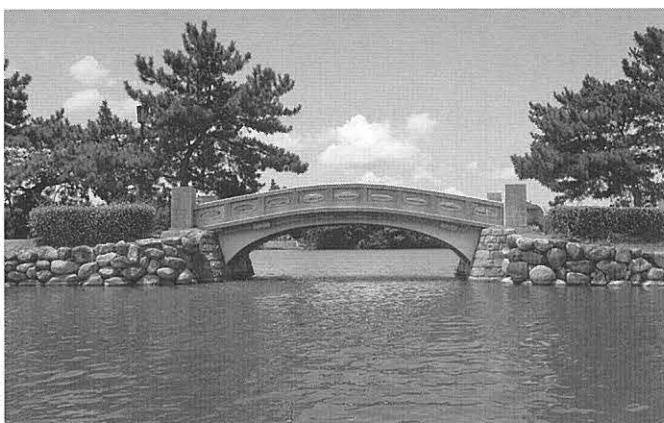
舞鶴橋 鉄筋コンクリート造 アーチ橋 橋長 22.4m 全幅13.7m

表面はいずれもモルタル研ぎ出し仕上げ。舞鶴橋のみ、欄干や親柱に自然石（花崗岩）を用いている。観月橋の高欄は角柱に宝珠を載せた形状とし、柱間には人字形の幕板を入れる。いずれの橋も、親柱を含めたデザインには、当時流行していた分離派（セセッション）の影響が見られる。設計者は不明である。

大濠公園は昭和40年頃から水質悪化が顕在化し、各種の浄化対策が講じられた。しかし改善は見られず、根本解決には池の底に堆積した汚泥を浚渫、除去するしかないという結論に至り、昭和61年から平成3年にかけて、大規模な池の浄化事業が実施された。事業は大きく底泥改善と水質改善に分けられ、前者では、汚泥を固化、埋設し、砂で覆う（池底の砂層と汚泥層を入れ替える）という作業が行われた。これに合わせて橋梁も再整備が行われ、皐月橋が架け替えられるとともに、他の橋も改修されて石の表面にモルタル研ぎ出しが上塗りされた。都市化の進む福岡市内では橋梁も架け替えが進み、戦前に遡る事例は限られる。市内の鉄筋コンクリート造橋梁の遺構例としては、他に西日本鉄道名島川橋梁（東区、大正12〔1923〕年）、新開橋（中央区、大正14〔1925〕年）、姿見橋（中央区、大正14〔1925〕年）があり、対象とする4基の橋は4番目の古さである。昭和初期の橋梁の例にもれず当時流行のデザインが取り入れられ、その姿を今に伝えていることは高く評価される。公園の現役施設として活用されており、登録文化財として長く保存、活用されることが望まれる。



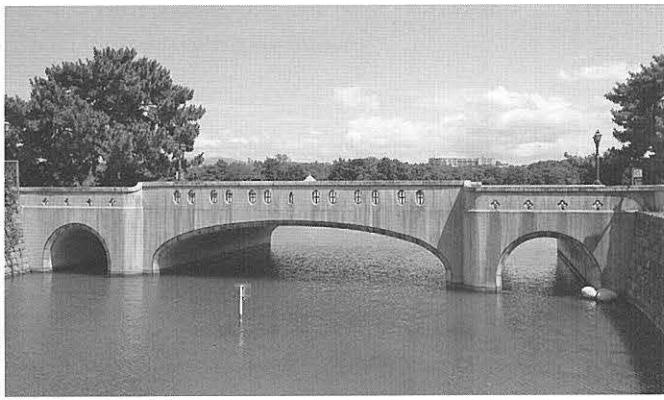
大濠公園観月橋



大濠公園松月橋



大濠公園茶村橋



大濠公園舞鶴橋

(5) 大濠公園浮見堂 1棟 (有形文化財／建造物)

大濠公園浮見堂は、大濠池内北端の柳島西側に張り出す形で設置されている。この建物は、戦前の東公園（現在の馬出小学校部分）に開園した、旧福岡市動植物園の海獣舎施設として建てられたものである。海獣舎は直径10mの円形の池で、その中央、水面から2mほどの高さに建物が設置され、上からオットセイなど海獣類の観察ができるようになっていた。建物へは、両側から太鼓橋状の橋が架けられていた。動植物園当時は、浮き御堂、あるいは浮御堂と称されていたようである。

旧福岡市動植物園は、昭和天皇即位記念行事として昭和3（1928）年に計画され、5年後の昭和8（1933）年8月に「御大典記念福岡市動植物園」として開園した。6,000坪の敷地にはゾウ、ヒョウ、ライオン、白クマ、トラ、オットセイ、ニシキヘビ、ワニ等々の多くの動物が飼育されていた。当時の新聞には、東京、大阪、京都、名古屋、熊本にあった五大動物園にも遜色しないと紹介された。その後、太平洋戦争末期の昭和19（1944）年、戦時下の厳しい状況から、福岡市の動植物園でも猛獸は殺処分、小動物は剥製にされて閉園した。戦後、跡地は福岡中学校、馬出小学校といった学校施設として使われ、動物園時代の正門は今も現地にその姿を止めている（平成24年度、福岡市登録文化財）。海獣舎の浮御堂は、『大濠公園の50年』によれば、学校建設に伴い「取り壊される運命にあった」が、これを当時の県、公園係長らが福岡市と交渉し、大濠公園に移設されることになった。運搬は市内の造園業者が行い、「屋根と下部に分けて、概ね原型のままトラックに乗せて深夜に運んだ」。その後、しばらく設置場所が決まらず放置されていたが、昭和24（1949）年に現在地に建てられたものである。

構造形式は木造平屋建の六角円堂、一重で銅板葺、建築面積は8.6m²である。

鉄筋コンクリート製盤の上に建ち、勾配の強い屋根の頂部には銅板製の宝珠を載せる。五角形の柱や垂木、天井の格縁は朱色に塗られ、化粧軒裏、天井板は白色に塗られ、コントラストが際立つ。

浮見堂は、戦前の動物園が戦時下閉園に追い込まれている中で、正門と共に残された数少ない遺構である。現在、大濠公園という人々が多く集まる場所で、憩いの場所として活用されている。福岡市近代の歴史を伝える建物として意義深いものであり、登録文化財として顕彰することにより、今後も保存、活用されることが望まれる。



大濠公園浮見堂

(6) 日本赤十字社福岡県支部旧正門門柱 1基 (有形文化財／建造物)

赤十字社は1863年にアンリ・デュナンの提唱により創立された人道的活動団体。日本では、明治10（1877）年の西南戦争の折に佐野常民らが熊本洋学校に設立した博愛社を前身とし、同20（1887）年に博愛社から日本赤十字社に改称された。福岡県委員部は翌21年に発足し、日清戦争開始直後の明治27（1894）年に福岡県支部

に昇格した。

事務所は、発足当初県庁内の兵事課内に置かれたが、その後、博多湾に臨む那珂川河口の陸軍用地2,500坪を無料借用して建てられた。明治32（1899）年、須崎裏町134番地（現天神5丁目）において起工、同35（1902）年3月に落成。建物はフレンチルネサンス様式、木造2階建スレート葺で、延べ面積240坪。建築費は約2万4千円。設計は当初福岡県技手白岩正雄に委嘱され、同技手の西原吉次郎に引き継がれた。現場監督と設計補助は白石熊太郎。施工は岩崎組。建設にあたり貝島太助ら篤志家が費用や物品を寄付した。正門は、この事務所建設に際して建てられたものである。

構造形式は石製柱門で、柱間は6.57m（柱心）、高さは3.59mである。門柱は自然石（花崗岩）が用いられており、上部の笠石は別造りである。石材については、福岡市鍛冶町の広田徳右衛門が徳山産花崗岩2本を寄贈した。徳右衛門は石材店を営んでおり、第32代総理大臣、広田弘毅の縁者として知られる。

形は、柳川市の国指定名勝立花氏庭園の門柱と共通点が多い。これは赤十字事務所建物の設計に関わっていた西原が、立花氏庭園内の西洋館の設計にも携わっていたことによる。事務所建物は、昭和20（1945）年6月19日の福岡大空襲で焼失したが、同22年8月、現在地（旧福岡市永田町25番地）に新しく建設され、さらに同24年から27年にかけて病院施設を含め建て替えられた。門柱はこの時に須崎から移築されたものとされる。

古写真によれば、明治35年の建設当時、同じ意匠の柱が左右2本ずつ計4本建つ。中央の2本の柱上に電球があり、門扉が取り付けられている。現在地に移転後の写真には、片側2本の柱と内1本の上に電球が写るが、昭和40年頃の写真には、間口が広がり、電球の載った2本のみが写る。現在2本の柱のみが残存し、門扉や電球は無い。施設は病院を含め、幾度か大規模な改修工事が行われており、門柱は現在の施設内でもその位置を変えていると思われるものの、平成25（2013）年の大規模改修においても入口にその姿を残しており、所有者の保存の意志が強く示されている。残る二本の門柱は久留米市宮ノ陣の久留米赤十字会館に移設されている。

日本赤十字社福岡県支部の当初の事務所建物は、福岡市内でも最初期の本格的西洋建築と評価される。その建物とともに建てられた門柱は、当初の位置から移転し、電球や門扉が失われるなどの改変は受けているものの、建設の経緯が明確であり、日本赤十字社福岡県支部の歴史を伝える貴重な遺構である。登録文化財として顕彰し、長く保存されることが望まれる。



日本赤十字社福岡県支部
旧正門門柱

報告書抄録

ふりがな 書名	ふくおかしまいぞうぶんかざいねんぽう 福岡市埋蔵文化財年報							
副書名	平成25（2013）年度版							
卷次	28							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	佐藤一郎							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	福岡市中央区天神1丁目8-1							
発行年月日	平成26年12月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		(m ²)	
すせんじいせき 周船寺遺跡（第22次）	にしくおおあざせんり 西区大字千里425-1	40135	689	33-33-55	130-14-27	2013.5.27～ 2013.6.6	90.0	記録保存
いじりびーいせき 井尻B遺跡（第39次）	みなみくいじり 南区井尻4丁目172番12	40134	90	33-32-58	130-26-33	2013.6.3～ 2013.6.18	57.2	記録保存
なかいせきぐん 那珂遺跡群（第146次）	みなみくごじっかわ 南区五十川1丁目13番1号	40134	85	33-33-45	130-26-8	2013.8.19～ 2013.8.21	23.1	記録保存
けやごうびーいせき 警弥郷B遺跡（第6次）	みなみくやなが 南区弥永五丁目4番1	40134	158	33-31-35	130-26-6	2013.9.9～ 2013.9.21	92.1	記録保存
ありたいせきぐん 有田遺跡群（第253次）	さわらくありた 早良区有田1丁目13-4	40137	309	33-33-56	130-20-15	2013.10.1	15.0	範囲確認
なかしまかまあと 中島窯跡（第1次）	みなみくかしわら 南区柏原1丁目1306-1・2、1307	40134	189	33-31-40	130-24-0	2013.12.9～ 2013.12.21	102.0	範囲確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
周船寺遺跡（第22次）	集落	弥生	土坑+小穴+包含層	弥生土器	
井尻B遺跡（第39次）	集落	古墳	柱穴	土師器	
那珂遺跡群（第146次）	集落	古代	溝+柱穴	土師器	
警弥郷B遺跡（第6次）	生産遺跡	古代	水田跡	弥生土器+土師器	
有田遺跡群（第253次）	集落	古墳	土坑+竪穴住居跡+柱穴	土師器+須恵器	
中島窯跡（第1次）	生産遺跡	古墳	窯跡	須恵器	須恵器窯跡3基確認

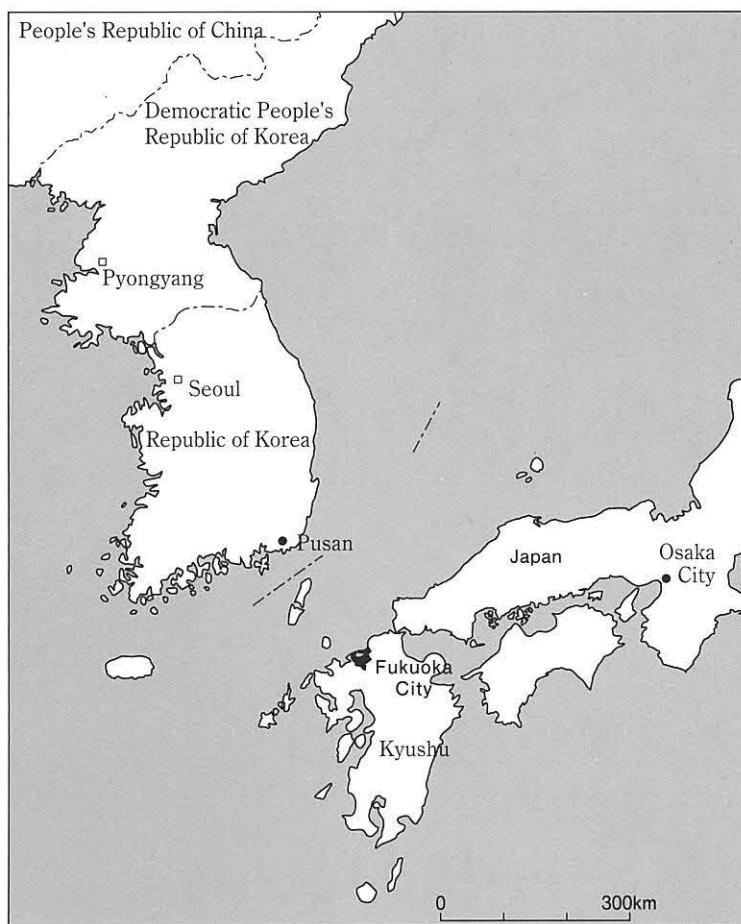
**福岡市埋蔵文化財年報
Vol.28
— 平成25(2013)年度版 —**

発行日 平成26年12月26日

編集・発行 福岡市教育委員会
埋蔵文化財第1課
〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1

印 刷 協文社印刷株式会社
〒819-0001 福岡市西区小戸4丁目24番5号

THE ANNUAL REPORT
OF
THE BURIED CULTURAL RELICS OF FUKUOKA CITY
VOLUME 28



THE BOARDS OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY

DECEMBER 2014

JAPAN